



わたしには鬼が憑いている。

白く長い髪の毛を風に揺らし、頭上に二本の角^{つの}を携えた、吸血の鬼が。

「鬼憑きなんぞ泊められるかってんだいっ！」

わたしの後ろに控えているその鬼のせいで、わたしはまた桶の水をかけられた。その前にかけられた分は、まだ乾いていない。吹きくる晩夏の風はすでに冷たく、わたしの体温を容赦なく奪ってゆく。

水をかけたおじさんは「ふんっ」と鼻息を吐くと、その桶までわたしのほうへ投げつけ、まわれ右をして宿のなかに戻っていった。目の前でぴしゃりと、戸が閉じられる。

わたしは濡れた着物のせいで重い手を振りあげて、投げられた桶を戸に投げ返してやった。「なにも桶を投げなかったっていいでしょ！　ただで泊めてって言っているわけじゃないんだからっ」

それも、もう何度目かの叫びだった。けれど変わらず戸が開くことはなく、それどころか、「今、鬼憑きの娘が泊めてくれって来てな～」

「まあ気味が悪いっ。そんな娘泊めたら、評判悪くなっちまうじゃないか！」

「だから断ったよ、当然だろ」

隙間から漏れてくる会話に、わたしはひとつ息を吐く。それからゆっくりと振り返り、後ろの鬼をきつく睨んでやった。

(自分のせいだというのに)

顔色ひとつ変えず、そこに立っている鬼。人を刺す刃物のように鋭く紅い^{あか}右眼で、わたしを見つめ返している。左眼は長い前髪で隠れているので、その色を見ることはできない。

「どうしてわたしの後ろをついてくるのよ……!?’

せめて部屋を借りるときだけでも、隠れていてくれたら。

何度そう頼んでも、この鬼は聞き入れてくれなかった。

かわりのように、自分の着ていた羽織^{はおり}を脱いで差し出してきたので、わたしはそれを受け取らず横を通りすぎる。

「いらないわよっ」

そんなものを着ていたらまた、断られてしまう。宿泊を断られたのは、これで十三軒目だった。

(鬼憑きだから)

不吉だから。

「鬼がいるんだから、外で寝たって平気だろう？」

そう言われたこともある。

鬼はなにか不思議な力を持っているのだと、みんな思いこんでいるのだ。実際はこうして、ずぶ濡れのわたしから落ちる雫をなめるように、後ろをついてくることしかできないのに――。

そのまま沈みっぱなしになりそうな心を、励ますようにわたしは激しく首を振った。

(落ちこんじゃ駄目、ちゃんと今夜の宿を探さなきゃ！)

すっくと立ちあがって、大地をしっかりと踏みしめるような足取りで歩き出す。

実に十万の人が暮らすというこの伊波^{いなみ}の町。着いたばかりの頃は新鮮に映っていた白壁も、瓦屋根も、そろそろ憎らしくさえなってきた。山のなかと違って建物はこんなにもたくさんあるのに、お金はちゃんと払うと言っているのに、誰にも頼いてもらえないのだった。それどころか、道行く同じ年頃の娘さんには怖がられ、米俵を積んだ荷車を運ぶお兄さんには突き飛ばされ、格子戸の向こうからはくすくすと笑われ、わたしがいくら前向きに進もうと思ってもだんだん嫌になってくる。人がこうなら物も加勢して、お店ののれんは風に揺られてわたしの頬を叩くし、店先に置かれたかごはわたしの足をすくうのだ。

派手に転んで、わたしはその場にぺたりと座りこんでしまった。この町に来る前からしみだらけの小袖^{こそで}には、乾く余裕も与えられない。おかげで尻のあたりや裾もとに、ばっちり土がこびりつき。

「……っもう、なんなのよ……」

絶対泣かないと決めて町へやってきたのに、一日目からさっそく破るはめになった。

(わたしは、働きたいだけなのに)

働いて、じじの薬を買うお金が欲しいだけ。

恵んでくれだなんて言っていない。

ただ生かしたいし、生きたいの。

(普通の、人間なのに)

わたしは首を動かして、相変わらず無表情な鬼を見あげた。

鬼が憑いているというだけで、わたしは人間だと思ってもらえない。みんな怖くて鬼には手を出せないから、わたしに悪意を向けてくる。

「こんなところで座らないでちょうだいっ！ あなたのせいで変なうわさが立つと困るのよ！」

わたしの視界の斜め前、勢いよく開いた格子戸からまた、桶を手にしたおばさんが出てきた。そしてなんと、今度は頭の上から勢いよく水をかけられる。

「ほら早く、行った行った！」

自分で直接触れたくないのだろう、桶でわたしを押しやって、無理やり立たせようとしてくるのだった。

「……ごめんなさい」

目に入りそうになる水を腕でぬぐって、立ちあがる。

わたしが迷惑をかけているのは確かだし、いつまでも座っているわけにもいかないのだ。

(もうすぐ、日が暮れる)

提灯^{ちょうちん} なんか持っていないわたしは、満月の今日を狙ってこうしてやってきたけれど、夜が更ければ更けるほど宿を探しにくくなることはわかっていた。

早く探さなければならない。

とりあえず、ここを動かなければ。

(――でも、どっちに?)

もうこの町のどこにも、わたしの居場所はないような気がして。

自分がどちらから来たのかも、わからなくなってしまった。

わたしの目の前に、するりと手が伸びる。

「え……？」

それは白い着流しの、鬼の腕だった。

(なに?)

身体ではなく、指先を目で追うと……その先には、「宿」という看板が見えた。

でも――

「あそこはよけい無理よ！ だって二階建てのあんなに立派な宿だもの。わたしなんか泊めてくれるわけないわ」

訊く前からあきらめたくなるほど、大きな宿だった。障子のはられた窓からは笑い声が絶えず、^{あんどん}行灯よりもはるかに明るい光が人影を映し出していた。そんな窓がいくつもあって、かなり混んでいるのだろうことがわかる。そのすぐ横に立っている、黒光りする瓦屋根まで届きそうなほど高い柳だって、わたしに「近づくな」とでも言うかのように揺れていた。

「どうせまた、水をかけられるだけよ」

告げたわたしを無視して、鬼は歩き出す。

「あ！ ねえちょっと……？」

(どうしたの?)

それは初めての出来事だった。鬼がわたしの後ろをついてくるのではなく、自分から前を歩くな。でもそれは同時に、鬼の視界にわたしが入っていないことを示していた。

(今なら、逃げられる?)

鬼は見つけた宿に向かってまっすぐに歩いている。今なら鬼のそばから離れられるかも――そんなわたしの思考を見抜くように、ずきりと胸が痛んだ。

「あ……」

それは比喩などではなく、本当の痛み。

わたしの左乳房に刻まれた、^{けい印}契印のせいだ。

わたしは思わず胸に手を当て、せっかく立ちあがったのにまたその場に座りこんでしまった。印が反応している。

おまえは鬼のものなのだと。

離れることは許さない、と。

強い視線を感じて、ふと顔をあげた。

鬼と目が合った。

「……っ」

痛みが、和らいだ。

(一一行かなきゃ)

ふらりと、立ちあがる。

今はまだ離れられない。

そのことだけは、痛いほどよくわかった。



「一ーおや、どうしたんだい、そんなにずぶ濡れで」

わたしの腰ほどまである長いのれんをくぐってなかに入ると、番台にいた女性に声をかけられた。わたしは忙しく駆けまわっている女中たちを横目に見ながら、半ばやけくそな気持ちで声を張りあげる。

「あのわたしっ、今夜の宿を探しているの。お金ならちゃんとあるから、泊めてください！」

「そりゃあもちろん、かまわな一ー」

女性の表情が突然凍ったのは、わたしの後ろから鬼が入ってきたからだろう。一瞬見せてくれたやさしい色は見る影もなく、化けものを見る目でわたしを睨んでくる。

「.....あんた、鬼憑きかい？」

「そうだけど、わたしは間違いなく人間だし、この鬼だって人に危害を加えたりしないわ！ どうか泊めて.....部屋がなければ、お台所の隅でだっていいのっ」

これが最後の好機かもしれないと、わたしは必死に訴えた。

「お願い！ 迷惑はかけないから」

でも必死になればなるほど、女性は顔を歪めて、

「近づかないでおくれよ！ 迷惑はかけないって.....あんたがここにいること自体、すでに迷惑なんだっ」

「それは.....っ、わかってるけど.....」

だからといって、簡単に引きさがるわけにはいかない。

「でも、わたしは.....」

「すぐに出ていっておくれ」

「嫌ですっ」

そんなふうになわたしたちが大声を出しあっているとやがて、もっと近くで見ようと宿のお客さんたちが集まってきた。どの人も、わたしとは比べものにならないほどきれいに洗濯された着物を着ていて.....わたしより明らかに年若い娘さんでも、髪を上手に結びあげ、わたしが見たこともないような可愛らしいかんざしを挿していた。

(あ.....)

突然、それまでは感じなかった恥ずかしさがこみあげてくる。

わたしはといえば、何度も洗濯をしすぎてよれよれの小袖に、髪の結いかたも知らず垂らしたまま。おまけにびしょ濡れで、尻には泥までついている。

ただの、山女なのだ。

「なんだ？」

「どうしたどうした」

「鬼憑きがあきらめるのか？」

なにも考えられないほど、顔が熱を持ってしまった。後ろに立つ鬼にはもしかしたら、わたしの顔から立ちのぼる湯気が見えているかもしれない。

それ以上なにも言えないまま立ち尽くすわたしは、

「ほら、早く出ていきなっ」

女性に肩を押されて、尻もちをついた。それでも鬼はやはり、支えてもくれないのだ。

小袖の裾がはだけて脚が見え、あまりの恥ずかしさにもう死んでしまいたかった。

たとえばあの可愛らしいかんざしで、この胸を突けたら――

(でもわたしが死んだら)

じじも死んでしまう。

そう思うと、かんざしから視線をはずすしかなくて。

わたしは目をつむった。

――そのときだった。

「なにを騒いでおるのじゃ？」

よく通る高い声が響き、その場がさらりと静かになった。

わたしがそっと目をあけて、声のした階段の上に視線を向けると、

「二階まで声が届いておるぞ。他のお客さまに迷惑であろう？」

声色とはまるでそぐわない口調で続けたのは、黄色い花の振袖ふりそでを見事に着こなした、十歳くらいふようの小さな女の子だった。

「芙蓉さまっ」

誰かがその名を呼ぶ。

次の瞬間。

(えっ!?)

驚いたことに、そのおしとやかそうな女の子――芙蓉が階段の手すりに飛び乗り、上手にすべりおりてきたのだった。

「芙蓉さま！ それをしてはいけないと、いつも言っているでしょう!？」

その後ろから、付人らしい女中つきとが駆けおりてくる。

(なに……?)

芙蓉はまっすぐにわたしのところへやってくると、尻をついたままのわたしの前にしゃがみこんだ。

「芙蓉さま、その者は鬼憑きですっ、近づいてはなりません！」

口ではそう言いながらも、女中は芙蓉を連れ戻そうとしない。わたしがふと横を見ると、すぐそばに鬼の足があった。いつの間にかわたしの後ろではなく、横に移動していたのだ。だから他

の者は近づけない。

――はずなのに。

前に視線を戻すと、興味津々という顔をした芙蓉と目が合った。すぐ近くで。

「ぬし、山の娘じゃな？ なぜ町へおりてきた」

「あ……」

町に来て初めて、理由を訊かれた。訊いてくれた。

こうなることがわかっていて、やってきたわたしを、やっと不思議に思ってくれたのだ。

わたしはそれだけで嬉しくて……言葉に詰まった。

「じじが……病気で、薬が……欲しいから、町で働きたいと思って……」

みっともなく泣きたくはないから、必死に目をこする。鼻をすすりあげる。

「そうか」

芙蓉はそれだけ応えると、今度は立ちあがってわたしの横にいる鬼を見あげた。

「これは、本物の鬼か？」

もうひとつ訊かれて、今度は違う意味で言葉に詰まる。

(本物の?)

この鬼が本物か贋物かなんて、考えたことはない。

ただ、じじがわたしにこれは鬼だと説明してくれていたから。わたしはそれを信じていた。

「わたしのじじは、そうだと言っていたけど……」

わたしも鬼を見あげると、鬼は珍しく表情を崩し。

(あ……っ)

笑ったのだ、口を開けて。その口のなかには、血を吸うための鋭い牙が見えた。わたしたち人間とはまるで違っていた。

「ふむ」

芙蓉はまた短く応えて……なにを思ったか、わたしに手を差し伸べてくる。

「この町の外では、人間よりも鬼のほうが多いというがな、わらわはそれを見たことがなかった。たまにやってきても、周りの者がわらわには見せまいとするのじゃ」

「あたりまえです！ そんな不吉なもの、芙蓉さまにはお見せできませんよっ」

口を挟んだ女中をひと睨みして、芙蓉は続けた。

「でもわらわは見てみたかったのじゃよ。じゃから、見せてくれたぬしに感謝する。礼として、わらわの付人にしてやろうぞ」

「えっ!？」

「っ芙――」

呼ぼうとした女中の声は、芙蓉の長い袖にあしらわれた、大輪の花に遮られる。

それは左手。右手はまだ、わたしに差し出されていた――

「あの……」

付人にしてもらえるのは嬉しい。だってわたしはただ宿を探しに来たのではなく、仕事を探しに町へやってきたのだから。でも付人となると、この小さな芙蓉に重い負担がかかることはわかりきっていた。付人とは、その名のとおり主人に付き添うもののこと。できる限りそばにいて、世話をする役目なのだ。それくらいのことはじじから聞いて知っていたし、だからこそわたしはためらうのだった。

なかなか手を伸ばすことのできないわたしに、芙蓉は不思議そうな顔で首をかしげる。

「わらわの付人では嫌か？」

「そんなことは……っ」

「なら、いいじゃろう？」

そのあまりに無邪気で可愛らしい笑顔に――わたしは、頷くしかなかった。

「そうじゃ、『さま』はいらんからな？ 芙蓉と呼べ」

芙蓉は、この宿・室伏^{むろぶせ}を営んでいる夫婦の娘だった。室伏は伊波の町いちばんの稼ぎ宿で、町のために多くの出資をしているため、そこの娘である芙蓉は、「さま」という敬称をつけて呼ばれているのだ。

芙蓉は宿二階の最奥にある角部屋をあてがわれていて、わたしたちはまずそこへ通された。畳の上に転がっているものなどひとつもない、よく掃除の行き届いた部屋だった。奥には日用品が入っているのだろう葛籠^{つづら}がきれいに並べられていて、部屋の四隅に置かれた高価な蠟燭^{ろうそく}がちろちろと燃えていた。わたしが山で暮らしていたときは、拾ってきた枝などを燃やしたり、たまに手に入る魚油を燃やしたりしていたけれど、その明るさや臭いの違いに、わたしはただただ驚いたのだった。

「父上と母上は、他の宿へ行っていておらんのじゃ。帰りしだい紹介するゆえ、ぬしは身なりを整えておくがよい」

わたしが戸のそばから動けずにいると、先に部屋のなかへ入っていた芙蓉がそう声をかけてくる。

しかしわたしには、他に着るものがないのだ。

ほとんど手ぶらのようなわたしに気づいていたのか、芙蓉は小さく笑うと。

「心配せんでも、わらわの着物を貸してやろう」

「ふ、振袖は無理よ!? わたし、おそらく二十歳近いんだから……」

思わず口にした。これを着ると、今芙蓉自身が着ているような振袖を出されても困るのだ。振袖は若い娘が着るもので、わたしのような年増が着るものではない。

すると、部屋の奥にある葛籠を開けようとしていた芙蓉は振り返って。

「なんじゃ？ その『おそらく』というのは」

そう訊いてきた。

わたしは歯を食いしばる。

「――山に捨てられた、子だから」

自分の正確な年齢など知らない。

ただじじに拾われたときからは十八年ほど経っていたから、自分では二十歳近いのだと思っていた。

「身体を拭きながら、詳しく聞こうかの」

そう言いながら芙蓉が取り出したのは、わたしが今着ている緑の小袖とよく似た、けれどしみひとつない、美しい小袖だった。



「ねえ芙蓉――これじゃあ立場が逆じゃないの？」

わたしを無理やり着替えさせたあと、芙蓉はわたしを布団の上に座らせ、先ほどの言葉どおり

本当にわたしの身体を拭いてくれているのだった。

(冗談かと思ったのに……)

脱がされた小袖は腰帯のところでとまっていて、わたしの上半身は完全にあらわになっている。今日つけられたあざも、ずっと昔からついている――契印も。

「たまにはわらわも、人の世話をしたいのじゃよ」

と、右腕を拭きおわった芙蓉は、次に左腕を拭いてくれる。

でもやはり、とても居心地が悪い。

「あとでわたしも芙蓉の身体拭くからね？ 逃がさないわよ!？」

「あは、逃げぬよ。ぬしはわらわの付人なのじゃから、それは当然のことじゃろう？」

笑いながらあっさりと返されて、わたしは苦笑した。

「それより、このあざは町人たちにつけられたのか？」

背中にまわりこんだ芙蓉は、灯りが消えたような声で問いかけてくる。

「仕方がないことよ。本当は、こうして町へおりてきたわたしのほうが悪いんだもの」

鬼や鬼憑きが嫌われているということは、じじからよく聞かされていた。それでもおりてきたのは、じじを助けたかったから。町の人全員を気遣う余裕なんて、わたしにはなかった。

「じじは、^{にょほうざん}如封山に捨てられていたわたしを拾って、この歳になるまで育ててくれたの。だから……わたしはどうしても、じじのために薬を持って帰りたかった」

芙蓉は手をとめると、後ろからわたしにじゃれついてくる。わたしの右肩にあごをのせて。

「しかしおかしな話じゃのう。この世は人間よりも鬼の数のほうが多いと言われておるのに、みなはなぜ今さら鬼を怖がる。この町にいないだけで、他の土地には鬼だけの町なんぞもあるのじゃろう？ 人間に危害を加える鬼だつてごく一部で、その一部も――」

次に前へまわってくると、芙蓉はわたしの左乳房に触れた。

「こうして限定されておる。誰かれかまわずに襲っているわけではなかろう。まして契印はこんなにも美しくて……わらわには、とても邪悪なものには見えぬ」

「芙蓉……」

それから芙蓉は、前のほうも丁寧に拭いてくれた。

「わらわは鬼の話を聞くたびに不思議じゃった。どうしてみな、そこまで鬼を嫌うのじゃろうかと。そうして、同時に嫌われてしまう鬼憑きもかわいそうじゃった。じゃから先に言うておくが、わらわはぬしに同情しておる」

まっすぐに瞳を見て、告白してくれる芙蓉。だけど当然、わたしはそれに気づいていた。

鬼憑きへの対応なんて、恐怖か同情かの、二種類しかない。

「それでも、怖がられたり嫌われたりするより、ずっと嬉しい……」

かんざしひとつ飾らない、わたしの本心だった。

芙蓉はにこりと微笑むと、脱がせていた小袖を着せてくれる。芙蓉のものなので袖も丈も短いけれど、貸してもらえただけで本当にありがたかった。

「じゃあ次は、わたしが芙蓉を拭くね！ 水を汲みなおしてくるわ」

桶を手にながしわたしが立ちあがろうとすると。

「そんなものは、鬼にやらせたらどうじゃ？」

「えっ!？」

芙蓉がとんでもないことを言い出した。

しかし、鬼がわたしの言うことを聞くなんてありえない。

あまりに予想外なことを言われ啞然とするわたしをよそに、芙蓉は戸の外に控えている鬼に声をかける。

「おい鬼よ、外に水道枡があるから、水を汲んできておくれ」

(言ったって無駄だわ。いつも無視するんだから……)

心のなかで応えた――わたしを裏切り、その戸はすべるように開いた。

「え……」

鬼はつつかつと部屋のなかに入ってくると、芙蓉から桶を受け取ってすぐに部屋を出てゆく。わたしとは一度も目を合わせないまま――

(なんなの?)

そういえば、わたしの身体を拭くから部屋の外で待っていると芙蓉が言ったときも、鬼はそれに従った。だからこそ部屋の外で控えていたのだ。

遠くなる足音に、わたしは混乱する。

(どういう、ことなの……?)

そんなわたしを現実に引き戻すのは、芙蓉の手。今度は前から、抱きついてきた。

「わらわも同情されたい。――あんな鬼が、欲しい」

「ふ、芙蓉……？」

からころと笑う高い声が、わたしの心を揺らす。

「ぬしが今着ているその地味な小袖な、わらわが変装して街へ出かけるためのものなものじゃ」

「変装？」

「わらわは、伊波の町のなかでも恵まれた子どもじゃ。しかしそれゆえに、不自由でもある。たまには自由に街へ遊びに行ったりもしたいのじゃよ」

それからそっと、顔をうずめて。

「――でも本当は、ひとりで行くのは嫌じゃった。ひとりではさみしかろう？」

だからわたしを、付人にしたのだ。鬼憑きのわたしなら、誰も手を出さない。芙蓉の安全は確実で、一緒に街へ行ける。

(もしかしたら)

鬼はそんな芙蓉の気持ちに気づいていて、言うことを聞いているのだろうか……？

「じゃあ明日、一緒に街へ行こうか」

やはりわたしには、選択肢はひとつしか残されていなかった。

「本当じゃなっ!？」

わたしに恐れではなく同情を向けてくれた、芙蓉に同情を返したかった。

「うんっ。でもわたし、伊波に来たばかりで案内はできないからね？」

「それが面白いのじゃよ。一緒に迷い子になろうぞ」

「芙蓉～……」

なんでも面白いがる年頃なのか、芙蓉はけらけらと笑っている。その声に反応するかのよう、やがて窓の外から叫び声が聞こえてきた。

「きゃあああああ～～」

「ぎえっ」

「うおおおお」

「……みな、鬼に驚いておるのじゃな」

明らかにわざとなのだろう、今度はきしきしと笑う芙蓉。めまぐるしく変わる芙蓉の表情に、子どもらしさを見つけたわたしは安心する。

(どんなに大人ぶった発言をしても)

本当はまだまだ甘えたい盛りなのだ。でもきっと、芙蓉が甘えたいと思うときには両親はそばになくて……芙蓉はずっとさみしい思いをしていたのだろう。

(少しでもわたしが、そのさみしさを和らげてあげることができたら――)

わたしを受け入れてくれたからというだけではなく、心からそう思った。

「一体なにごとですか？ 静かにしなさいっ」

次の瞬間わたしの耳に届いたのは、凜とした女性の声だ。

「母上じゃ。下へゆこう……あれ？ そういえば、まだ名を聞いておらんかったな。紹介するにも名を知らぬと困る。ぬし、名はなんという？」

そうだ、わたしのほうは芙蓉の名をわかっていたから、名乗るのをすっかり忘れていたのだった。

「わたしは楓よ」

山にあるひとときわ大きな楓の木の下に捨てられていたから、そう名づけられた。

「あの鬼は？」

さらに問われて、詰まってしまう。

「わからないわ……見てのとおり、あの鬼は言葉を発しないの」

言わないのか言えないのかはわからないけれど、初めて会ったときから鬼はなにも喋らなかつた。

「ではぬしは、なんと呼んでおるのじゃ？」

「ただ――鬼、と」

わたしの周りに他の鬼はいない。だからそれで充分だったのだ。

その後鬼と合流したわたしは、芙蓉の両親であり、この宿の持ち主であるふたりと対面した。

(さすが芙蓉を生んだ人)

そう言うべきなのだろうか。ふたりがわたしに向けたのも、悪意ではなく同情だった。おかげで芙蓉の付人としてそばにいることも、許してもらえた。

そしてその日――わたしは初めて柔らかい布団というものを体験した。
初めて。

(今日だけは、鬼憑きでよかった)

芙蓉と出会ったことで、そう思えたのだった。

目を覚ましたら、横にじじ以外の顔があったので、何度も瞬きをしてしまった。

(――ああ)

そういえば昨日、芙蓉の付人になったんだっけ。

今までの山の生活との違いに、今さらながら戸惑う。付人になったといっても、まずなにをすればいいのかがわからないのだ。

芙蓉はまだ寢息を立てている。この場合、起こすべきなのだろうか？ それとも、もう少し寝かせておくべき？

困って部屋のなかを見まわすと、窓のある壁に腰かけて座っている鬼と目が合った。山にいたときも、鬼は夜になるとこうして座り、眠るわたしとじじを眺めていたのだった。もしかしたらそのあいだに座ったまま寝ているのかもしれないけれど、確認したことがないのではっきりとは言えない。

「……どうしたら、いいと思う？」

返事がこないことを覚悟して、鬼に問いかけてみた。案の定鬼はわたしから目をそらすだけで、なにも答えない。

――と思ったのだけど。

鬼はおもむろに立ちあがると、こちらへ寄ってきて、眠っている芙蓉のそばにひざをついた。それから壊れものを触るようなやさしい手つきで、芙蓉の頬に触れる。

鋭い爪を、隠して。

「――……ん……ふぁ……」

すると芙蓉は大きなあくびをして、目を覚ましたのだった。

「ああ……起こしてくれたのじゃな。こんなに静かな目覚めは久々じゃ」

まだ眠そうに目をこすりながら、芙蓉はそんなことを言う。

「いつもはうるさかったの？」

思わずわたしが問いかけると。

「時間ぎりぎりに起こしに来て、早く起きると怒鳴るのじゃよ。どうせなら余裕を持って、やさしく起こしてくればいいのか、いつも思っておった」

芙蓉は身体を起こして、笑う。

「これだけでも、楓を雇ったかいがあったな」

(起こしたのは鬼なんだけど……)

なぜか、言えなかった。

「着替えをして、下にゆこうぞ。ここでは朝ごはんは、みな揃って食べるのじゃ」

布団の上で身支度を始めながら、芙蓉はわたしを誘う。けれどわたしは簡単に、「はいわかりました」と首を振るわけにはいかない。だってわたしはひとりではないのだから。

「大丈夫なの？ わたしたちが行っても……」

まだ騒ぎになるのではないか。そういう心配があった。

しかし芙蓉はあっけらかんと笑って。

「心配ない。父上と母上が話をつけておるはずじゃ。みなわらわの言うことは聞かんでも、ふたりの言うことは聞く。顔が多少引きつっておるかもしれんが、気にするでない」

きっぱりと言い切ってくれる。

「ほれ、楓も早く着替ええ。それとも昨日みたいに、わらわにやってほしいのか？」

「まさかっ、自分で着替えるわよ！」

芙蓉から小袖をふんだくって、わたしは上着だけ着替えた。腕を通してみると、昨日の小袖とは違い袖も丈も十分な長さで。

(あれ?)

「母上の小袖じゃ。母上は地味なものはあまり着ないからの、どうせ着ないなら少しのあいだ貸してくれと、借りてきたのじゃよ」

わたしの表情から、疑問を見抜いた芙蓉が教えてくれた。

「着替えたら、次は髪じゃ。そのままじゃ変に目立ってしまうからの。鬼のほうは仕方がないにしても……楓、髪は結えるか？」

答えはもちろん決まっている。わたしは申しわけなく思いながらも、首を左右に振った。

「わらわの髪を結えるようになってもらわねば困るのう。ごはんの前に、母上のところへゆこうぞ」

「はい」

そうしてわたしたちは、朝いちばんに女将さんおかみのところへと向かった。

女将さんたちの部屋は、番台のすぐ後ろにある。なにかあったとき素早く出てこられるように、そうしているのだろうか。

旦那さまはごはんの準備を手伝っているということで、部屋には女将さんしかいなかった。そのなかは芙蓉の部屋やその他の泊まり部屋とまったく変わらない造りで、わたしは意外に思ってしまう。

(他の人よりは贅沢をしているんじゃないかと思ったんだけど)

全然そういうことはないらしい。

わたしはますますこの親子、この宿に好感を持った。

部屋に入り、さっそく女将さんの手ほどきを受ける。

女将さんは、髪の結いの基礎も知らない世間知らずなわたしでも、呆れずに教えてくれた。

それどころか。

「楓ちゃん、あの鬼の髪で練習したらどう？ 長さとかちょうどいいと思うな」

そんなことを言って、笑わせてくれる。確かに鬼もわたしと一緒に鬘まげを結っていなかった。練習はさすがに無理だと思うけれど、このままじゃやはり目立ってしまう。

どうしようかと思案していると、今度は。

「じゃあ綿帽子をかぶせたらどう？ 白い着流しに白い綿帽子、結構似合うと思うんだけど」

「母上、それは鬼に女のふりをさせよということか？」

「着物ならたくさんあるもの～」

(な.....)

なんて大胆な親子なのだろう。わたしはくらくらしてしまった。

白い着流しが白い綿帽子と合うのは間違いないが、それと鬼とは結びつかないのだ。

あれやこれやと考えて、結局は普通の布を頭に羽織ってもらうことにした。

(――ただわ)

伊波の町へと出てくるとき、わたしは鬼に同じことを頼んだのだ。けれど鬼は、わたしの言うことなど聞き入れてくれなかった。それなのに、芙蓉が頼んだことはすべて聞き入れている。渡された布も、おとなしくかぶった。

ずきんと、なぜか胸が痛む。

契印のせいじゃない。わたしの内側から、わきあがる不思議な感情。

わたしはそれを、自分で理解することができなかった。

そんな状況のなかわたしたちは、他の女中さんたちに混じって一緒に朝ごはんを食べた。山にいた昨日までは、一日一食食べられればいいほうで、朝ごはんなどほとんど口にすることはなかった。あたたかいごはんにおみおつけなんて、わたしにとっては物語でしか見たことのない憧れの存在だった。

(嬉しい)

でも心から喜ぶことができないのは、わたしを――わたしたちを取り囲むこの雰囲気のためだ。芙蓉が言っていたとおり、みんな引きつり笑いを浮かべながらも、わたしたちを直接罵ってくる人はいなかったけれど.....。

(みんな、我慢してくれているんだろうな)

鬼は相変わらずわたしの後ろに立ち、こちらを眺めている。

「のう楓、鬼はごはんを食べぬのか？」

不思議そうに芙蓉が口にすると、みんなの動きが一瞬とまった。

「食べないわ。そのかわり、いつも紅い水を飲んでいるの。知らないうちに、どこからか仕入れてくるのよ」

それは人間の血を模してつくられた飲みもので、鬼はみんなそれを飲んで生活しているのだ。長年それを飲んでみると、人間の血に興味がなくなり、その水だけでよくなるのだという。そうになると、人間そのものへの興味も薄れ、みんな鬼の町へと向かうのだそう。人間の血がどうしても必要なのは、人間から鬼になりたての鬼くらいで――しかし、だからといって手当たりしだいに吸われてはまた鬼が増え、鬼のもととなる人間がいなくなってしまうので、鬼の世界では吸っていい人間の数が決まっているという話だった。

(もちろん)

これらの話は鬼から聞いたのではない。じじから聞いたのだ。

「でも、食べるふりくらいはできるじゃろう？ そうやって眺められてはみな食べにくい。鬼よ、座して食べなされ」

並んで座っているわたしたちの、両隣の席は当然あいていた。誰もそばになど座りたがらない。この鬼だって、いつもわたしの隣には座ってくれなかった。

(それなのに――)

「ほれ、ここをあけてやろう」

芙蓉はひとつ右側にずれ、わたしとのあいだをあけた。そこに座れと言われた鬼は……戸惑った様子を見せながらも、座る。

(この鬼は……)

今まで散々わたしを振りまわしてきて、町へ来たとたんわたしを捨てようというのだろうか。捨てて芙蓉に、契印を捺すつもりなの？

喋らない鬼の思惑なんて、わたしにわかるわけがない。けれどこみあげてくるものを抑えられなくてわたしは、せっかくの朝ごはんの味を自分で変えてしまっていたのだった。



「楓。わらわはこれから ^{てならいじょ} 手習所 に行かねばならぬが、ぬしはどうする？」

朝ごはんを終えて一度部屋に戻ると、芙蓉がそう声をかけてきた。わたしはてっきりすぐ街へ出かけるものだと思っていたので、不思議に思っ

「手習所……って？」

「ああ、知らぬのか。手習所はな、いろいろなことを教えてくれる場所じゃよ。わらわはそこで平仮名や数字を覚えたのじゃ。他にもたくさん

「そうなんだ」

それはわたしがじじに読み書きを教わったのと、同じようなことなのだろうか。

「子どもはみんなそこへ通うの？」

興味を惹かれて問いかけたわたしに、芙蓉はにんまりと笑みを浮かべた。

「子どもが帰ったあとには、大人も大勢来とるんよ。楓も来るなら、特別にわらわと一緒に教えてもらえるよう、頼もう」

嬉しい申し出ではあった。わたしがじじから教わったことは、あらゆる物事の基本だけで。それ以上は町へ出てから学びなさいと、じじにも言われていたのだ。

しかし気になるのはやはり、鬼の存在。わたしは、芙蓉の命令に従って部屋の外で待つ鬼のほうへと視線を投げた。

(わたしが行ったら)

きっと子どもたちはわたしを怖がるだろう。

わたしと鬼を、怖がるのだろう。

そんな視線からわたしの考えを見抜いたのか、芙蓉は首をかしげて。

「鬼のことなら大丈夫じゃ。布をかぶってればそう簡単にはばれぬ。相手は子どもじゃからな」

ころころと笑った。

「芙蓉……」

(きっと)

万が一ばれてしまっても、芙蓉がなんとかしてくれるのだろう。そういう安心感があった。

「ほれ、もう時間じゃ。行かぬならおいてゆくが？」

「い、行くわよっ」

おいていかれても、どのみち困ってしまうのだ。そのことに気づいて、わたしはとっさに芙蓉の袖を掴んでしまった。

「あっ、ごめ……」

すると芙蓉はまた楽しそうな顔をして。

「街で迷子になられては困るからな。そのまま掴んでおってもいいぞ？ 楓」

そうからかってくるのだった。

わたしは顔が熱くなるのを感じながらも、芙蓉のあとについて宿を出る。昨日は伊波の町のすべてがわたしを拒否しているように感じていたけれど……たったひとりでも味方と一緒にいる今は、町が少しだけ輝いて見えた。

まだ陽は低い位置にあるというのに、外は活気にあふれている。荷車は行き交い、人の流れも速い。けれど不思議なことに、誰も忙しそうに動いている人はいなかった。みんなゆったりとした時間の流れを楽しんでいるかのようで、山にいたわたしが想像していた世界とは、まるで違っていたのだった。

「豆腐一。豆腐はいらんかね～」

歩き出したわたしたちの耳に、よく通る声が届く。雑踏のなかでも他の音にまぎれることのないその声は、前からやってくる物売りのもののようだ。着物の裾を豪快にたくしあげ、さらには袖も紐でとめてあるのか、肩のあたりまでしっかりと見えていた。その太い腕で担がれた天秤棒の先には桶がついていて、ぷらぷらと揺れている。それでも中身が落ちないのは、物売りの腕のよさゆえなのだろう。

「楓、夜に豆腐はどうじゃ？」

芙蓉はちらりとこちらを見ると、そんなふう聞いてくるのだけど、残念ながらわたしには豆腐がなんなのかわからない。

「……それは、食べるもの？」

これから勉強しにゆくというのに、わからないことを隠すのもおかしいと思って正直に問いかけてみると、芙蓉は少し目を広げたものの、すぐに頷いてくれて。

「そうじゃ。ええとな、大豆からつくる食べものでな。一一ほれ、天秤棒の先についておる桶の上に、白い箱がついておるじゃろう？ ああいう形をした食べものじゃよ。醤油を少し垂らすだけで、とてもおいしいおかずになるのじゃ」

そこまで丁寧に説明してくれた。だからといって、わたしに味の想像などできるはずはないのだけど。

「大豆からかあ。じゃあ硬いの？」

「いやいや、大豆をすりつぶしたものの汁を使うのじゃ。噛む必要もないほど柔らかいぞ」

そんな会話をしている間に、その豆腐屋さんがちょうどわたしたちの横までやってきた。するとすかさず芙蓉が口を開き。

「すまんが豆腐屋、夕方に室伏まで豆腐を届けてくれぬか」

「これはこれは、芙蓉さま。いつもありがとうございます。数はいつもどおりでよろしいですか？」

「そう思うが、念のため宿の者に確認しておくれ」

「わかりました」

互いに慣れているのか、それだけ確認するとまた、豆腐屋は「豆腐～」と言いながら行ってしまった。

「伊波の朝は物売りが多いのじゃよ。きつとな、そこの角を曲がるまでに、納豆屋にも会うじゃろうて」

芙蓉がそう笑ったとおり、何歩も歩かないうちに声が聞こえはじめて……豆腐屋と似たような格好をした納豆売りが、角を曲がってきたのだった。

「いいなあ、売りに来てくれるなんて」

わたしも笑いながら羨ましく思って告げると、芙蓉はきょとんとした顔をする。

「そうじゃ、ぬしは山のなかで、食べものはどうしていたのじゃ？」

「じじの畑で野菜を育てたり、山から木の実を採ってきたりしていたの。貧しいふたり暮らしだったから、じじが病気になってしまったのも仕方がないと思うわ……」

せめてわたしが、鬼憑きでなかったら。もっと早く町へ出て、じじに裕福とはいかないまでも満足のいく暮らしをさせてあげられたかもしれないのに。後ろを歩く鬼が、それを許してはくれなかった。結局わたしにはわたし以外の誰かを頼るしかすべがなく、それに応えてくれた芙蓉には、感謝してもしきれない。

「そのことじゃがな、楓。近日中に菓売りがまわってくる予定なのじゃ。来たらそやつを連れて、一度そのじじさまのところへ行こうと思おておる。すまぬが、それまでは我慢してくれぬか」

「えっ……!？」

わたしが思わず立ちどまってしまったのは、「我慢してくれ」という言葉に不満だったからではない。芙蓉がそこまでじじのことを考えてくれた事実に、驚きを隠せなかったのだ。

「ふ、芙蓉——ちゃんと考えてくれたの……？」

「ぬしからは言い出しにくいじゃろうということも、もちろんわかっておったよ。わらわは子どもじゃが、そういう目はちゃんと持つておるつもりじゃ」

芙蓉はそう得意げに胸をはってから。

「わらわにも、大事なじじがおったよ。じゃから、ぬしの気持ちはよくわかる」

立ちどまったわたしの手を握り、再び歩き出しながら、わたしに話してくれた。

芙蓉のいうじじ——大じじさまは、芙蓉にとって曾祖父にあたる人物だという。忙しい両親のかわりに芙蓉の世話をしたのがその大じじさまで、年齢にそぐわない芙蓉の言葉づかいは、その大じじさまの影響らしかった。

「大じじさまはな、三人の娘を育てあげたのじゃ」

誇らしげに語る芙蓉の手が、あたたかい。

「ひとりはもちろん、自分の娘。わらわにとっては祖母にあたる人じゃの。しかしその人が子ど

もを生んですぐ亡くのうてしもうて、その生まれた子ども――娘もまた、大じじさまが育てたのじゃ。それがわらわの母上」

そして三人目は、芙蓉自身というわけだ。

(あれ……?)

ではその大じじさまは、今どこにいるのだろうか？

考えたわたしは、ふと先ほどの芙蓉の言葉を思い出した。

『わらわにも、大事なじじがおったよ』

過去形で言っていた。つまりその大じじさまは、すでに死んでしまっているのか。

訊くことを戸惑うわたしの指先で、芙蓉は小さく肩を揺らした。

「ぬしは、少しくらい表情を隠せたほうがよいぞ？」

「あっ」

あいている手で顔を隠すが、もう遅い。

「大じじさまは、少し前に亡くなられた。……わらわはそれを看取ることができて、幸せじゃったよ」

はかなげに笑う芙蓉の横顔が、さみしい。

(この子は――)

一体どう育ったら、こんなふうに悟ることができるのだろうか？

見かけとは裏腹に、わたしなんかよりもずっと大人で。

(だってわたしは、まだ自信がない)

じじの死を看取って、それが幸せだったなんて言える？

こんなふうには笑えるの？

ひとりで生きてゆく自信さえないわたしは、逆にじじを恨んでしまうかもしれない。わたしをおいて逝くことを――

「泣くな、楓。もうすぐ手習所に着くぞ」

ぎゅっと握られた手が、さらにわたしの涙を誘った。

(深い心の広さ)

自分の大切な人を亡くしても、誰かの大切な人は守りたいと思える、やさしさ。

小さな身体にそれを育んだ環境は、どんなものであったのだろうか。

やはりそういう芙蓉の心が、この鬼をも動かしているのかもしれないと。

後ろを歩く足音を感じながら、わたしは思った。

手習所についてみると、そこはわたしが長いこと暮らしていた山小屋とあまり変わらないような、ずいぶんと古くて脆そうな木造の家だった。きっと立派な建物なのだろうと勝手に想像していたわたしは、こんなに古くて崩れないのかなと、また勝手なことを考える。

入る前にわたしがちらりと鬼のほうを振り返ると、芙蓉は察してくれて、鬼に命令した。

「鬼よ、勉強が終わるまで外で待っておれ。よいな？」

鬼は頷くわけでもなく、それでもわたしたちから少し離れると、そばの大木に背中を預けて座ったのだった。

(.....)

また複雑な気持ちが頭をもたげるわたしをよそに、芙蓉は満足そうに首を振り。

「よし、ゆこうぞ」

鬼の防御壁から解き放たれたわたしたちは、手習所のなかへと足を踏み入れた。

「――！」

意外だった。わたしの勝手な想像は、最初から間違っていたのだ。壁は内側から十分に補強されているようだし、光の取り入れかたが上手なのか、なかはとても明るかった。

室内にはすでにたくさんの子どもたちが集まっていた。そのなかの何人かが、子どもの時間にやってきた大人のわたしを、不思議そうに見あげている。机の向きはみんな違うほうを向いていて、一見するとただ散らかっているように思えるのだけど、芙蓉はこのほうが理にかなっているのだと笑う。子どもが多いせいか、壁や床には多くの落書きがあったり、やはり騒がしかったりで、あまり集中できるような環境とは思えない。それでも芙蓉のようにやる気のある子は、ここだけでかなりの知識を身につけることができるらしい。

今日の教え役――師匠は、^{おばな}尾花さん。三十歳くらいの鼻筋のよくとおった美人で、未亡人なのだという。手習所で教えている大人の多くは、尾花さんのような未亡人やお坊さん、神主さんなどで、教養と時間のある人々が交代であたっているようだ。

芙蓉が尾花さんに向けあってくれたおかげで、わたしも子どもたちと同じ時間帯に勉強させてもらえることになった。

「『女性なら大歓迎』じゃと、師匠は言っておったよ」

わたしが迷惑じゃないかと不安そうな顔をしていたからだろうか。芙蓉がそう声をかけてきたので、不思議に思ったわたしは訊ねてみる。

「男性だとなにか問題があるの？」

芙蓉がにやりと笑ったから、それもからかいの一部であったのだと、訊いたことを後悔した。

「女師匠は人気があつてのう。なかには『^{おおかみでし}狼弟子』と呼ばれる者たちもおるのじゃ。隙さえあれば師匠を食ってや――」

「もういいっ！」

わたしは自分の周りだけ温度があがっていることを自覚していた。

(ああ、嫌だ.....)

わたしはこの歳になっても、まだ経験がない。そんな話ひとつで赤面できてしまうほど、幼稚でうぶなのだ。こうして見ると、やはり芙蓉のほうがよほど大人に思えた。

そんなつもりはないのに、じわりと涙まで滲んできて。

芙蓉もさすがにまずかったと思ったのか、やさしくわたしの手をひいた。

「――楓、あちらに座ろうぞ」

そこで謝らないのが、きっと芙蓉なりの心遣い。謝られることで逆にわたしが罪悪感に気づいてしまうことを、さけたのだろう。

それに気づいたわたしは、ただ頷いて、芙蓉の促しに従った。

(わたしも、学ぼう)

ここで。

本当の意味で、大人になるということを一――

そう気合を入れて、芙蓉の隣に座る。子どもに合わせてつくってあるのか、わたしには少々窮屈な机と椅子であったけれど、座れないわけではなかったから我慢することにした。きっと子どものあと学びにくる大人たちは、みんなこうして勉強しているのだろう。

芙蓉は数日前から九九の勉強をしていて、今日も続きをやるというので、わたしも一緒にやろうと思ったのだけど。

「楓、手習所にやってきたら、まずは平仮名からじゃよ」

芙蓉の話によると、手習所では全員が同時に同じことを教わるのではなく、それぞれに合った内容を教わるのだという。文字の読み書きから始まるのはみんな一緒だけど、次にどんな知識が必要になるかは、その子どもがどんな環境におかれているかによって違う。「子どもにとっていちばん役に立つことを教える」というのが、手習所の目的なのだった。

「わらわと同じものを、無理に学ぶ必要はないからの」

芙蓉はそう告げながらわたしに一枚の紙を渡すと、自分の前に置いてあった筆と墨をわたしのほうへと押しやって、自分はいいた場所にびっしりと数字の並んだ書物を広げた。

「あ、ありがとう」

遠慮なく借りることにして、わたしは平仮名を書き出しはじめる。読み書きならば、じじから教わっていたからできるのだ。まずはそれを証明しておこう。

横でぶつぶつと九九を唱える芙蓉の、鈴音のように可愛い声を聞きながら。わたしはなんだか楽しい気分になって、筆を進めていたときだった。

「まあ楓さん！」

「えっ？」

鈴音に割りこんできた鐘のような甲高い声に、わたしは顔をあげる。

声をかけてきたのは、尾花さんだった。

「ど、どこか間違ってる……？」

わたしはじじ以外の人に、まだ自分の字を見せたことがなかった。不安になっておそるおそる訊いてみると、わたしのすぐ前に移動してきた尾花さんは、妙に瞳を輝かせていて。

「違いますわ。とても美しい『角字』^{かくじ}を書いていらっしゃるから、驚きましたの！ 伊波の町

人で、これだけきれいに角字を書ける人、なかなかいませんのよ。楓さん、手習所は初めてと言ってらしたわよね」

それはつまり、どうやって覚えたの？ と訊いているのだろう。

「じじが、教えてくれたの。角字で書くと賢く見えるからって」

わたしが答えると、尾花さんはなんと腹を抑えながら豪快に笑い出した。

「まあ、確かにそうねえ。あはは、面白いことを言う人がいるものだわ」

そうしてひとしきり笑ったあと、不意に表情を戻して。

「でも楓さん、『^{きょくじ}曲字』や『^{まるじ}丸字』も、もちろん書けるのでしょうか？」

「……………」

「……………あら？」

わたしが答えられなかったのは、それがどんな文字なのかわからなかったからだ。

「そういえば、他にもいくつか習ったような気がするんだけど……」

どれがなにで、なにがどれであったのか、すっかり忘れてしまっていた。

すると尾花さんは、さあ自分の出番だと言わんばかりに腕まくりをして、「ちょっと筆を借りますわね」と、わたしが芙蓉から借りていた筆をさっと手にする。そして、わたしが書いたかちかちと角ばった文字の横に、さらさらとなめらかに曲がる字を書きこんだ。驚いたことに、尾花さんはわたしとは逆の方向から書いているというのに、文字はちゃんとわたしのほうを向いていた。

「え？ あれえ!? 尾花さん、文字を逆に書けるの？」

「そこは驚くところではないぞ、楓。『^{とうしょ}倒書』といってな。文字を書くために、いちいち子どもの後ろにまわりこんでいたら大変じゃろう？ じゃから大体の師匠はこれができる。できない『おんぶ師匠』は、一度に大勢の子を見ることができないからの、格下に見られてしまうのじゃ」

「な、なるほど……」

言われてみれば確かに、いちいち子どもの後ろにまわりこんでいたら効率が悪い。机の向きがてんでばらばらな分、よけいにそうだ。

「で、楓さん？ 字のほうはどうかしら。これが曲字ですの……見たことあるでしょう？」

「あ、はい。読むのはできそう。ただ、書くのはちょっと、自信ないかも……」

急に恥ずかしくなって、最後まで発音できなかった。

自分では読み書きに自信を持っていた。だけど一種類ができればいいやと思って、角字以外をちゃんと覚えていなかったのも事実だ。じじはわたしが角字を書けることを喜んでいたけれど、もしかしたらわたしがちゃんと曲字などの基本を習得したうえで、角字を書いているのだと思っていたのかもしれない。

「では楓さんは、曲字の書き取りから始めましょう。角字ができるのはとても素晴らしいことですが、この町ではそもそも角字の読み書きできる人があまりいませんの。逆に曲字の読み書きができないと大変ですもの。商売なんかもこれでやっていますから」

「そうなんだ……」

わたしは今、芙蓉の付人だ。そして芙蓉は町いちばんの稼ぎ宿の娘で。商売という言葉と、ま

るきり無関係というわけではないのだった。わたしが曲字を書けないせいで、芙蓉になにか迷惑をかけては困る。

「大丈夫ですわ、そんなに難しい顔しなくても。角字ができるんですもの、すぐ覚えられますよ！ 曲字は簡単にいえば角字を崩した文字なんですから」

「はい、頑張ります！」

思わず力をこめて応えた。

(ちゃんとできるようにならなきゃ)

わたしを雇ってくれた芙蓉のために。

そう決心したわたしの横で。

「一一ぷっ」

芙蓉が突然ふきだした。

「芙蓉？」

顔を見ると……いつもの、からかうような表情。

「なにかよからぬことを考えているわね……？」

探るように問いかけると、芙蓉はけらけらと笑って。

「のう楓。ぬし、気が向いたらでよいが、室伏の番台に立ってみぬか？」

「えっ？ お宿の受付に？ 無理よわたし。今曲字ができないって、わかったじゃないの」

「甘いのう。逆に考えるのじゃよ。角字ならできるのじゃから、番台帳には角字で書きこめばよい」

「それじゃあみんなが読めな一一」

「わかりました！ その反応を見て楽しむのですわね？ 芙蓉ちゃん」

「そのたう〜り！」

「……………」

どうやらこのふたり、結構気があうようだ。

「そんなことしたら、わたしますます嫌われるわよ〜。ただでさえ一一」

(あの鬼のせいで嫌われているのに)

続けそうになって、尾花さんは知らないのだということを思い出してやめた。

「ただでさえ？ なぁに、楓さん嫌われてるの？」

興味津々で瞳を輝かせる尾花さんに、どう答えていいものか思案していると芙蓉が。

「まあ、そういう考えかたもあるってことじゃ、楓。あまり落ちこむな。わらわは賢そうに見える楓が付人で嬉しいぞ」

今度はわたしがふきだしてしまいそんなことを告げた。

(一一ああ)

やはり芙蓉は大人だ。年齢にそぐわない気遣いで、わたしのよわい心を助けてくれる。

本当は、逆でなければいけないのに。

わたしってつくづく、情けない女。

どうしてもっと、人のためになれないのだろう。

わたしは笑いながら、こっそりと心のうちだけで泣いた。



お昼をまわって一四^{ひとよっ}つ（午後二時）頃になると、勉強を終えた子どもたちがちらほらと帰りはじめた。終わる時間も特に決まっているわけではないけれど、子どもが帰ったあと大人が勉強することになっているので、みんな最初の大人がやってくる頃を目安に帰るようだった。

「尾花師匠～。今日もよろしくお願ひしまっす！」

わたしたちがちょうど帰り支度を終わると、ひとりの男性が元気よく飛びこんできた。その発言から察するに、彼が『狼弟子』というやつか。女性でもあまり着ないような、とても派手な柄の小袖を着ていた。そしてそれに負けないくらいさらに派手な羽織を合わせていて……はっきりいえば、目にやさしくない格好だった。

（と、とりあえずお金持ちなのかしら？）

「ゆくぞ、楓。ぬしが見つかるとう面倒なことになる」

「えっ？ あ、はい！」

ぐいと芙蓉に袖をひっぱられて、わたしは背中を壁につけるようにして、こっそりと外へ向かう。――が、ちょっと遅かったようだ。

「むむむ？ 珍しい！ 僕よりも早く大人が来ているなんてっ」

聞こえた声は、明らかにわたしに向いていた。

「楓！ 鬼のところまで走れ」

わたしの前にいた芙蓉はそう告げると、わたしの後ろにまわりこみ身体を押してきた。なんだか少し大袈裟な気もするけれど……あまり男性と話した経験のないわたしにとっては、声をかけられても正直困るので、おとなしく従うことにする。

「あっ、待って」

「待つのはぬしじゃ^{ひさぎ} 楸！ 女と見れば誰にでも声をかけおって」

芙蓉が立ちはだかったのだろう、そんな声が聞こえた。

「なんだい芙蓉さま？ 僕が子どもを相手にしないことに、嫉妬しているのかい？」

どうやら相手は、とことん自己中心的人物のようだ。

手習所から飛びだしたわたしは、大木のそばにいるはずの鬼の姿を探す。

「阿呆が。わらわはぬしのような者など、はなから相手にせぬ。ただの忠告じゃ」

おかしい、身体が大きい分どうしても目立ってしまう鬼なのに、見当たらない。

「忠告？」

「楓にはもう相手がおる。ぬしに手出しはさせない」

派手男――楸さんをまくための嘘だろう。おそらく証拠を見せろと言われたら、鬼を出すつもりなのだ。

（でもその鬼がない！）

一体どこへ行ったの？

今まで一度だって、姿をくらましたことなんてないのに……。

「――その男か？」

(えっ?)

低く変わった楸さんの声に、不思議に思ったわたしは振り返り、手習所のなかを覗きこんだ。

(あっ……)

鬼はなかにいた。わたしが戸口にいたのに、一体どうやって入ったのだろう。

「! ぬし、いつの間に」

自分のすぐ後ろに立っていた鬼に、気づいた芙蓉も目を見開く。鬼がよほど鋭い眼で睨んでいるのか、あれだけ元気よかった楸さんの表情がどんと青くなり、最後には軽く震えてさえた。

「きよ、きょうは、ぐあいかわるいから、か、かえるっ」

声を引っくり返させながら告げた楸さんが、こちらへ走ってくる。

「どけ！」

「きゃっ」

そのまま戸口のところに立っていたわたしは、突き飛ばされて勢いよく戸に当たってしまった。

「楓っ」

「いたたた……」

運悪く背中の中をぶつけたようだった。

「なにするのよっ！」

そう叫びたいのに、じんじんと痛む背中が邪魔して声を出せない。それどころか、すぐに立ちあがることもできなかった。

「大丈夫か？」

駆け寄り心配そうに覗きこんでくれる芙蓉に、臆物の笑顔を返すので精一杯だ。

「おい鬼っ、楓をおぶってくれぬか。これから街に出るのはやめようぞ」

「えっ、そんな! 芙蓉、楽しみにしてたのに。わたしなら大丈夫だから」

「いいのじゃ。楓は今日しかいないわけではないのじゃからな。明日でも明後日でも、時間はたっぷりあるじゃろう？」

「芙蓉……うわっ」

芙蓉の言葉に気をとられているうちに、またいつの間にそばにやってきたのか、鬼に腕をひっぱられた。

「い――っ」

あまり痛がっているのは芙蓉が心配するだろうか。そう思い、痛みを口のなかに隠す。しかし当然芙蓉はそれに気づいて、鬼に背負われたわたしを見て笑った。

「無理をするな、楓。昨日も言ったじゃろう? たまにはわらわも人の世話がしたいのじゃと」

確かに言っていたけれど、昨日の今日ではまったく「たまに」ではない。本来ならわたしが芙蓉の世話をしなければいけないのに、逆に世話をされてばかりのような気がする。

「ごめんなさい、芙蓉……」

「なあに、ぬしが謝ることではない。悪いのはあの阿呆じゃ。――それより」

芙蓉はそこまで告げると、視線をわたしから鬼に移して続けた。

「驚いたな、鬼よ。ぬし、^{つの}角なんぞ見せなくとも十分に強いではないか」

褒められて動揺しているのか、鬼の紅い右眼がぎろぎろと動く。

「はは、楓、鬼も照れるのじゃな」

(照れ!?)

照れているの？

わたしには全然わからなかった。長いこと鬼と一緒にいても、じっくりと鬼の顔や表情を見ることなんて、なかったから。芙蓉のように、気軽に話しかけることなんてとてもできなかった。

(――そうよね)

最初から、さけていたのはわたしなのだ。

鬼は初めて会ったときから、ただそばにいただけでなにも変わらない。それはきっと、わたしがどんなふうにも話しかけても、笑いかけても、同じことであつたのだろう。けれどわたしは、恐怖からさけることを選んだ。自分で選択したことなのだ。

(それなのに、鬼が芙蓉の言うことばかり聞くのが気に入らないなんて)

それはあまりにも子どもじみた感情だ。厚かましい嫉妬でしかない。わたしにはただ、勇気がなかっただけ。鬼と仲よくなろうともしなかった。友だちでもないのに、お願いや命令なんて聞いてくれるはずがなかったのだ。どうしてわたしは、それに対し複雑な気持ちを持っていたのだろう。あたりまえのことなのに。

(どうしてわたしは)

この鬼がわたしのものだなんて、思いあがっていたの……？

「さて、帰るとしよう」

芙蓉の促しに、わたしの身体がゆっくりと揺れはじめる。鬼の足の裏から伝わってくる振動が、どこか気持ちよかった。

(――すっきり)

していた。自分の気持ちに整理がついたから。

もうこの鬼は、わたしに憑いているのではない。芙蓉に憑いているのだ。

そう考えればすべてに納得がいく。

空を見あげた。

いつもより高い位置から見る空は、いつもよりもやけに澄んでいた。

ちょうど、今のわたしの心みたいに。

翌朝。

わたしと芙蓉と、そして鬼は、同じ日をくり返すかのように室伏の宿を出た。

昨日宿へ帰ってから芙蓉が薬を塗ってくれたおかげで、ぶつけた背中の痛みはだいぶ和らいでいた。

(本当は)

自分の雇い主にあたる人物にそんなことをしてもらうなんて、考えられないことなのだ。もちろん一昨日だってそう。それでも芙蓉にそれを許してしまうのは、芙蓉自身がとても楽しそうだから。小唄を口ずさみながらわたしの背に薬を塗りおえた芙蓉は。

「この薬もあと少しじゃな。薬売りが来たら一緒に頼んでおこう」

そんな気遣いまで見せてくれた。

(ついでがあるから)

薬売りのことも気にしなくていい、と。

芙蓉はそう言いたかったのだろう。

やさしさが、指先から伝わってくるかのように、あたたかかった。

そのあたたかさが、今はこの手のなかにある。

「楓。手習所が終わったら、今日こそ街へゆくぞ？」

「もちろんよ、芙蓉」

きゅっと手を握りこんで、それが堅い約束であることを確かめた。

「昨日はごめんね」なんて謝っても、芙蓉を困らせるだけなのはわかっていた。芙蓉はわたしにそれを言わせないために、いろんな心遣いをしてくれたのだから。わたしには、よけいなことを口にしない義務があったのだ。

「楽しみじゃなあ。わらわ、一度蕎麦^{そば}焼きを食べてみたかったのじゃ」

「蕎麦焼き？」

(そういえば昨日も)

手習所へ向かう道すがら、食べものの話をしていたような気がする。昨夜の豆腐の食べっぷりといい、どうやら芙蓉は食に対してかなりの執着があるようだった。

(一一そっか)

芙蓉の年齢なら、今がちょうど食べ盛り伸び盛りのときなのかもしれない。わたしは自分が常に貧しい状況にあったので、その気持ちがわからないだけなのだ。

「なんじゃ楓、変な顔をして」

「えっ!? べ、別にこれは、普通の顔よ？」

心のなかを見透かされたような気がして、わたしは慌てて繕った。

「それで? 蕎麦焼きって、そのまんま蕎麦を焼いたものとは違うの？」

話を戻すことで、芙蓉の興味をそらす。

「うむ。普通蕎麦といったら、蕎麦粉をこう、熱湯に入れてな。練って餅状にしたものをいうじ

やろう？」

「正確には、蕎麦団子って呼ぶんだっけ」

わたしがそれを知っていたのは、わたしが読んだことのある書物のなかで、それを食べる描写があったからだ。わたしはじじから多くのものを学んだけれど、同じくらい多くのものを、じじが所持していた書物から学んだ。

「そうじゃ。しかしの、蕎麦焼きというものは、そのまま焼くんじゃのうて、蕎麦を一度細長い棒状にしてから、醤油で焼いて食べるらしい」

「いつの間にか、そんな食べものまで登場してたんだ」

わたしが読んでいた書物はすべて、じじが山に住みはじめたころに持ちこんだもの、またはじじが自分で記したものであった。つまり、情報が古いのだ。

「おいしそうじゃろ！」

瞳を輝かせて同意を求めてくる芙蓉の口もとには、よだれさえたれてきそうな雰囲気がある。

「そ、そうね」

否定する理由がなかったので、同意しておいた。わたしがなぜ素直に「はい」と言えないかという、単純に実感がわからないからだ。

(芙蓉のおかげで)

少なくともわたしは、食にも職にも困らなくなった。口に入るものなにもかもが新鮮で——正直、わたしの頭はあまりついていない。初めての食べものは、おいしいと感じられるまでの時間も長かった。

(それに——)

じじはまだ、厳しい状況にある。病気で身体が動かしにくい今、ちゃんと食事をとれているかが心配だった。一応手の届く範囲には、いろいろと食べられるものを用意してきたのだけど……

。

「！」

不意に繋いでいる手が引かれた。視線を投げると、芙蓉は足をとめていた。——いや、ひっばったのは歩きつづけたわたしのほうだ。

「芙蓉？ どうしたの？」

「じじのことが、心配なのか？」

わたしを見あげる芙蓉の眼が、くりくりと動く。

「……芙蓉には、わたしの考えなんて全部ばればれね」

「ぬしの表情がわかりやすいからじゃ」

「そう？」

わたしは苦笑するしかなかった。

「鬼のことじゃって」

「え？」

振り返った芙蓉の視線を追うと、足音も立てずついてくる鬼の姿が見える。

「そんなに、怖がることないじゃろうに」

それから芙蓉は、わたしのほうに顔を戻し、強い瞳をもって告げた。

「鬼がかわいそうじゃ」

わたしはしばらく、その口もとを忘れられなかった。

(かわいそうなのは)

鬼のほうなのだろうか。

小さい頃から鬼に憑かれているわたしよりも。

本当にかわいそうなのは、鬼のほうなのだろうか。

鬼のせいで山から出ることも叶わず。

無理をして出てきても、嫌われ蔑まされるだけのわたしよりも。

(わたしが、鬼を怖がるから?)

そのせいで鬼が、わたしよりも不幸だというの?

わからなかった。

手習所に着いて――わたしはもっと、わからなくなった。

「――芙蓉ちゃん! 待っていましたのよ～」

なかに入ったとたん、声をかけてきたのは昨日の尾花さんだった。

「どうしたのじゃ? 今日はそなたの当番ではなからう?」

不思議そうな芙蓉の問いには答えず、尾花さんは手にしていた紙をこちらに見せてくる。

「これ、昨日配られていた^{かわらばん}瓦版かわらばん ですよ。ここに書いてあることは本当なのです!？」

受け取った芙蓉が目を通してある後ろから、わたしも覗きこんだ。曲字で書かれている文のよふみうなものだ。紙がちゃんとわたしのほうを向いていないので正確には読み取れないけれど、その文字の横にある山の絵の形に見覚えがあった。わたしが山のなかで迷わないようにと、じじが何度も描いてくれた絵にそっくりなのだ。

「如封山……?」

(でもなぜ?)

視線で問いかけるけれど、芙蓉はその問いには答えしてくれなかった。かわりに、

「尾花師匠、これはいつ配られていたものじゃ?」

怒っているかのような、低い声音で尾花さんに問いかける。

「残念ながら、^{ひとふた}一二つひとふた (十二時) の頃ですわ。わたくしがそれを見たのは夕方でしたけれど」

「――どこかの宿の妨害か」

きりりと下唇を噛む芙蓉に、尾花さんはため息をつきながら応えた。

「ありえないことでは、ないわね」

それからついと、わたしのほうに視線を移して。

「芙蓉ちゃんがそれだけ怒るということは、楓さんはやはり鬼ではないのね」

「……はい?」

「よかったわ～。安心しましたの! わたくし、それで昨日眠れませんでしたのよお～」

「……………」

(どういう、こと?)

『楓さんはやはり鬼ではないのね』

尾花さんからそんな台詞が出てくるということはつまり——この紙に、わたしが鬼だと書いてあるということ……?

また、わたしの表情から読み取ったのだろう、芙蓉がこくりと頷いた。

「室伏に如封山の女鬼が泊まりに来ていると、書いてあるのじゃ。そうしてわらわがその鬼を付人にしたと」

「な……っ」

わたしは言葉を失った。一体どこをどうすれば、そういうことになるのか。わたしには^{つの}角などないし、逆に鬼は、わたしとともにこの伊波の町へやってきた二日前、散々人前にそれをさらしていたではないか。昨日からは頭を布で覆っているとはいえ、ばれても仕方がないと覚悟もしていた。

(——でも!)

わたしが鬼にされるなんて、残念ながらそんな覚悟は持ちあわせていない。

ずきりと、胸に刺さるのは動揺だろうか。

だんだんと、息苦しくさえなってくるような……

「楓っ!」

「は、はいっ!?!」

突然呼ばれた自分の名で、わたしは我に返った。

「今日は特別に、わらわと同じことを学ぼうぞ」

「え?」

先ほどまでの重い雰囲気隠して、芙蓉はいつもの悪巧みをするような笑みをつくり。

「瓦版と——如封山について」



昨日と同じ机に、わたしと芙蓉が座っていた。けれど昨日と違うのは、鬼がわたしたちの後ろに立っているという点。芙蓉がなかに招き入れたのだ。そして尾花さんは、わたしたちの向かいにもうひとつ椅子を運んできて、座っていた。

他の子どもたちが楽しそうに学んでいるなか、妙に真剣な表情をし丸くなっているわたしたちは、少し異様に映っているかもしれない。

「まずは如封山についてじゃがな。楓は、昔あの山に女の鬼が住んでいたという話は知っているか?」

芙蓉の問いかけに、わたしは頷いた。

(聞いたことがある)

「じじがそんな話をしていたわ。だからみんな鬼を恐れて、この山には入ってこないんだって」
おかげでわたしたちの生活は誰にも邪魔をされることなく、つい先日まで続けることができていたのだった。

尾花さんはあらかじめ用意していたのか、なにかの書物を開きながら口も開く。

「そもそもあの山はね、昔々、鬼よりもまだ人間のほうが多かった頃には、^{にえ}贄を捧げるために使われていたそうですの」

「にえ？」

「生きたまま山へ連れて行って、木にくくりつけて置いてくるのじゃ」

「！」

ちくりと、わたしの胸に棘が刺さる。

「山の神の存在が、強く信じられていたのですわ。雷や雨がやまなかつたりすると、女の子をひとりさらって、そんなことをしていたようで」

「さらって……!？」

それはつまり、同意のうえではないということ。

「じゃから『女』の『口』を『封』じる『山』なのじゃと、わらわは大じじさまに教わった」

「そう、贄にされたことを、誰にも言わないように。一言言えないように」

「そんなっ、ひどい！」

「そう思う人が他にもいたからこそ、如封山に女の鬼が現れたとき、それが贄にされた女の子のうちのひとりに違いないと、うわさが広まったのですわ。きっと心のどこかに罪悪感があって、黙っていることに耐えられなかったのね」

「おかげで伊波の町の者は、みな知っておる。あの山に女の鬼がいたことを。そこにこの瓦版じゃ。こんな書きかたをされておったら、信じる者も多いじゃろうて」

「わたしがその、女の鬼だと……？」

それだけじゃない。

もともとは贄にされた女の子なのだと思うれているのだ。町の人々を恨んでいると勘違いされてもおかしくはない。

「どうして、そんな……」

あまりにも予想外なことが降りかかってきて、わたしの思考は混乱していた。

(わたしは人間よ?)

鬼が憑いているというだけでも大変なのに、実際に鬼だと思われては、この先どうしていいかわからない。

「瓦版の配られていた時間帯も悪かった。夕方のはやしがわら 囃し瓦なら、誰も信用しなかったのじゃろうがな」

「囃し瓦？」

聞き慣れない言葉をただ返すと、芙蓉は珍しく苦笑を浮かべた。

「瓦版には二種類あっての。夕方に三味線でしづかがわら 囃しながら嘘ばかり売り歩く囃し瓦と、昼にこっそ

りと売り歩くあるくしゅがかがわつ 静か瓦 じゃ。囃し瓦のほうは、みな七分は嘘だとわかって買ってゆくのが、静か瓦のほうは信憑性の高さを売りにしておく」

(だから)

だから芙蓉は最初に訊いたのだ。これはいつ配られていたものかと。

囃し瓦なら、みんな嘘だと思うだろう。けれど静か瓦なら、本当だと信じてしまう人が多いかもしれない。

「山の女鬼の話と、見事に噛みあわせてしまっているのですものね」

「そうじゃのう」

それからしばらくは、無言が続いた。ふたりともこの疑いを晴らすための作戦を、考えてくれているのだろう。

「……………」

(一一でも)

わたしは半分、あきらめていた。

わたしは鬼憑きだ。

けれど鬼そのものではない。

みんなそれをわかっているはずなのに、わかってくれなかった。

わたしがこの町にやってきたあの日、わたしに向けられていた視線は、鬼に向いているものとなんらかわりがなかったのだ。芙蓉だけが唯一、最初からわたしを人間として見てくれた。そして鬼をも。

(だから)

きっと無理だろうと。

信じて怖がって逃げるほうが、わたしを人間だと認めることよりもはるかに簡単だから。一度疑われたことを無にするなんて、わたしには無理だ。

「一一楓」

名を呼ばれ、いつの間にか俯いてしまっていた顔をあげた。頬を、あたたかい線が走る。

「ぬしは、鬼憑きでいることと、鬼と思われることと、どちらをよしと考える？ もちろん、どちらも嫌であることは、わかっていて訊いておるのじゃが」

垂れ流したまま、わたしは口を動かした。

「わたしは、人間よ」

その瞬間、ふわりとわたしの目の前に、なにかが落ちてきた。顔に触れたそれが、瞳からあふれ出る水を吸い取ってくれる。

(これは……)

見覚えのある布。

(一一そうだ、鬼にかぶせていた布だ！)

振り返ると、鬼はその角を、光の下にさらしていた。

「ひい」と、尾花さんの小さな悲鳴が聞こえる。周りで勉強していた子どもたちも、一様に息を呑んでいた。部屋の時間がとまったかのようだった。

「大丈夫じゃよ、みなの子。こやつも人間と変わらん。ただすこおし角があつて、ただすこおし眼が紅くて、ただすこおし不老長寿なだけじゃ。のう？」

楽しそうに笑う芙蓉を、尾花さんは不思議なものを見るような目で見ていた。

「これも大じじさまから聞いたことじゃ。なにを怖がることがある？ 鬼とて不死身ではない。いずれは死ぬときがくる。まして鬼は、鬼だけでは子を成すことができぬという」

「えっ……!？」

それはわたしも初めて聞いたことだった。

「つまりの、人間は鬼などいなくとも生きてゆけるが、鬼は人がいなければ増えることもできぬのじゃよ。人を殺しすぎれば困るのは鬼のほう。鬼はそれをよくわかっておるからこそ、人から離れた土地で国をつくり暮らしておるのじゃろうて」

「あ……」

つい声をあげてしまったのは、それを証明する鍵をひとつ、わたしも知っていたからだ。

「どうした？ 楓」

「……わたしのじじは、こんなことを言っていたの。鬼は^{えもの}獲者に契印をつけるけれど、その獲者がひとり以上子を成してからでなければ手を出すことはない、と」

わたしがこの鬼をあんまり怖がるから、教えてくれた。それは人を減らさないためでもあるし、長い目で見れば鬼を増やすためでもあった。

(鬼だけでは子をつくれぬから)

実は鬼たちの、苦肉の策であったのだ。

しかしその策のおかげで、人の血を控え紅い水を飲みつづけた鬼たちは、やがて血の味を忘れ水で満足するようになっていった。欲望のままではなく、鬼を増やす用途で人の血を吸うようになったのだ。それでも鬼になったばかりの鬼は、我慢できずに人の血を吸い荒らすこともあったけれど、そういう鬼は鬼の世界のなかでも危険視され、すぐに処分されてしまうことも多かったという。

(わたしはただ、そのほうが簡単に増やせるから)

鬼は人の血を吸うのだと思っていた。けれど違ったのだ。

(人が子を産む)

まるでそれと同じような感覚で。

彼らは人の血を吸っていた。

「で、ではその鬼は……家族を増やすために来たというのですか？」

話を聞いていくうちに、冷静さを取り戻せたのだろう、尾花さんが鋭い質問を飛ばしてくる。

「それはわからないわ。この鬼は、昔から言葉を話さないの」

「そう……」

話さないから、わたしはなににも知れなかった。

どうしてわたしに憑いたのか。なにが目的なのか。

わたしは自分が本当は誰なのかさえわからないのに、この鬼は見事にわからないことを増やしてくれた。じじだって、すべての答えを持っているわけではなかった。

「なあ、これって、ほんもののつものなん？　ほんもののおになん？」

「えっ？」

気がつくひとりの子どもが、わたしの後ろに立ったままの鬼のそばにやってきていた。周りを見ると、他の子どもたちはみんな建物の外に出ていて、戸口や窓から怖々こちらの様子を窺っている。それでも遠くへ逃げ出さないのは、子ども特有の好奇心ゆえなのかもしれない。なかには今にも泣き出しそうな顔をしている子どももいたけれど、他に泣いている子どもがいないからだろう、ぷるぷると震えながらも我慢しているようだった。

声をかけてきた男の子は、小さな芙蓉よりもさらに小さな背丈で、必死に鬼を見あげていた。もっとその顔や角を見たいのだろうけれど、見るためには近づくのではなく離ればいいのだということが、まだわからないのだ。

「なあなあ、おにってひとをたべるん？　どんなふうになん？」

わたしが返事をできないでいると、男の子はさらに問いを重ねてくる。

（どう答えればいいのか？）

一体どんな答えなら、怖がらせずにすむのだろう。

わたし自身鬼を怖がっている存在のくせに、そんなことを考えている自分に気づいて呆れた。「わらっしょ、それは嘘じゃ。この鬼が本物なのは本当じゃが、この鬼は人を食べたりしないのじゃ。な？　怖くないじゃろう？」

そこをすかさず助けてくれたのは、やはり芙蓉だった。

「うん、こわくはないんよ。そっか、やっぱり『うそ』なんね」

「大人こそ、嘘をつく生きものじゃろうて。――のう！　みなも出てくるがよい。この鬼はどうせ喋れぬ。犬のように急に吠えたりせんし、噛みついたりもせんよ」

芙蓉がそう呼びかけたのは、もちろん周囲で見守っている子どもたちに対してだった。芙蓉は大人からだけでなく子どもからも慕われているのか、何人かがおどおどした足取りながらも、手習所のなかへと戻ってくる。

（……そうよね）

大人であるわたしですら、芙蓉には敵わないと思ってしまうのだ。相手が子どもであればなおのこと、芙蓉の言葉は絶大であるのかもしれない。

やがてはすべての子どもが内へと戻り、鬼を囲んで盛りあがっていた。

その横で。

「――で？　どうするつもりですか？　芙蓉ちゃん。このままでは楓さんが鬼だということにされてしまいますわ。もし瓦版で対抗する気があるのなら、わたくしの知人にそういうのが得意な者がおりますけど」

仕掛けられた罠から、逃げ出すための方法を考える。

しかし芙蓉はすでに、策を持っているようだ。

「よいよい。わらわに考えがあるのじゃ」

まっすぐに見つめたら凍ってしまいそうなほど、冷めた笑みを浮かべた。

「いいの!? 芙蓉っ」

てっきり今日も、そのまま宿に帰るのかと思ったのに。芙蓉はわたしの手を握りひっぱりながら、どう見ても宿とは逆のほうへ向かっていた。しかも後ろからついてくる鬼は、角をさらしたままなのだ。

「芙蓉！」

「うるさいぞ、楓。わらわは約束を破るのが嫌いなのじゃ。父上や母上にいつも破られておって、その嫌な気持ちをよくわかっておるからの」

「……っ」

こちらを向かないまま告げた芙蓉に、わたしはなにも言い返せなかった。

(きっと、忙しいからね)

宿のために。

町のみんなのために。

一生懸命働きはしても、自分の娘のために休みはしないのだろう。

「大じじさまも、よく約束を破っておったよ。明日には父上が遊んでくれる。明日には母上が一日中そばにおってくれる。……そういう部分だけは、わらわも嫌いじゃった」

そこまで聞いてしまっちは、「宿へ戻ろう」とは言えなかった。だいいち、わたしが自分から約束をしたことなのだ。しかも昨日行けなかったのはわたしのせい。もし今日行かなかったら、それもわたしのせいに違いない。

(鬼と思われているから怖いなんて)

わたしに言う権利などないのだ。

あきらめたわたしは、大じじさまの話題が出たのをいいことに、話を振る。

「――その大じじさまは、ずいぶんと鬼のことに詳しいのね」

不思議に思っていた。じじの場合は実際に鬼がそばにいたから、もしかしたら他の鬼が来たり、なにか得るものがあったのかもしれないけれど。芙蓉を育てた大じじさまは、なぜそんなにも鬼に詳しいのか。

すると芙蓉はこともなげに。

「大じじさまには、鬼の知り合いがおったらしいからのう」

「し、知り合い？」

「鬼」と「知り合い」という言葉に、違和感を覚えたわたしが訊き返すと。

「なにを驚いておる？ わらわだって今はこの鬼と知り合いじゃ。なんも不思議なことはない」

(ああ――)

言われてみれば、確かにそうだ。わたしみたいに憑かれた者でなくても、鬼と遭遇する可能性は普通にある。ただ鬼がこうして町へやってくることもなんてほとんどないから、機会が限られているというだけで。

「じゃあその鬼にも、感謝しないといけないね、わたしは」

自然と言葉が出た。

(感謝)

怖い怖いと、今でも思っている鬼に。

「なぜじゃ？」

本当にわからないといった表情で、首をかしげた芙蓉が可愛かった。

「だってその鬼がいなかったら、芙蓉は鬼を怖がっていたかもしれないじゃない」

初めて会ったときでも、芙蓉がわたしや鬼を怖がらなかったのは、大じじさまから鬼の話聞いていたからに他ならない。もし芙蓉が他の人と同じようにわたしに接していたら、わたしは今頃どうなっていたかわからないのだ。

「そうじゃな」

芙蓉はなぜか誇らしげな笑みを浮かべると。

「のう楓」

「はい？」

「何度も言うてうるさいと思うじゃろうかの」

「？ なぁに？」

「ぬしは、いつかこの鬼に対してだって、感謝をするときがくるかもしれんよ」

「！」

(この、鬼に……？)

そんなこと、ありえるのだろうか。

わたしの言葉を聞かない。

助けてもくれない。

ただ後ろをついてくるだけの、この鬼に。

「そう——ね」

でも否定したら芙蓉が哀しむような気がして、わたしはそんな言葉を選んだ。

(うまく)

笑えていただろうか。

それから向かった蕎麦屋でも、わたしはずっとそれを考えていた。

おかげであびせられる罵声も、耳に入らなかった。



薬売りがやってきたのは、翌朝のことだった。

てっこう きゃはん

手っ甲と脚絆を身につけ、頭よりも背の高い箱を背負ったその姿は、薬売りを見たことのないわたしでもすぐにそうなのだとわかった。

「お久しぶりです、芙蓉さま」

わたしと芙蓉がそろって下へおりてゆくと、向こうからすぐに声をかけてきた。

「待ちかねていたのじゃ、飛丸^{とびまる}。ちいと待っておれ」

芙蓉はそう応え、番台の奥のほうへと入ってゆく。わたしも一緒に行こうとすると、「よい」と手でわたしを押し返した。

仕方がないので、戻って薬売り――飛丸を観察することにする。

飛丸は、わたしが勝手に想像していた薬売りよりもずっと若かった。十八歳くらいだろうか？ まだあどけなさの残るその顔で、実に重そうな黒塗りの箱を背負っているの、妙な違和感を覚える。

――目が、合った。

「あなたは？ 芙蓉さまと一緒におりてきたようですが。もしや新しい付人さんですか？」

「え、ええ……そうよ」

ここではわたしが鬼憑きであることをみんな知っているせいか、芙蓉や女将さんたち以外わたしに話しかける者などいない。そのせいか、わたしは話しかけられたことに少し驚き、歯切れの悪い返事しかできなかった。

しかし飛丸は、まったく気にしない様子で。

「では情報を更新しなければ！ ちょっと失礼しますよ」

そう告げると、背負っていた箱を床におろし、箱の上のほうをひょいと持ちあげる。

(えっ!?)

驚いたことに、その箱はひとつの大きな箱ではなかったのだ。なるほどよく見ると、途中途中に切れ目のようなものが見える。大きさも、下から上に向かって小さくなっているようで……うまい具合に箱の上に箱が重なっているようだった。

飛丸がそんな箱のいちばん上から取り出したのは、一冊の帳面だ。ずいぶん使い古されているようで、見たこともないほどの厚さをしていた。

「……ん？ これが気になりますか？」

わたしがあまりにも真剣に見入っていたからだろう。不意にあがった顔と再び目が合ってしまった。

「これは懸場帳^{かけばちょう}といって、お客さんの情報を記しておくための帳面です。親から子へと代々受け継がれる、薬売りにとっては命の次に大事なものですよ」

「そうなんだ」

とわたしがあいつちを打っている間に、飛丸は同じところから矢立て（筆記具）を取り出した。わたしがこっそりとなかを覗きこむと、他にはそろばんが入っているのが見える。

「では少し質問いたしますが、新しく増えたのはあなたひとりですか？ あなたのご家族などは？」

「あ……」

今じじのことを言ったほうがいいのだろうか。わたしが一瞬迷ったときだった。

「そのことで頼みがあったから、今回は早めに来てもらったのじゃよ」

薬箱を手にした芙蓉が、戻ってきたのだ。

「そうだったのですか。室伏に急ぐよう上から文^{はみ}が来ていたので、もしやどなたか怪我でもなされたのかと、心配していたのですが」

「当たらずとも遠からず、というところじゃの。――先にこちらを頼もう」

わたしのそばまでやってくると、芙蓉は飛丸に薬箱を手渡した。

「確かに。お預りいたします」

恭しい動作で受け取った飛丸は、さっそくなかを確認する。

「楓は、薬売りの仕事を見るのは初めてか？」

やっぱり興味深く観察してしまう視線がばれて、芙蓉がそう問いかけてきた。

「ええ」

わたしは知らないことを恥ずかしいと思いつつも、頷く。芙蓉ならきっと、馬鹿になどしないだろう。それがわかっている分、素直になれるのだった。

「あの箱は五段重ねになっておっての。三段目に、使わなかった薬を入れてゆくのじゃ。四段目と五段目には、新しい薬が入っておる」

「……詳しいわね、芙蓉」

「この宿では、わらわがこの係りじゃからの！」

胸をはって言い切る芙蓉は、本当に嬉しいのだろう。

(そういえば)

わたしもじじになにかを頼まれることが、やけに嬉しかったな。

まだ幼くて、できることなど少ないのに、じじのそばにいたくて、お手伝いがしたくて。与えられる仕事がどんなに些細なことでも嬉しかったし、できたあとは誇らしかった。

そんな自分を思い出した。

会話の横で、飛丸の手はとまらずに動いている。

(……あれ?)

それは五段目の箱の中身があらわになったときだった。

「芙蓉、なにかいい匂いがしない？」

多分これは、香の匂いだ。でもどこから？

わたしがぎょろぎょろとあたりを見まわしていると。

「この箱の底に仕込んであるのですよ」

五段目の箱を指差して、飛丸が教えてくれた。そして次の芙蓉の言葉で、納得する。

「この匂いをかぐとな、薬売りが来てくれたんじゃないなあって、実感するのじゃよ」

(そっか)

その薬にまでしみこんだ匂いは、合図なのだ。薬売りが来たよって。

そして薬からその匂いが完全に消える頃に、彼はまた来るのだろう。

「終わりましたよ、芙蓉さま。――それで？ 頼みとはなんですか？」

飛丸の目が、より真剣に光る。

「うむ……実はのう、この楓の、大切なじじさまが病で寝こんでおるといふのじゃ。それで、できれば一緒に行って、しかるべき薬を置いていってほしいのじゃが」

多分、「なんだ、そんなことか」と飛丸は思ったのだろう。そういう顔をした。

「お客さんを紹介していただけるなら、喜んで参りますよ」

「そうか、助かる」

そして芙蓉は、多分それに気づかないふりをした。それ以上詳しくは言わなかった。

(多分)

わざとだろう。

鬼と一緒に鬼が住んでいたといわれる山に行ってくれなんて、言ったら断られるかもしれないから。

(いいのかなあ……)

そう思いながらも、わたしも口を挟まなかった。飛丸が来てくれなかったら、困るのは誰よりもわたしののだ。芙蓉はわたしのために、いらない罪悪感を背負うことになっているのだから。

「よろしく、お願いします」

せめて低く、頭をさげた。

「いえいえ、お気にせず。あなたは楓さんとおっしゃるのですね。それで、じじさまがおひとりいる、と」

仕事熱心な飛丸は、やはり気にしたふうもなく懸場帳に書きこんでいる。五段重ねの箱の、一段目に入っていた懸場帳。

(一一ん?)

わたしはふと気になって、飛丸に訊いてみた。

「あの……箱の二段目には、なにが入っているの？」

一段目は懸場帳や矢立て、三段目は使わなかった薬、四・五段目は新しい薬。芙蓉の説明にも、二段目のものはなかった。

すると飛丸は書いていた手をとめて。

「一一知りたいですか？」

まっすぐにわたしの目を見つめ、意味ありげに問いかけてくる。

「え、ええ」

別に知ったからどうということはないのだけど、知らないよりは知っていたほうがいだろう。

頷いたわたしに、たっぴりと間をおいてから飛丸が差し出した答えは。

「秘密です！」

わたしたちが如封山に向け出発したのは、お昼をまわってからだった。本当はすぐにでも行きたかったのだけれど、芙蓉がなにやら用事があるというので、それが終わるのを待っていたのだ。

飛丸が鬼と初めて対面し、恐怖を克服しようとしていた九つ（九時）頃。ひとりの男性が芙蓉を訪ねてきて、わたしは芙蓉の用事が人との約束だったことを知った。それならば芙蓉が用事を優先させるのも、仕方のないことだった。

芙蓉はその男性を自分の部屋に通すと、珍しくわたしを遠ざけた。

「じゃが鬼、ぬしはこい」

そしていつもとは逆に鬼をなかへと招き、三人でなにかひそひそ話をしているようだった。

（一体なんだったのかしら？）

芙蓉の足もとを追って歩きながら、わたしは思い返していた。

芙蓉が招いた男性は、三十代くらいのずいぶんといかつい姿をした人物だった。「大工だ」と言われれば「そうか」と簡単に頷いてしまえそうなほどに。黒の着流しを着ていたけれど、体格がよすぎてまるで似合っていない。芙蓉の横に立てばなおさらだ。また、手にしていた張り扇はりせんも、男性の違和感を引き立てるのに役立っていた。

芙蓉はなにを話していたのだろうか？

（十中八九）

わたしに関係があることなのだろうけれど。訊いても教えてはくれなかった。

「――よし、ここに寄ってゆこうぞ」

不意に芙蓉の声がして、わたしは「はっ」と我に返り顔をあげた。

如封山へと向かう道中、町のなかはわたしよりも芙蓉や飛丸のほうが詳しいので、前を歩いてもらっていたのだ。五十歩と歩かぬうちに立ちどまった芙蓉が指していた場所は、ものをなんでも貸してくれるという損料屋だ。わたしが読んだ書物のなかにも頻繁に登場していたので、よく覚えている。

「なにを借りるの？」

損料屋には羽織や袴、ふんどしといった身に着けるものから、屏風や掛け軸といった芸術品、鍋や七輪といった日用品まで、幅広くいろいろなものがある。しかし室伏だって、損料屋に負けないくらいものを持っている宿で。普通は借りて済ませるようなものでも、ちゃんと宿専用のものを用意してあるのだった。

（借りなければいけないものなんて、あるのかな）

芙蓉はこちらを見てにこっと笑っただけで、答えずに建物のなかに入ってしまった。

わたしは飛丸と顔を合わせ、互いに首をかしげてから、あとについて入る。結局昨日からずつと角つのを出したままの鬼だけは、外に残った。

なんでもある店というくらいだから、てっきり店内は散らかっているのだろうと想像していたけれど、意外なことにかぶり笠ひとつ置いていなかった。なかはかなり狭く、正面の壁についてい

る小窓から、店主らしき人の姿が見えていた。

「らっしゃい」

こちらに気がついた店主から先に声をかけてくる。

芙蓉はぺこりと頭をさげると、言葉を発するのではなく横の飛丸を見あげた。

(――ああ)

芙蓉の背の高さでは、近づいてしまったら小窓に顔が届かないからだ。

飛丸もそれに気づいたようで、ひょいと芙蓉を抱えあげてやる。

やっと店主と同じ高さで顔を合わせた芙蓉は、満足そうに頷くと。

「馬を借りたいのじゃが」

そう告げた。

「馬？ そんなに遠くへ行くのですか？」

訊き返したのは当然、これからどこへ向かうのか、知らされていない飛丸である。

「ああ、ちいとな」

あっさりとかわした芙蓉の笑顔が怖い。

店主は台帳をめくりながら。

「何頭必要なんです？」

「わらわと楓は馬には乗れんからの、二頭じゃな」

わたしは芙蓉に、馬に乗れるかなんて一度も訊かれたことはない。だから予想で告げたのだろう。それが見事に当たっているのが、ほんの少しだけ悔しい。

「――楓？」

ふと、店主はめくる手をとめて顔をあげた。

嫌な予感がした。

「あんたが楓なのかい？ 鬼の」

「！」

「すまんが、もし本当なら貸すことはできねえ。他を当たってくれ」

「そんなんっ」

(あの瓦版のせい!?)

わたしたちが思っているよりもずっと、あれは広まっていたのだ。

「まあ、他も無理だろうがな」

そう閉じると、店主は小窓をしめようとする。

――しかし。

「それは嘘じゃ」

まるでまじないのように、聞き逃すことを許さない声音。店主の手が再びとまった。

「楓は鬼ではない。本物の鬼ならば外におる。信じられぬなら、確かめてみるがよい」

「……………っ」

その不思議な迫力に、店主は言葉を失っていた。それでも、小窓の横にひっそりと備えられた戸から出てくると、素直に店の戸口へと向かう。そして外を覗くなり「ひいっ」という、実にありきたりな声をあげたのだった。

「だ、だ、だったら、なおさら貸せねえや！ 鬼に馬を貸したなんてことが町に広まったら……」

情けなく身体を震わせながら、店主は必死に訴える。

しかし芙蓉が引きさがるわけもなく。

「ならば仕方がないのう。次の祭りにこの損料屋は参加せぬということで、よいのじゃな？」

「ええっ？ そ、それは困る！」

「なぜじゃ。ここらあたりの祭り資金は、すべて室伏が出しておることは当然知っておろう？ それでいてわらわには馬を貸さぬというのなら、室伏が出資した祭りには出店してはならぬというのも、しごく当然の話ではないか？」

「うううう……」

だんだん店主のほうがかawaiiそうになってきた。

(さすが芙蓉)

容赦なく口が立つ。

しばらくそのような問答をくり返していると、やがて店主のほう折れた。

「わ、わかりあんしたよっ。いちばんの稼ぎどきに店が出せないほうが困る……」

すでに泣きそうな顔をしていた。

「やりましたねえ、芙蓉さま。手に汗握る戦いでした！」

嬉しそうに告げた飛丸の感想は、どこか間違っている。

「それで？ ^{からすがし} 烏貸 でいいのか？」

「そうじゃな。たびたび借りることになるじゃろう、よろしく頼むぞよ」

「はいはい、わかりましたよっ」

投げやりな態度ではあったが、店主は間違いなく馬を二頭、貸してくれた。

店の前でそれぞれの馬に乗りこむ。体格的なことも考えて、わたしと飛丸、芙蓉と鬼と一緒にまたがった。

「ちゃんと返せよ？」

戸口から不安そうに見あげる店主の目は、鬼に向いていた。

芙蓉はとぼけた顔をして。

「二倍の保証料は払ったじゃろう？」

「そういうことを言ってんじゃねえんだよっ」

もちろん芙蓉は、わかっていてからかったのだろう。

「のう損料屋。今日の夕方にでも、街に出てみるがよい。きっと面白いことに会おうぞ」

「へ？」

さらに惑わす言葉をつけ加えて、豪快に笑う。

「なんなんだよ、ったく……」

店主は頭をかきながら――そして不思議そうに首をかしげながら、店のなかへと戻っていった

。

「ではゆこう。鬼よ、頼んだぞ」

いつものように返事なく、かわりに鬼は手綱を引く。

「あとを追います。楓さん、しっかり掴まっていますね」

「う、うん！　お願いねっ」

驚いたような返事になってしまったのは、馬に乗るのが初めてで緊張していたからだ。おそらく飛丸はそのことに気づいたのだろう、小さく笑って、でも口に出しては触れなかった。

(芙蓉と同じ)

やさしさがあった。



馬で来たのは、正解だった。

わたしが山をおりたときにかかった時間が嘘のように、まだ太陽が高い位置にあるうちに山小屋に着けてしまった。

「あ、あ、あ、あ、あのっ、芙蓉さまっ？　大丈夫ですか？　ここ……」

馬からおりた飛丸の声は、ひっくり返っていた。当然飛丸だって、この山の昔話を知っているからだろう。

「現に人が住んでおるのじゃ。大丈夫に決まっておる」

その青ざめた顔を見て、芙蓉は呆れたように返す。

「さて楓、案内しておくれや」

「あ、はい」

案内と言ったって、小屋のすぐ前だ。しかし確かに、客人である芙蓉たちが先に入るのはおかしいので、わたしが先頭に立ちなかに呼びかけた。

「じじ？　起きてる？　薬売りを連れてきたの」

じじはもう耳が遠い。大き目の声でくり返すと、やがてなかから返事が聞こえてくる。

「――おお、楓か。起きておる、入りなされ」

(じじ、声が……)

別れた数日前よりも、しゃがれていた。水分をしっかりとれていないのだろう。

勢いよく戸を開け、布団の上に身を横たえたじじのもとへと駆け寄った。

「じじ、大丈夫っ？　調子はどうなの？」

じじはゆっくりと腕を動かすと、震えている両手でわたしの手を包み。

「ぬしの顔を見たら、いくらかよくなったのじゃ」

「じじ……」

わたしがじじを支えにしていたように。じじにとってわたしが支えになれていたのなら、それはとても嬉しいことだ。

「芙蓉、これがわたしのじじよ！」

じじに手を預けたまま、戸口に立っているはずの芙蓉を振り返る。

――と。

(え……?)

芙蓉は水を持っていた。

じじの喉をうるおすための水ではない。

それは瞳から流れ出る、感情の水だ。

「芙、蓉……？」

「大じじさま、生きておったのか……！」

それからわたしが先ほどしたように、こちらへ駆け寄ってくると。

「大じじさまが亡くなって、わらわは哀しゅうて哀しゅうて仕方なかった。どうして家に戻ってきてくれなかったのじゃ!？」

布団を握りしめて叫ぶ芙蓉の顔は真剣そのもの。とても演技には見えない。

(どういうことなの?)

わたしのじじが、芙蓉の大じじさま？

年齢を考えると、確かに無理な話ではないだろう。じじの歳など訊いたことはないが、七十を越えているだろうことは、わたしにもわかる。

むせび泣く芙蓉に、わたしはかける言葉が見つからなくて、じじのほうに視線を戻した。意外なことにじじはたいして驚いたふうもなく、にこやかな笑みさえ浮かべていた。

「――のう、わらしっこ。芙蓉と申したか」

「……はい」

ぐずぐずと鼻を鳴らしながらも、返事をした芙蓉に少し安心する。

「わしはぬしの『大じじさま』ではないのじゃ。しかしわしには、楓以外に身寄りがないからの。ぬしがもし、わしを『大じじさま』にしてくれるというのなら、喜んでそうなるぞ」

じじはわたしから手を放すと、ひじを使って器用に上半身を起こし、それから芙蓉の頭に手を伸ばした。やさしく、なでてやる。

おそらく芙蓉だって、泣きながら気づいていたのだろう。このじじが、自分の大じじさまであるはずがないと。

(だって芙蓉は、看取ったんだもの)

看取れて幸せだったと、わたしに話してくれた。

それでも感情をとめられなかったのは、きっと――

「……ぜひ、なつて欲しいのじゃ」

芙蓉は自分の指で涙をぬぐってから、子どもらしい無邪気な笑顔を見せてそう応えた。それからわたしに視線を移し。

「すまぬ楓、ぬしのじじさまがあまりに大じじさまに似ておったから、取り乱してしもうた」

(やっぱり……)

似ていたから、あふれてしまったのだ。

隠していた想いと、信じたくない感情が。

「気にしないで、芙蓉」

もしわたしと芙蓉の立場が逆であったなら、わたしも同じことをしただろう。同時に、そういう部分は芙蓉も同じであることが嬉しかった。

じじにならって、芙蓉の頭に手を伸ばす。

「なんじゃ、ふたりして子ども扱いしおって」

「だって子どもだもの！」

「むう……」

「面白くない」そんな顔つきをした芙蓉が、おかしかった。

「――それにしても、見事に似ていますね」

後ろから声をかけてきたのは、飛丸だ。小屋にいるのはじじひとりだとわかって安心したのか、顔色はだいぶよくなっていた。

(そうだわ)

芙蓉が急に泣き出したせいで、すっかり頭から抜けていた。

わたしは飛丸の薬を届けるために、ここまで戻ってきたのだった。

「な？ 大じじさまそのままじゃろう？」

芙蓉が嬉しそうに振り返ると、なぜか飛丸は顔の前で手を振る。

「いえいえ、そういう意味ではなく。芙蓉さまとじじさまの喋りかたが似ている、という意味ですよ」

「あ、確かに」

言われてみればそうだ。これでもし声音が一緒であったなら、わたしにも区別がつかないかもしれない。

(きっと)

わたしが芙蓉に対し妙に親しみを感じたり、その言葉を簡単に信じたりしてしまうのは、じじと口調が似ているせいもあるのだろう。

「ねえじじ、わたし今、芙蓉のところでお世話になっているの。室伏という、伊波の町でいちばん大きな稼ぎ宿よ。芙蓉の付人をやらせてもらってるわ」

ちゃんと働き口を見つけたのだと、じじを安心させるために告げた。するとじじは、「そうかそうか」と何度も頷き。

「ありがとう、芙蓉どの。楓を、これからもどうか、よろしく頼みまする」

「礼を言うのはこちらのほうじゃ。楓や鬼が来る前は、実に退屈な日々じゃった」

「芙蓉どの、見かけよりもおてんばなようじゃな」

「そうなのよ、じじ。芙蓉ったら、初めて会ったとき、階段の手すりをね――」

「――そこまで!!」

これからさらに盛りあがろうというとき、口を挟んだのは飛丸だった。

「話より先に、じじさまの病状を見させていただいてもいいですかね？」

「ああ、そうじゃったそうじゃった」

「思い出した」というように、芙蓉が手を叩いた。

わたしも危うく、また目的を忘れるところだった。思いのほかじじの顔色がいいのも、原因のひとつかもしれない。声のほうも、喋っているうちにいくぶんよくなってきたようだった。

「では飛丸、じじさまを頼む」

立ちあがった芙蓉は席を飛丸に譲ると、今度はわたしのほうを向いて。

「楓、水を汲むところはあるのか？」

「あ、近くに川があるの。一緒に行きましょう」

わたしも立ちあがり、ふたりで小屋の外へ出た。

小屋には入らず戸口のところで立っていた鬼に、芙蓉は。

「ぬしはここにおれ」

相変わらず簡単に命令をくだと、相変わらず顔かずに鬼は従った。

「――芙蓉、あっちよ」

わたしは手にした桶を、握りしめないふりをする。

(大丈夫)

これがあたりまえなんだから。

自分に何度も言い聞かせた。

さいわいじじの病気は、たいしたことはないらしい。

「風邪をこじらせたようですね。身体の節々が痛んで動かしにくくなるのも、その症状の一部です。大丈夫、薬を飲んでいれば、いずれ治りますよ」

晴れやかな顔で言われると、わたしも安心してしまう。

「しばらくは薬を飲みつづけねばならぬのか？」

肝心なところを訊ねたのは芙蓉だ。

「ですね。上に文を出しておきます。大体みんな持ち歩いている薬ですから、通りがかった者が寄るようにすれば、間に合うでしょう」

「？ どういうことですか？」

薬売りがどんな仕組みで動いているのか、予備知識のないわたしにはよくわからない話だった。

(そういえば)

飛丸が今朝宿に来たときも、「上から文が来て……」と言っていたような気がする。

『上』とはなに？

「薬売りはの、個人の商売ではないのじゃ」

まず答えてくれたのは、また布団に横になったじじだった。

「元締めがおってな、そやつの指示で多くの薬売りが、毎年同じ道順で得意先をまわっておる」

「そうなのです。ですから用事があるときは元締めのほうに連絡をくだされば、元締めは薬売りがそれぞれどの場所にいるのかを把握していますから、その場所に文を送ることができるのですよ」

「な、なるほど」

驚いた。まさかそこまで大掛かりな活動をしているとは思わなかったから。

(でも確かに便利ね)

つまり今回の場合は、飛丸が自分で上——元締めにこの旨を書いた文を送り、それをこのあたりを通りがかるはずの他の薬売りにも伝えてもらう、ということだ。それなら毎回飛丸が来る必要はないし、ひとりの薬売りが持っている分の薬を、全部使ってしまうということもない。

「——ところで芙蓉さま、そろそろ戻りませんか、日没まで間に合いませんよ。確か烏貸でしたよね」

窓から外の明るさを見やっ、焦ったように告げたのは飛丸だ。

「そうじゃったな。ではそろそろおいとますることにしようぞ」

「烏貸って、陽が沈むまでなの？」

「そうじゃ。逆に陽が沈んでから昇るまで貸すことをこうもりがし蝙蝠貸という。面白いじゃろ？」

「ええ」

その表現の巧みさに、わたしは小さく笑った。

それからさみしそうな表情のじじに視線を移し。

「……じゃあじじ、行くね。食べものはまた、隅っこに用意しておいたから。今度はなにか栄養のつくものを持ってくるわ。今回は薬のことで頭がいっぱいで、そこまで気がまわらなかったの」

「ああ、ありがとう。じゃが、楓が顔を出してくれるだけで、わしには充分じゃよ」

「そうも行かぬ。わらわも一緒に来るからのう、もっと元気になってもらわねば！」

芙蓉の言葉に、じじはしわくちゃの笑顔をつくった。

みんな立ちあがって、戸口のほうへと向かうと。

「鬼よ！ 楓と芙蓉どのを頼むぞっ」

後ろからじじの声が聞こえて、わたしは素早く外にいたままの鬼に視線をすべらせた。鬼はもう沈みはじめている太陽を見据えていた。反応はないように思えた。

――けれど。

(あ……っ)

わたしは見逃さなかった。風が髪を持ちあげたせいで見えた鬼の耳が、かすかに頷いたのを。



伊波の町へ戻った頃には、もう陽が沈みかけていた。本来ならここで、まっすぐに損料屋に向かい馬を返すべきなのだ。しかし芙蓉が突然街のほうへ寄ると言い出したから、わたしたちはついていかねばならなかった。

ちなみに、わたしたちがよく『街』と表現しているのは、伊波の町の中心にあたる部分だ。様々なお店が軒を連ねていて、毎日のように多種多様な市いちが行われている。室伏はそこから少し離れた位置にあるのだけれど、おかげで街の喧騒が届かず静かに過ごせるので、逆に人気があるのだった。

「芙蓉、なにか食べたいものでもあるの？」

普通の大きさに告げたわたしの声でも、隣の馬に乗っている芙蓉の耳にちゃんと届いたのは、町なかに入り馬の速度を落としているからだ。

「なんじゃ楓。わらわがいつも食べもののことばかり考えておるとでも？」

一応不満そうな口調で告げた芙蓉だが、それもからかいの台詞であることは、芙蓉の口もとを見れば明らかだった。

「だって芙蓉、よく食べものの話をするじゃない」

「はははっ。相変わらずの食いしん坊なのですね」

わたしの前で華麗に馬を操っている飛丸も、話に加わってくる。

「あら、飛丸さんも聞いたことあるの？ 食べものの話」

「そうではなくて、一度はらいた腹痛の薬を特別にさしあげたことがあるのです」

「食べ合わせが悪かったとか？」

「それが……」

飛丸の肩が必要以上に揺れているのは、馬に乗っているせいではない。笑いをこらえているのだろう。

「それが、どうしたの？」

いつも芙蓉にからかわれてばかりのわたしは、嬉々として飛丸に詰め寄る。ちらりと横目で芙蓉を見やると、完璧にこちらから顔をそむけていた。よほど恥ずかしい理由なのだろうか。

「ええと、言ってもよろしいですか？ 芙蓉さま」

「……………」

芙蓉は返事をしなかった。いつもの鬼のように。

「ふ、芙蓉さま……？」

「……………目じゃ」

「え？」

「駄目じゃ！」

「あー……そうですか」

飛丸があきらめたときだった。

「わらわが自分で言うから駄目じゃ！ 楓、わらわな、ぬしの言うとおりに、食べるのが大好きなんじゃ！ 飛丸にもらったのは、『食べ過ぎ』の薬じゃよ」

こちらに顔を戻して告げた芙蓉の表情は、恥ずかしさのなかにもなぜか、誇らしさが見えた。

「芙蓉……」

「恥ずかしい話じゃが、真実なのじゃから仕方がない。これがわらわなのじゃ」

「……………」

(やっぱり、すごい)

この芙蓉という人は。

どんなに恥ずかしいことでも、それも自分の一部であるのだと、ちゃんと胸を張って言える。

自分がどのような人間であるのかをきちんと理解していて、どうするのが最善なのかをしっかりと分析できている。

(相手は、子どもなのに)

わたしはとても追いつけない。

こうして馬で――他人の手を借りて横に並ぶことはできても。

あびせられる恐怖や憎しみに、「これがわたしなのだ」と立ち向かうことができない。

「見て、あれうわさの鬼じゃない!？」

「男の鬼もいるぞ？ 仲間を連れてきたんじゃないかっ？」

「芙蓉さま、もしかして人質にされているの？」

「誰か！ 芙蓉さまを助けてっ」

「卑怯だぞ鬼っ！ 芙蓉さまを放しやがれッ」

「おとなしく山にいる！」

「人間はおまえたちの食料じゃやねえんだっ」

——そう、街に近づくにつれ人通りも多くなり、わたしや鬼を見つける人が増えたせいで、先ほどからそんな声ばかり飛んでいた。芙蓉はまったく気にしないようで、笑顔で手を振ってさえている。自分は人質ではないのだと、示してくれているのだろう。

「わたしは鬼ではないわ！」

叫んだっていい。

でも結果を、わたしは知っていた。

町の人から見たら、鬼と鬼憑きにたいした差などないのだ。

「わたしは人間よ！」

芙蓉たちに言えたように、みんなに向かって言ったって。

「でも普通じゃない」

そう返されるに決まっている——。

「楓さん？」

気がつくとなわたしは、しがみついた手に力をこめていた。

「あっ、ごめんなさい」

まず強く握ってしまったことに謝ってから。

「——ごめん、なさい……」

もう一度謝った。

(迷惑をかけている)

それを痛いほど理解していたから。

飛丸だってそうだ。本当ならあの損料屋みたいに、関わることを拒絶するのがあたりまえ。しかも飛丸の場合、半分は芙蓉に騙されたようなもので……。もし相手が飛丸でなかったら、とっくに怒り出していてもおかしくはない状況なのだ。

しかし飛丸は、あっけらかんと笑って。

「気にしていませんよ。芙蓉さまがおっしゃったように、鬼は確かになにもしなかった。むしろこうして、協力してくれているじゃありませんか。それに、わたしにはとても楓さんが悪い人とは思えない。鬼が憑いているだけで怖がったり罵ったりするのは、おかしい話だと思うのです」

「よう言った！ さすが室伏の薬売りじゃ」

手を叩いて飛丸を褒めるのは芙蓉。最初から、わたしと鬼を受け入れてくれた芙蓉だ。

ふたりの心が嬉しかった。

同時に、勇気のない自分が哀しかった。

わたしたちを取り巻く黒い渦のなか、馬はとうとう市が行われている中央の広場へとやってきた。行き交う人々はさらに増え——なぜか、一ヶ所に集まっている。みんな一様に同じほうを向いていて、わたしたちのことなど気にとめていない。なにか面白い出しものでもやっているのだろうか？

(——あっ、もしかして)

損料屋の店主と別れるとき、芙蓉が告げていた言葉を思い出す。

『のう損料屋。今日の夕方にでも、街に出てみるがよい。きっと面白いことに会おうぞ』

その『面白いこと』が、ここで行われているのか。

馬からおりたわたしたちは、手綱をそばの杭にくくりつけて、その人垣のほうへと向かった。するとちょうど、人垣から出てきた人物と目が合い……

(あれっ?)

一瞬、幻覚かと思ったのだ。ついさっき、顔を思い浮かべていたばかりだったから。

「損料屋の……」

向こうもこちらに気づいたようで、わたしたちの前で立ちどまった。それからちらりとわたしたちの後ろを見やり、馬がまだそこにいることを確認したのだろう。

「あの話が本当なら」

「え？」

次にわたしの目をまっすぐに見つめてきた店主は、少し戸惑うような表情で続けた。

「少しくらい、返すのが遅れてもいいぞ」

「? ?」

わたしはまともな反応ができなかった。一体なんのことを話しているのか、皆目見当もつかないのだ。

すると店主を見あげていた芙蓉が。

「安心せい、すべて本当じゃ。たった今、薬を届けて戻ってきたところじゃ」

(え……?)

まるでわたしが町へやってきた理由を、店主が知っているかのように応えた。

「そうか……」

呟いた店主の視線は、次に鬼へと移される。わたしたちから一歩、離れて佇む鬼へ。

「一一ふん」

しばらく見つめたあと、店主はそう鼻を鳴らして、歩いていってしまった。その表情からは、いつの間にか怯えの色が消えているように見えた。

「芙蓉、一体どういうことなの？」

どうして急に。芙蓉がなにか不思議な力でも使ったというのか。でも芙蓉は、今日一日中わたしのそばにいたはずで――

(! 違う……)

芙蓉がわたしのそばにいなかった時間はあった。あの男性が来たときだ。まさか、あの人……!

わたしは芙蓉たちから離れて、ひとり人垣へと飛びこんだ。その中心にあるものを見ようと。その中心に、いる者を見ようと。

人の壁を掻き分けて、たどりついた、その先には。御座の上に座布団（はらわた）を敷き、その上に正座し

たあの男性の姿があった。男性の手のなかで、あの似合わなかった張り扇^{はっぴん}が踊っていた。

「――そして無事、町へ戻ってきたというわけさ」

話はちょうど終わったところのようだった。

(講釈師だったのね)

よほど人気があるのか、男性の足もとに置かれた小さなかごに、次々と小銭が投げこまれていく。お客さんは老若男女問わず、少しのお金を払えば誰でも話を聞くことができるのが、こうした道端で行われる辻講釈の特徴だった。有名な講釈師になると、戯作者としても活躍している人がいて、おかげで山にいたわたしでも、こうしてそれを知っている。

ふと、男性と目が合った。

「よお、遅かったな芙蓉。もう三十六回も話してしまったぞ」

だが声は、わたしを通り抜けて。いつの間にかわたしのそばまでやってきていた芙蓉に届いていた。

芙蓉は応えずに、なぜかわたしの手を取って、さらに前へと歩み出る。

「ちょっ……」

これ以上前に出ては、御座を踏んでしまう。そうならないよう踏みとどまろうとしたわたしは、芙蓉に上半身だけひっぱられ、前のめりに倒れそうになった。

「おっと」

それを支えてくれたのは、目の前の男性。

「葉は無事に、届けられたのか？」

今度こそわたしに向かって訊ねてきた。間違いない、だってこんなにも至近距離なのだから。

そして男性は、呆れるほどの笑顔だった。

「は、はい……」

わたしは震える声でしか、答えられない。

(状況は明らか)

この男性がここで語っていた話は――

「わたし、の……話を……？」

わたしがなぜこうして、鬼とともにあるのか。

なぜ疎まれるとわかっていて、町へやってきたのか。

(わたし自身は、決して鬼ではないことを)

芙蓉に頼まれて、話してくれていたのだろう。

男性は目じりをさげて微笑んだ。外見のいかつさからは想像できないほど、人懐っこい笑顔だった。

「さあて、みな衆！ これで条件はおんなじじゃ。こちらの話を信じるも、あちらの瓦版を信

じるも、みな自由」

芙蓉の掛け声に、わたしたちのやり取りを固唾を呑んで見守っていたお客さんたちが、ざわざわと騒ぎ出す。

「じゃが、楓を傷つけることは許さん。話があるならば、室伏の芙蓉を通すがよい。わらわがいくらでも聞こうぞ！」

しかしそんな芙蓉の閉じかたに、みんなして口を噤んだ。それだけ、芙蓉がわたしや鬼を大切に思っていることを悟ったからだろう。町の人々はみんな、どんな形であれ必ず室伏に世話になっているはずなのだ。室伏とはそういう役割であるから。だからこそ芙蓉のこの宣言は、町の人々にとっては半分脅しのようなものだった。

「――さて、俺の今日の話はこれで終わりだ」

静まり返った空間に男性の声が響くと。人々はそのままなにも言わず、それぞれの帰途をたどりはじめた。みんなをせきとめていた、呪文が解かれたかのように。

――でも、わたしはそれを、ひきとめたかった。

(わたしはなにもしていない)

ただ芙蓉たちがわたしをかばってくれるのを、見てただけで。

わたしはまだ、なにもしていないのだ。

こんなにお膳立てしてもらって、なにもできないの？

本当に怖がっているのは、わたしじゃないの？

(わたしを怖がるみんなと)

みんなを怖がるわたし。

一体なにが違う？

――今なら、言える気がした。

「わたし、人間なのっ！」

言わなきゃいけないような、気がした。

何人かが振り返る。

「みんなと同じよ！だからお願い、怖がらないで」

何人かの肩が、ぴくりと動いた。

「わたしも怖がりたくないの。みんなと、仲よくなりたいのよ.....」

それ以上は、涙で続けられなかった。

それからは月に三度ほど、室伏に薬売りが訪れるようになった。飛丸ひとりでは半年に一度が限界であったけれど、多くの薬売りが協力してくれたおかげで、じじの体調に合った薬をそのつどもらうことができた。なかには、興味があるから山まで連れて行ってくれと言いつつ薬売りもいたりした。

しかしそこまでやっても、じじの体調はなかなかよくならなくて。芙蓉のすすめで一度医者に見てもらおうと、風邪のせいだけではなく、年齢が年齢だけに身体そのものが弱っているからだろうという話だった。

「じじさまも室伏に来るとよい」

心配した芙蓉が何度そう言っても、じじは首を縦には振らない。

(どうしてじじは山で暮らしているのか)

芙蓉と出会うまで、わたしはそれについて考えたこともなかった。だってわたしにとっても、山での暮らしはあたりまえのことであったから。けれど改めて今こうして考えてみると、奇妙なのは確かだ。すぐ近くには栄えた伊波の町があるのだし、じじ自身も以前は伊波の町に住んでいたらしいのに。なぜ山へ——しかも女の鬼が住んでいるといわれていた如封山へ移り住んだのか。またどうして、今もなおその場所にこだわっているのか。

(知らない)

わたしが唯一知っているのは、じじが楓の木をととても大切にしているということだけだ。根もとにわたしが捨てられていた、樹齢三百年を超えるといわれる、しわだらけの老木。もしかしたらじじは、それから離れないためだけに、町で暮らすことを拒んでいるのかもしれない。

一方わたしのほうはといえば、少しだけ変化があった。芙蓉がああ講釈師——^{しゅうすい}秋水 さんに頼んでくれたおかげで、一部の町人にはわたしが伊波にやってきた理由が伝わったからだ。しかし伝わったからといって、それが本当なのだと全員に信じてもらえるはずもなく。それでも罵声をあびせられたり、物を投げられたりすることは減って、みんなわたしや鬼のことを静かに観察しているかのようだった。

(そんな些細な変化でも)

わたしは嬉しいと思えた。

人として、まっとうに生きていけるなら。



わたしが室伏に身を置くようになってから、もう二ヶ月が過ぎた。

そのあいだわたしは、芙蓉と一緒にたくさんのことを覚え、そして、たくさんのものを食べた。

(本当に、芙蓉の食欲ったら底なしで……)

一体どこから情報を仕入れてくるのか、天麩羅や寿司といった屋台や、わたしひとりでは絶対

に入れないような高級料理茶屋まで、わたしも食通になってしまいそうなほど連れまわされた。また食事にとどまらず、芙蓉はお菓子にも目がなくて、練り羊羹やら栗餅やらみたらし団子やら、とりあえず新しいものが登場するとなんでも試した。なんと大食い大会にも出たほどだ。他の出場者は当然男性ばかりで、残念ながら賞は取れなかったけれど。

そんな様子で、いつも食べもののことばかり考えている芙蓉だけど、今はちょっと違うらしい。なぜなら、大切な祭りが一週間後に迫っているからだ。そのため手習所も休みになっている。

伊波の町の祭りは、年に一度しか行われぬ最大のお楽しみ。町をあげて準備に入るのだけど、なかでも忙しいのは庶民よりも、この室伏のようなお金持ちの家——分限者^{ぶげんしゃ}だそうだ。芙蓉が損料屋の店主から馬を借りるとき脅しの文句にも使っていたように、祭りは分限者たちの出資によって成り立っている。しかも誰がどれくらい出したのかちゃんと貼り出されるので、分限者としても気が抜けないし、みんなも誰がどれだけ町のことを考えてくれているのかははっきりとわかるのだった。芙蓉に対する町の人々の反応を見れば、毎年室伏がどれほど多くの金額を投資しているのか、予想できるというものだ。

祭りの前で違っているのは芙蓉だけではなく、室伏自体もとても騒がしかった。玄関に続く待合広場には幔幕が張られ、金屏風が立てられている。表戸は開放されていて、入ってくる人みんなにお酒やおこわなどを振舞っていた。そのなかには当然芙蓉の両親もいる。祭りが終わるまでは、いつもに増して忙しいようだった。

わたしは芙蓉と一緒に、騒ぐみんなの様子を階段の上から覗いている。

「お祭りって、楽しむほうは楽だけど、楽しませるほうは大変なんだね……」

率直な感想だった。祭りは単純にみんなで盛りあがるだけのものだと、思っていたから。

すると芙蓉はにんまりと笑って。

「わらわたちも、これからやらねばならぬことがあるのじゃよ」

「え？」

「お客さんらがの、花をたくさん飾りつけたおしゃれな山車^{だし}を出したいと言い出してな」

「だ、山車？」

分限者の仕事は、まだまだあるらしい。

「それで、じゃ。楓、今日はひとりで山へ行ってくれぬか？」

「——ええっ!？」

そう、今朝ちょうどじじの薬が届けられたから、午後から芙蓉と一緒に行くつもりだったのだ。結果的に、鬼も連れて。しかし芙蓉は、今日はひとりで行ってくれと言う。確かにわたしはひとりでも馬に乗れるようになったし、前よりも町をひとりで走ることに抵抗はなくなった。

(ただ、気になるのは)

芙蓉はいつも、鬼だってちゃんと人数に数える。ひとりで行けということはつまり、鬼もおいでいけということなのだ。

ちらりと、また後ろに立ったままの鬼に目をやった。

「どうじゃ？」

芙蓉はあくまでも無邪気に聞いてくる。

「それは、鬼もおいていくということよね？」

一応の確認。

「もちろんじゃ。今日一日鬼をわらわに貸してくれと、言ったほうが早いかなの？」

「……………」

(もちろん)

それは悪い話ではないのだ。

むしろ願ってもいないこと。

わたしはいつも鬼とともにあった。

鬼に監視されながら生きてきた。

その鬼が一時的にでもわたしから離れてくれるなら、そんな嬉しいことはない。

芙蓉の言うことなら、鬼だって聞くだらうと思う。

(――それなのに)

なんでわたし、こんなにも胸を痛めているの？

おかしい。

嬉しいはずなのに、喜びきれない。

鬼が怖いわたしは、鬼から離れるのも怖いの？

自分の感情が理解できなかった。

鬼がわたしを見ている。

痛いのは視線のせいなのか。

それとも――

「……鬼が、それでいいのなら」

結局わたしはそんな言葉しか選べなかった。

午後。

ひとりで馬を借り、じじの薬を持って、如封山へ向かった。

道中、わたしはいろいろなことを考えた。

(芙蓉は本当に、鬼が好きなのね)

じじのところへこうして薬を届けるさい、芙蓉は毎回ついてきていたが、来るたびじじに鬼のことを訊いていた。

わたしとじじと鬼とは、この山で一緒に過ごした時間の長さは同じであっただろう。鬼は常にわたしのそばにいたし、わたしは常にじじのそばにいたからだ。しかしわたしには当然、小さい頃の記憶はあまりない。逆にじじはそのときすでに結構な歳だったのだから、わたしよりも鬼のことをわかっているのは当然だった。それにわたしはあまり鬼のことが好きではないけれど、じじはどこか鬼を心配しているふうだったから、芙蓉は仲間だと思ったのかもしれない。

(今日のことだって)

祭りの準備のためというのは口実で。

本当はずっと、鬼とふたりになる機会を狙っていたのだろう。

それでも憎めないのは、鬼に対するものと同じくらいのまっすぐな好意を、わたしにも向けてくれているのがわかるからだ。

(それだけさみしかったのね)

わたしは芙蓉ほど大人にはなれないけれど、芙蓉を抱きしめることのできる腕を持っていたから。芙蓉のさみしさを、わかってあげられたから。――芙蓉に、このつらさを、わかってもらえたから。

(わたしも、芙蓉が好き)

鬼なんかよりもずっと。

だから芙蓉が本気であの鬼が好きだというのなら、応援してあげたい。あの鬼が少なくとも残虐であったり獷猛であったりしないことだけは、わたしだってちゃんとわかっているから。他の鬼はともかく、あの鬼なら芙蓉にひどいことはしないだろう。それに最初から、なぜか懐いていたようではあった。

……そう、考えるのだけれど。

じっくりこないのはなぜ？

あの鬼はわたしのものなんて、妙な独占欲は捨てたはず。

最初からわたしのものなんかじゃない。

最初から恐怖の対象でしかない。

(わたしは一体、なにに嫉妬しているの……?)

ぐるぐると考えているうちに、馬は山小屋の前までやってきた。わたしは最近同じ馬ばかり借りているので、馬も覚えたのだろう、嘶いてじじにわたしの到着を知らせてくれる。

「楓か？」

わたしが戸を開ける前に、なかから聞こえた。

「ええ、入るわよ、じじ」

答えてから、土や砂が挟まっているせいですべりの悪い戸を開ける。またいで、すぐにしめた。それだけで、察しのいいじじにはわかったようだ。

「む？ 今日ひとりか？」

わたしは苦笑しながら、寝たままのじじの、枕もとへと向かう。

「芙蓉がね、鬼と一緒にいたいから、今日はひとりで行ってって」

ちゃんと「仕方ないなあ」って笑顔が、できただろうか。じじの反応で確かめたかったけれど、それは叶わなかった。じじが、か細い目を大きく見開いたからだ。

「じじ？」

なんだろう、反応がおかしい。

じじはしばらくにも答えず、天井にこびりついたしみを見つめていた。

でもわたしはなんだか、返事を待っている時間ももったいなくて。

「あ、そうだ。じじ、先に薬を飲む？ 水汲んでくるよ」

立ちあがろうとした。手を掴んだのは、布団から伸びるじじの手だ。

「――すまん」

「いいよ、気にしないで。わたしだって今までたくさん世話になってきたんだし、これくらいじゃ全然足りないわ」

突然の詫びに明るく答える。けれどじじの声は、硬いまま――

「そのことじゃない」

きっぱりと言い切った声音に、わたしは思わず居住まいを正した。

「なにか、話すことがあるの？　じじ」

先ほどの手は、そのための合図だったのか。

言いにくいことならと、わたしが促すと。

じじは一度息を吸い、唇を動かしたが、まだ迷っているのか音は出なかった。それから口もとを押さえ、ごほごほと二回咳をしてから、やっと。

「いざとなったら室伏に行けと、わしが言ったのじゃよ」

とっさには、意味が取れなかった。

(いざとなったら?)

室伏に?

でもそんな話、わたしは聞いていない。

聞いていたらきっと、わたしはあんなに絶望しなかつたらう。

あらゆる宿に断られて、水をかけられて。

それでもわたしが立ちあがったのは、鬼が勝手に行ってしまったから。

(あ――)

「鬼に？　鬼にそう言ったの？　だから鬼はあのとき……」

鬼は行く前からあきらめようとするわたしをおいていった。それは最初から、そこで受け入れてもらえるとはわかっていたからだったのだ。

「でもどうして？　芙蓉が鬼を嫌わないなんてこと、じじにわかるわけ――」

そこでまた、わたしの脳裏によみがえる記憶が。

『大じじさま、生きておったのか……!』

初めてじじを見たとき、芙蓉が告げた言葉。

「もしかして、じじは本当に、芙蓉の……?」

「大じじさま――ではない」

「じゃあなんなの!？」

「ではない」のほうを強調して答えたじじに、わたしは耐えられなかった。早く知りたい。教えてほしい。そうすればきっと、この行き場のない心の痛みも、消えてくれるだろう。

(消えてほしい)

と。

不意に、じじの表情が少し緩んだ。

「話すややこしくなるのじゃがな。――芙蓉の言う大じじさまとは、わしの弟なのじゃ」

「ええっ!？」

「しかし芙蓉の本当の曾祖父はわし。つまりのう、わしはここで暮らすために、弟にすべてを託してきたのじゃよ」

「……っ」

すぐには信じられなかったけれど、つじつまは合うのだ。だからこそじじと大じじさまが似ていてもおかしくはないし、だからこそじじは室伏のことを知っていたのだろう。そしてじじと芙蓉の口調が似ているというのも、じじと大じじさまの口調が似ているのなら、納得のいく話だ。

(でも――)

残された疑問は、まだある。

芙蓉は、大じじさまに鬼の知り合いがいるのだと言っていた。ではその鬼が、わたしについている鬼？

「じじ……」

詳しく問おうとしたわたしを、じじの手がとめる。

「順を追って、ゆっくりと話そう」

長い長い、じじの昔話が始まった。

およそ三十年前、わしが四十二歳のときの話じゃ。わしは、子を生んでまだ二年しか経っていなかった娘とその婿を、当時起きた伊波の大火災で亡くした。その二年前にはすでに妻が他界しておっての、わしは身近な者が次々に死んでゆくことにひどく心を痛めて、ふさぎこんでしまったのじゃ。弟とふたりで始めた宿・室伏も弟に任せて、自分は部屋から出ることもあまりなくなっていった。

「自分の娘が好きだった場所くらい、見に行ってみたらどうだい？」

弟にそう言われて、数ヶ月ぶりに外に出たわしは、その足で如封山の大きな楓の木のもとへと向かった。そのときすでに、その山には女の鬼が住んでいると言われていたのじゃが、娘は気にせずによく見に行っていたお気に入りの場所じゃった。

そこでわしは、なんとなくわざどおり女の鬼と出会ったのじゃ。女鬼は楓の木の下で臥せっておった。肩が小さく震えておっての、泣いておるのだということがわかった。

じゃからわしは、最初近づかずに遠くから見ていた。そうして見ているうちに、鬼と人との違いはもしかして角^{つの}だけなのかもしれんと感じたのじゃ。その背中があまりにも哀しそうでさみしそうでの。気がつく^つとそばに近づいておって、女鬼の紅い眼もこちらを窺っておるようだった。じゃがまたすぐに顔をそむけると、女鬼は泣きつづけた。人間など眼中にないといったふうにな

。おかしなもので、その様子を見ておったら、わしも泣きたくなくなってしまったのじゃよ。ましてそこは、亡くした娘が大好きだった場所。亡くした衝撃でどこかに置き忘れていた心をやっと取り戻して、わしは泣いた。

——名も知らぬ鬼とともに。

それまでの鬼に対する印象と云ったら、人の血を吸って仲間にしてしまうやら、簡単には死なないやら、老いが^{ない}やら、乱暴者やら、そういった負の要素ばかりが広まっておった。じゃからわしも、当然鬼は恐ろしいものじゃと思っておったのじゃ。しかしのう、目の前におる女鬼は泣くばかりで、他になにをするわけでもない。わしがそばで勝手に泣き出しても、やはり興味を持つわけでもなく涙を流しつづけておった。

——わしにはそれが、理想の話し相手のように思えたのじゃ。

町におるとな、会う者会う者話かけてくるのは必要以上の同情での。正直うんざりしておったからこそ、わしは外に出なかったのじゃ。言われるたびに思い出す。言われるたびに哀しみが募る。それが事実とはいえ、気軽に口に出しては欲しくのうて……むしろ自分で誰かに伝えたかったのじゃが、人は勝手に他人の感情を想像し、その想像の上に同情を積みあげる。わしはなによりも、それが嫌じゃった。

それがどうじゃ、目の前にいる女鬼は、そばにおるわしのことなどかまわずに泣きつづけておる。今なら話しても、ぶしつけな同情など返ってくることはないじゃろう。

そうしてわしは女鬼に、自分の哀しみを話して聞かせた。相手が聞いていようがいまいがどうでもよかった。ただ自分の本心を、口に出すことで昇華したかったのじゃ……。

すべて話しおえたとき、意外にも女鬼は反応を見せた。ついと顔をあげ、汚れ乱れきった前髪の間から、わしを見あげた。わしはその瞳に吸いこまれるようにしてひざまずくと、女鬼の手が驚くほどの速さで首に絡んできて。

「殺して……くれるのか？」

残された自分に、あとを追うための方法を授けてくれるのか。

わしはそう問いかけた。もし自分から死んでしまったなら、あの世で出会う妻や娘は怒るかもしれぬが、殺されたなら文句は言えぬじゃろう。……そんなことを、考えていたのじゃ。

じゃが女鬼の手はわしの首の後ろで交差し、次にわしの首に絡んできたのは、女鬼の二の腕と長い髪の毛じゃった。

――抱きしめられた。

そしてまた、女鬼は泣きはじめた。泣いている理由はきっと、自分のためではなく、わしのためじゃったろう。

(過剰な同情などいらぬと)

言葉でどんなふうにしたところで、大切な相手を次々に亡くした気持ちは、実際に経験した者にしかわからぬのじゃ。

そんなふうにしておった自分が阿呆らしくなるくらい、女鬼の涙は真摯じゃった。ひとつも言葉を発しておらぬのに、そこには深い哀しみの色が見えた。あたたかい、むしろ人間よりも人間らしい、体温があった。

わしはまた泣いた。

しばらくそうしていると、今度は女鬼が自分の身の上を語りはじめたのじゃ――。



「そうしてな、互いにわかりあったわしらは、この山で一緒に暮らしはじめたのじゃ。まあ一緒にいってもな、鬼はあの楓から離れることはなかったし、わしはこの小屋に移り住んだのじゃから、始終一緒にいたわけではないがのう」

「そうだったんだ……」

おそらくじじはそのことを、ちゃんと弟さんに伝えていたのだろう。そして弟さんのほうは、それで兄が元気になるのならと、認めたのかもしれない。そうでなければ、あれだけ鬼に好意的な芙蓉が生まれるはずはないのだ。

(普通は、憎んじゃうよね)

鬼が兄をたぶらかしたなんて思っても、仕方がないことなのに。でも弟さんはそうじゃなかった。受け入れて、知ろうとした。さすが兄弟というべきか。弟さんがいちばん怖かったのは、

いつも死にたそうな顔をしていた兄の背中なのだろう。

「鬼にはな、事前に話しておいたんじゃ。聞いておらんふりをして、ちゃんと聞いておったんじゃな」

じじはそう笑ってから。

「――じゃから、あの鬼が芙蓉の命令を聞くのも、そのせいじゃ。芙蓉がわしの曾孫じゃとわかっておるから。同時に、おまえがあそこから追い出されてしまわんように、機嫌を取っておるのじゃろう」

「へっ？」

話が唐突にそこへ戻って、わたしは自分の頭のなかを整理するのに時間がかかった。

「待って。じじ、さっき謝ったのってそれのこと？ 鬼が芙蓉を大事にしてるから？」

「なにかとわがまを言って、楓を困らせていることもあるようじゃからな」

「そんなの……」

それにつき合うのがわたしの役目だ。それに芙蓉のわがまはどれも可愛いものばかりで、わたしが本気で困ったことは今まで一度もない。絶対にできないことをやれとは言わないのだ。

「じじ、勘違いしないで？ わたし別に、鬼がどんなことをしようがどうでもいいんだから」

「そうか？ 小屋に入ってくる時の顔が、どこかさみしそうじゃったが」

「……………」

そりゃあ急にひとりになるのはさみしい。でもそばにいるのは、じじでも芙蓉でもかまわなくて……

「楓は昔からあやつを嫌っておるがのう、そんなに悪いやつではないのじゃよ」

「それは……わかってる……けど……」

わたしに契印をつけただけで、なにもしないのだ。本来なら契印をつけられた娘は、早く子を生ませるために、望まない交わりを強要させられたりするのだという。でもあの鬼はわたしの後ろをついてくるだけで、なにもしなかった。当然それだけが理由ではないけれど、おかげでわたしはこの歳になってもまだ、女ではない。

(やさしい、のだろう)

早く血をよこせとせかさない分。

けれどわたしにとってみれば、最終的には絶対血を吸われてしまう以上、鬼は敵なのだ。

怖さがぬぐえるはずはない。

しばらくは静寂が続いた。

じじはいつもこの静けさのなかにひとりでのいるのだろう。慣れたように、それを破る。

「楓、そろそろ薬を飲もうと思うのじゃが」

「あっ、そうだったわ！ 今度こそ水を汲んでくる」

わたしはやっと立ちあがって、部屋のすみに置いてある桶を手にとった。

(あら……?)

ふと、その横にあった竹かごに、胡桃の殻くるみが入っているのが見える。前回わたしが用意していた食べもののなかに、胡桃はなかったはずなのに。

(わたし以外に、誰か来ている人がいるの?)

「どうした? 楓」

声をかけられて、反射的に顔を向けた。

(じじに訊いてもいいのかな)

訊かれたら困るだろうか。

「――ううん、なんでもない」

結局わたしは、訊かずに小屋を出た。じじが自分から話さないことはなるべく聞きたくない。だってきっと、じじが隠しているのは自分のためではなく、わたしのためなのだろうから。

少し山の奥のほうへ入って、伊波の町まで注いでいる川の上流へ向かう。何度も通っている場所だから、誰がつくったわけでもないのにすっかり道のようになっていた。

(そういえば、川の向こう側に胡桃の木があるのよね)

だからわたしが胡桃を口にできたのは、じじが元気に山を歩きまわっていた頃までだった。そんなに幅があるわけでも深いわけでもない川だったけれど、危険だからとじじは、わたしには決して行かせなかったのだ。

(せっかくだし、行ってみようかな)

竹かごのなかの胡桃は、もうないようだった。じじが木の実でいちばん好きなのは胡桃だということも知っている。わたしが自分で取りに行ったのだと知ったら怒るかもしれないけれど、それ以上に喜んでくれるような気がした。

川原に到着すると、わたしは桶をその場に置いて草履を脱いだ。小袖の裾を膝の高さまでたくしあげ、脱いだ草履をひょいと指に引っかけてから、川のなかへと入る。

(うわっ)

ふくらはぎのあたりまである水が、わたしの肌を刺激する。秋も半ばの川水はさすがに冷たいけれど、でも我慢できないほどではなかった。川底も、小さい石はすべて流れてしまっているせいか、大きくて表面が平らに削られた石が多く、思っていたよりも歩きやすい。

川幅はわたしの足で十歩くらい。あっさり渡りきって安心したわたしは、川からあがる一歩目で、すべって転びそうになった。

「おわっ!?!」

それでもなんとか、川のほうにだけは転ばないようにこらえて。前のめりに倒れると、目の前の大きな石に血のような紅いものがついていてことに気づく。

(こ、これって……)

もしかして、同じようにすべって転んで、誰かがここに頭ぶつけたの?

考えるだけで面白い話だが、ひとつ問題がある。

こびりついている紅が、血の色にしてはずいぶんと鮮やかすぎるのだ。血というものは、時間が経つにつれてどんどんと鈍った色になってゆき、最後にはどす黒くなってしまう。しかしここについている紅は――

そこまで考えて、わたしは「はっ」と気づいた。

(――あるじゃない、ひとつだけ)

人の血に似せてつくられたもの。

吸血の鬼が、食事の代わりに飲む紅い水――

『ぬしは、いつかこの鬼に対してだって、感謝をするときがくるかもしれんよ』

いつかの、芙蓉の言葉を思い出す。

(本当に、鬼なの?)

わたしが来ないあいだも、鬼はひとりでやってきて、じじの世話をしていた?

けれど鬼は、いつもわたしのそばにいて.....

「まさか、夜？」

川原に身体を横たえたまま、わたしは思わず口に出した。

わたしたちが眠りについたあと、こっそりとやってきては山に食べものを取りに入ったりしていたのだろうか。そうしてここで転んで、袖あたりに隠していた紅い水をぶちまけてしまった?

(やだ.....)

それを想像するとおかしくって、わたしはひとり笑った。

もし本当にそうなら、理由がなんであれ、鬼がじじを大切に思っていることは事実で。

もし本当にそうなら、わたしはそのことに関してだけ、鬼に感謝をしてもいいと思った。

じじがそれをわたしに伝えなかったのは、やはりわたしが鬼を嫌っているということ、わかっているからだろう。どんな親切でも、見る人が見れば反感を覚えることもある。わたしだって芙蓉にあんなことを言われていなかったら、「感謝をする」なんてこと、思いつかなかったかもしれない。

「――よしっ」

わたしはやっと身体を起こすと、気合を入れて立ちあがった。

(じじを想う気持ちなら、わたしも負けないわ!)

わたしだって鬼に感謝されるように、胡桃をたくさん取ってやる!

情熱を燃やす方向が間違っていることは自覚しながらも、わたしはさらなる山奥を目指した。

取った胡桃を入れるかごを持ってこなかったことに気づいたのは、胡桃の木に着いてからだった。

(ううっ)

仕方がないので袖に入る分だけ取って、川原に戻った。帰りはすべらないように気をつけて川を渡り、本来の目的である水を汲んで、急いで小屋へと戻る。ちょっと遅くなってしまったから、じじが心配しているかもしれない。

「じじ、お待たせ！」

戸を開けた瞬間、違和感があった。

(え.....)

じじが起きていたのだ。立ちあがり、こちらに背を向けている。

「楓!? 来るでないっ、すぐに逃げるんじゃ！」

叫ぶじじの向こう側に、もうひとり人が。

(人……?)

ううん、違う。あれは鬼だ。

あの鬼と同じ角を持つ、他の鬼だ!

気がつくやうに桶を落としていた。足もとが冷たかった。

「じじっ!」

腕を掴み合っているやうで身動きが取れないのか、じじは振り返りもしない。それどころかぶんと横に振られて、じじが壁のほうに転がる。

「やめて! じじに乱暴なことはしないでっ、病気のよ!」

駆け寄ったわたしはすぐに、じじの前で手を広げた。

相手はまだ若い、男の鬼だった。短い髪のがあの鬼とは対照的で、こっちの鬼はご丁寧に唇から鋭い牙まで見せている。その牙と角さえなければ、町の娘たちが顔を赤くして騒ぐだろうほど整った顔立ちをしていた。ただわたしには、たとえそれがなくとも恐ろしいという印象しかいだけないだろうけれど。

(だって、瞳が)

あまりにも鋭い。まるでこちらの考えなどすべて見通しているやうな、そんな目つきをしていた。

「楓、わしのことはいい! 早く逃げるんじゃ……っ」

後ろからじじが、乾いた声音で告げる。

(そんなこと言われたって、じじをおいて逃げられるわけじゃない!)

わたしは退かなかった。

わたしもじじが大切なんだ。

誰よりも、大切にしているんだ。

半分は、そんな意地であったかもしれない。

「ん? おまえ、契印の匂いがするな。どれ、ちょっと見せてみる」

鬼はそう告げると、素早い動作でわたしの胸もとを掴んだ。そして容赦なく、左右に引き裂く。

「いや……っ」

両乳房があらわになって、慌てて広げていた腕を戻し胸を押さえた。それでも左乳房の契印は隠しきれずに、鬼は楽しそうに目を細める。

「! これはあいつの契印……そうか、そういうことか。——それにしてもおまえ、まだ生娘か? さっさと子をつくってもらわねば困るなあ。こっちにだって予定ってもんがあるんだ。どれ、俺が男をあてがってやろうか」

今度はゆっくりと伸びてきた手が、わたしの右手を掴もうとした。それを阻んだのは、体勢を立て直したじじだ。

「なんだじいさん、まだやんのかよ。俺が手加減してるのがわからねえのか?」

「じじっ」

じじはわたしの前に割りこんでくると。

「行くんじゃ楓！ あやつを連れてこいっ。わしがこいつをおさえておるうちに……！」

今度は「逃げろ」とは言わなかった。

(そうだわっ)

この鬼がさっきからあいつと言っているのは、状況から考えて『あの鬼』のことで。あの鬼を連れてきてこの場がおさまるなら、それがいちばんの方法に思えた。

――でも。

「じじ！」

じじは鬼と組み合ったまま、一步も動かない。対する鬼は涼しそうな顔をしていた。

(この状況のまま、じじをおいていったら……っ)

「いいんだぜ？ 逃げても」

冷やかな視線を投げながら、鬼は言い放つ。

「このじいさんがここにいりゃ、どうせおまえは戻ってくるんだらう？」

「！」

否定できなかった。

(――いいえ)

これは好機なんだ。

多分この鬼は、わたしが戻ってくるまでじじをどうこうする気はないのだから。

「ただし、俺は短気だからな」

「行け！ 楓っ」

じじの叫びを合図に、わたしは小屋を飛び出した。

今さら、ひとりで来たことを後悔した。

(鬼の目的は鬼)

いつもどおり連れてきていたら、病気のじじに無理をさせることもなかったのに。

(わがままを言えばよかった?)

芙蓉と一緒になければ嫌だとか——鬼と、一緒になければ嫌だとか?

でもそんなの、こうなってしまった今だから言えること。

普段のわたしが芙蓉に逆らうことなんてできない。

そばにいてほしいなんて、言うことは許されないのだ。

山へ向かったとき以上に、頭のなかが混乱していた。

けれど馬の走る速度は速く、何度も振り落とされそうになりながらも、必死に手綱を握りしめた。

(じじはもっとつらい思いをしてるのよ)

わたしが弱音を吐くわけにはいかなかった。

町に入っても速度を緩めることはできず、人々の迷惑そうな視線を縫うように室伏へ向かった

。

宿の周りは、相変わらず騒がしい。わたしは戸口のそばに立っていた旅人に、「少しの間頼みます」と無理やり手綱を握らせると、なかに駆けこんだ。旅人の苦情は無視して。

「芙蓉っ！ どこにいるの、芙蓉!!」

待合広場で陽気に酒盛りをしている人々が、ひとり緊迫した声を出すわたしを不思議そうに振り返った。

「芙蓉！」

「どうしたんじゃ楓、そんなに着崩して。それにずいぶんと早かったのう」

二階の奥から芙蓉が現れる。

わたしは初めて、階段を駆けあがった。

「芙蓉、大事な話があるの！ 鬼はどこっ？」

切らせた息もおかまいなしにまくしたてると。

「まあ落ち着くのじゃ、楓。わらわも大事な話がある。こちらへ」

芙蓉は二階の奥にある自分の部屋へと、わたしをいざなった。

芙蓉とわたしと——そして鬼が、いつも寝泊りしている部屋。

部屋に入ると芙蓉は戸を閉め、ついとわたしのほうに顔を近づけてくる。

「芙蓉……？」

その顔は、今までに見たことがないくらい、楽しそうだった。

(こっちは大変だったというのに)

「ずいぶんとご機嫌ね」

ふと口からついで出てしまった厭味に、自分の口もとを抑える。

(いけない)

だってこれは、芙蓉には関係のないことだもの。

「ふっふっふ。そりゃあ機嫌もよくなるというものじゃ。ずっと頼んでおったことが、やっと実現したんじゃないからの」

「え？」

最初に疑ったのは、耳だった。

けれどそれ以上に、わたしは目を疑わなければならなくなった。

さっきわたしがあの見知らぬ鬼にされたことと同じように、芙蓉は自分で自分の胸もとをさらしたのだ。そしてその小さな右乳房には、わたしと同じ契印が――

どくん、と、身体中の血がいっせいに脈打つのを感じた。

「芙、蓉……」

「いいじゃろう、楓。これでわらわも楓と同じ、あの鬼のものじゃ」

(本当に……?)

確かに鬼は、同時に五人までなら契印をつけることができると聞いている。けれど今まで一度も、あの鬼が他の娘にそれをつけたことはなかった。

(――！ 違う……)

わたしがそれを、知らないだけかもしれない。

そんな単純なことに、今さらながら気づいた。

『わらわも同情されたい。――あんな鬼が、欲しい』

初めて会ったあの日、わたしをひどく驚かせた言葉を思い出す。

芙蓉はその願いを叶えてしまった。

鬼は芙蓉を、選んでしまった。

(なら、わたしはもういない?)

じじは、鬼が芙蓉の言うことを聞くのは自分の曾孫だからだと言っていたけれど、ここまできてしまったらそれだけとはとても思えない。

きっとわたしから離れたがっているんだ。

それだけは、確実なことのよう思えた。

「なあ楓、喜んでくれるじゃろう？ ……楓？」

気がつくのと、足が震えていた。足だけじゃない、手も、身体も。

わたしのなかのすべてが、わたしを拒絶していた。

「どうしたのじゃ？」

(言えない)

こんなにも幸せそうな芙蓉に、じじを助けるために鬼を貸してなんて、言えるわけがない。

「……たしが、自分で、助け……」

勇気を振りしぼるように呟いて、わたしは再び走り出す。

戸を開けた瞬間、ぶつかる身体があった。見あげなくともわかる。それは鬼の着流し。

わたしはこんな情けない顔を見られるのが嫌で、俯いたまま鬼の横を通った。階段を駆けおりのももどかしくって、あの日芙蓉がやっていたように手すりをすべりおる。途中で向こう側に落ちやしないかなんて恐怖はなかった。それだけわたしは焦っていたのだ。

(もう、じじを助けられるのはわたししかいないの……！)

わたしには、じじだけなの。

じじを助けるためなら、わたしはどうなってもいい。

どうせ鬼にすら、愛想を尽かされる女なのだ。

誰にも相手にしてもらえないよりなら――

そんな自虐的な思いが、わたしを支配していった。



山小屋に着いた頃には馬はもう疲れ果てていて、どうせこれ以上逃げられそうになかった。

(これで、いいのよね……)

戸口に一步近づくと、覚悟をひとつずつ積みあげていって、戸を開くための手に勇気を送る

。

(今までは、逃げてばかりだった)

自分から動いたのだから、じじが病気になってどうにもならなくなってからだ。

尻に火でもつけられなければ、なんとかしようとは思わなかった。

「あたりまえ」という言葉を便利に使って、それに隠れて。

そもそもわたしがもっと早く、怖がらずに町へおりていたなら、じじは病気にすらならなかったかもしれない。

(そしてきっと、鬼がわたしから離れることもなかった――?)

考えて、頭を振った。

こんなことを考える時点で、きっと駄目なんだ。

わたしにはどうせ、最初からやれることが限られている。

だからせめて、それを精一杯やりたい。

それでじじが助かるなら。

ひとつ息を飲みこんで、戸を開いた。素早くなかに目を走らせる。小屋の中央に仰向けの状態で倒れているじじの姿があった。

「じじ！」

駆け寄りながら部屋のすみずみまで見渡すけれど、あの鬼はいないようだ。

「じじ、しっかりしてっ」

抱き起こそうと背中に触れて、思わず動きをとめた。異様に熱いのだ。

「じじ……？」

「――楓か……なぜ戻ってきた。どうせわたしはもう駄目じゃ……そのまま町におればよかったも

のを……」

「っそんなこと言わないで……！」

じじにまで見放されては、わたしに居場所はない。

「おまえの鬼は……？ 一緒ではないのか……」

「……………」

答えられなかった。

だってあれはもう、わたしの鬼ではない。

芙蓉の鬼だから。

答えないわたしから、じじはなにかを悟ったのだろう。ふっと、状況に見合わない笑みを浮かべて。

「のう楓……わしはまだ、おぬしに秘密にしておることがある。楓の木の下に捨てられているおぬしを、拾ったのはわしではない……」

「えっ!？」

それは今までに一度も考えたことのない否定だった。

(じじがあんまり)

わたしを大切にしてくれるから、実はじじの本当の子どもなんじゃないかって、そんなことを考えたことはあるけれど。まるでそんな希望を、真っ向から否定するようなじじの告白。

「あの鬼じゃ。あの鬼が、おぬしを抱いてわしのもとへ連れてきた。そのときにはすでに、契印が捺されていた」

「な……」

どう、捉えればいいのかのさ。

(鬼がわたしを?)

でもどうして、じじのもとに連れてきたのか。

その場で血をすすってしまっても、誰にも気づかれることはないだろうに。

「そのとき鬼はこう言うた……自分が育てても不幸になるだけじゃから、人間であるわしに預けたいと。じゃからわしは応えた……もしもわしが死ぬときまで、ぬしがこの子を見守りつづけることができたなら、ぬしに返そうと……ごほっ、く……っ」

「じじ！ なにを言ってるのよ……」

わたしには理解できない。だって鬼は言葉を発しないはずで。じじになにかを告げるなんて、不可能なはずで……。

「死んじゃ駄目……じじ、わたしをひとりにしないで……」

わたしはじじの腕を握りしめ、こらえきれない想いを流していた。

それでもじじはなお、微笑みつづけ。

「楓、わしを抱きしめてくれんかのう……じじくさくて嫌かもしれんが」

「……っ」

わたしは返事のかわりに、倒れたままのじじに抱きついた。上から、覆いかぶさるように。やはり熱い。じじの体温がおかしい。もうどうにもならないのだろうか。わたしには、どうにもできない……？

抱きしめたまま胸を鳴らしつづけるわたしの耳もとで、不意にじじがぽつり呟いた。

「……楓の、木の根もと……――」

そしてそれから、息遣いも聞こえなくなった。

「じじ……？」

顔をあげたわたしは、じじの上に乗ったままじじの顔を凝視する。

(嫌……)

息遣いだけじゃない。鼓動も、血のめぐる音も、なにも聞こえてこない。

「じじ！　じじっ!？」

乱暴にゆすった。今ならさっきの鬼に出てきてもらって、じじを叩き起こしてほしいくらいだ

。

気が動転して、そんな物騒なことまで考える。

わたしの指先で、熱かったじじの体温がゆっくりと失われてゆく。

それでもわたしはしばらく、じじの身体を抱きしめつづけた。

(じじ……)

ろくにお礼も言えなかった。

これまで育ててくれたこと。

わたしを生かしてくれたこと。

「ありがとうって……言いたかったよ……」

どうして口から出てこなかったのだろう。

結局わたしは最後まで、疑問符しか口にできなかった。

(じじがわたしに隠しごとをしているのは)

わたしのためなんだって、わかっていたのに。

わたしはそんなじじの気持ちより、感謝より、真実を望んだ。

わたしが選んだ結果なのだ、すべて。

「わたしの――」

そう、これは押しつけられた結果ではない。

そこまで思い至って、わたしは少し冷静さを取り戻せた。

じじの上から離れて、じじを布団の上に移す。

それから小屋のなかをぐるり見渡して、壁に立てかけてあった^{くわ}鍬に目をとめた。

『……楓の、木の根もと……――』

じじの最期の言葉。

(なにかが、埋まっているっていうの?)

掘り起こせば、わたしがいろいろなものを犠牲にしてまで望んだ真実が、手に入るというのだろうか。

「……………」

目を閉じ、耳を澄ませた。

さいわい、あの乱暴な鬼はまだ戻る気配がない。

どこへ行ったのかもわからないけれど、きっといずれ戻ってくるだろう。それまでに、やれることをすべてやっておかなければ。

しっかりと自らの進むべき先を見つめ、わたしは鍬を手にとった。

もう長いこと訪れる機会のなかった、楓の木へ向かう。

楓の木は川とは逆の方向にある。

じじが元気だった頃、何度もふたりで歩いた道を思い出しながら……思い出を噛みしめるように走った。

山の奥に進むにつれ、周りの樹木の葉色が黄色や茶色に変わってゆく。主に町で暮らすようになったわたしはすっかり忘れてしまっていたけれど、もうそんな季節なのだ。

(じじに見せてあげたかった)

最期にもう一度。楓の、あの^{あか}紅を。

そうしてたどり着いた楓の木の前で、わたしは言葉を失う。

言葉だけじゃない。

息を吸うことさえ、忘れそうになった。

「どう、して……………」

信じられない。

まだ山全体に紅葉はきていないし、いつもこの木が紅く染まるのは、最後のほうだった。

——それなのに。

その楓は、燃えるような紅色を落としていた。

ぽつり、ぽつり。

じじの死を悼むように。

わたしの涙のように。

(これから土へ還る)

血の色のよう。

あまりの衝撃に鍬を足もとに落として、わたしは自分がここに来た理由を思い出した。

(そうだ、掘らなきゃ)

楓の木の根もと。

根もとといっても一周あるのだけど、おそらくこの道に面したほうだろう。そうでなければ、じじだってちゃんと伝えるはずだ。

まずはそこに積もっている葉っぱを手で掻き分けて、地面が見えるようにした。それから鍬を

手に持ち、少しずつ掘り進める。何度かじじの手伝いをしたことがあったから、鍬の扱いにはある程度慣れていた。

鍬を振りおろすこと数回、鍬の先が土の感触とは違うものを捉える。

「！」

そこからはまた、手に戻って掘り進めた。手が汚れることなど気にならない。どうせあの鬼が戻ってきたら、わたしは汚されるのだろう。半分くらい、自棄になっていた。

そうして掘り出されたものは、薄汚れた布に包まれた、書物のようなものだった。かなり古いものらしく、紙はところどころぼろぼろと崩れている。それ以上崩さないよう静かに開いてみると、そこには驚くほど美しい角字で文章が記されていた。

(まさか、じじが書いたもの?)

でもわたしが今まで見てきたじじの筆跡とは、明らかに違っているように見えて……。

冒頭を読みはじめて、わたしは「はっ」とした。

(これ、日記だわ)

しかも女性のもののようにだった。

——鬼、の。

私は鬼になどなりたくなかった。
永遠の命などいらない。
どうして彼は、鬼になってしまったの？
どうして彼は、私を鬼にしてしまったの？
ともに永く生きることが本当の愛だと、信じているのかしら。
私には耐えられなかった。
だって私が彼を愛したのは、ともに老いて死んでいけると、思っていたから。
命に限りがあるからこそ、自由に愛せたのよ。
楓も桜も、色を見せるのは一瞬。
だからこそ人は、見るたびに美しいと思えるの。
人間だって同じだわ。
たとえ美しいときが短くても、私は――彼と一緒にならそれでよかったのに。
でも、鬼の命は永すぎる。
そのあいだに私は、彼への愛を忘れてしまうかもしれない。
彼だって、私への愛を忘れてしまうかもしれない。
それも怖かった。嫌だった。
だから逃げ出した。
死のうとしたけど死ねなかった。
鬼になると身体そのものも頑丈に変化するのね。
何度身を切り刻んでも、すぐに戻ってしまうの。
狂ったように私は自傷をくり返し、そしてついにはそれをとめようとした彼を傷つけた。
彼の左眼を、くりぬいてしまった。
すぐに戻るから大丈夫だよと彼は笑ったけれど、私はもう、彼から離れるしかなかった。
そのままそばにいたら、もっと傷つけてしまうことを予感していたから。
そうして逃げに逃げつづけて、たどりついたのは大きな楓の木だった。
私は五十年ほどそこで泣いていた。
人間が近くにきたときはさすがに隠れるのだけれど、何度か姿を見られてしまったこともあった。そのせいで、人間はほとんどこなくなった。
それにどうせ、私を見れば人間のほうから逃げてくれる。
私はもうそういう存在なのだと、痛いほどわかっていたから、逃げる必要はなかった。
しかしある日、私のそばまでやってきた男がいた。
そしてなにを思ったかその男は、私の隣で一緒に泣きはじめたのだ。
どう反応していいのかわからず、私は泣きつづけた。
すると男はやがて自分の哀しみを語りだし、その物語は私の心を強く動かした。
永いこと言葉を発することなく、そして人として扱われることのなかった私に。

あたりまえのように話してくれたことは嬉しく、語られた内容はあまりにも残酷だった。
思わず私も自分の身の上を語り、気がつく。
今度は互いのために、泣いていた。
私たちは、自然とそばにいるようになった。

――そして私は、緩やかに死にゆくために、男にひとつのお願いをした。

私が死ぬために。

私に種をください、と。

実は女の鬼には、ひとつだけ早く死ぬ方法があるのだ。

鬼同士が交わって子は生まれられないけれど、人間の種を貰えば違う。

しかしそもそも鬼には子を生むような体系が存在しないから、子を生むという行為にはかなりの時間と負担がかかる。

結果、生んだ鬼は死んでしまうのだ。

話を聞いた男は、最初ためらっていたようだったけれど、私が強く死を望んでいることを誰よりもわかっていたから、最後には頷いてくれた。

子が生まれるまでの十年は、私にとって最も幸せなときであったのかもしれない。

身体はつらかったけれど、心は軽かった。

やっと私は、望んでいた世界にたどりつける。

まだちゃんと彼を愛したまま、死んでゆける。

それがなによりも嬉しかった。

私が喜ぶと、男も喜んでくれた。

嬉しさが増した。

恐怖など微塵もなかった。

心からの幸せを感じながら――私は生んだ。

人間の十二倍の月日を費やして、育んだわが子を。

何十年も私を慰めてくれた、楓の木の下で。

ひとりきりで。

生んだ視線の先に、誰かの足先が見えた。

どんなに会っていないくとも、一目でわかった。

見守ってくれていたのは、罪滅ぼしなの？

問いかけると、彼はそうだよと笑った。

だから私は、安心して最期の言葉を紡げた。

私はまだ、あなたを愛している。

あなたもまだ、私を愛してくれているのなら。

この子を、『かえで』をお願い。

近づいてくる足に、子どもを託した。

受け取った足は――彼は。
一言も応えずに戻っていった。
それが彼の親切なのだと思った。

――さよなら。

私はあと何秒、生きていられる？
残りの時間を楽しみながら、私はこれを書いている。
これは愛しいわが子へ向けた恋文。
確かに私は、自分が死ぬために子どもをつくった。
子どもにとっては、なんて身勝手な親だろうと思うかもしれない。
けれど私はちゃんとあの子を愛しているし。
あの子には私の、すべてを託しているの。
最期まで人間として、生き抜いてほしいの。
そしてもし可能ならば、彼を愛して？
それを伝えるために、私はこの日記を書いた。
埋める場所もちゃんと、伝えてあるから。
――どうかあなたが、幸せな一生を送れますように。



「これって……」

(ちょっと、待ってよ……)

わたしは自分でもちゃんと理解できないまま、乾ききった文字を滲ませていた。

じじは、わたしを拾ったのが本当はじじではなくあの鬼なのだと saying いた。もしこの日記に出てくる「彼」がそうだというのなら――子どもはわたしに、他ならない。それにあの鬼が隠している左眼にも、説明がつくのだ。

(わたし、鬼の子だったの……?)

でも身体は間違いなく人間のものだ。普通に歳をとっているし、怪我をすれば治るのに時間が^{っの}かかった。角も牙もないし、わたしを鬼とする証拠はなにひとつない。

多分、人間、なのだろう。

そうでなければ困る。

わたしは自分の身を抱きしめた。

頭のなかではぐるぐる、これまでの出来事がまわっている。

(わたしが望んでいたとおり)

じじはわたしの本当の父親で。

それは嬉しい。心から、嬉しい。

(でもじゃあ、鬼はどうなの?)

あの鬼にとってわたしは、大切な人の忘れ形見。

だからずっとそばにいたのだろうか。

——お母さんの、かわりに。

「やっと見つけたぞ、娘。こんなところにいたのか」

「!？」

聞き覚えのある声に顔をあげると、例の鬼がこちらへ向かって歩いてきているのが見えた。その後ろに、三人の町男が続いている。

「あ……」

わたしはとっさに日記を胸に抱きこんで、楓の木のほうへと後ずさった。

「あのじいさん、ちゃんと布団に寝かせてあったからな。馬はいるし、山んなかいるんだろうと思って、結構捜したんだぜ？」

実に楽しそうな様子の鬼とは裏腹に、後ろの男三人は妙に怯えていた。でも考えてみると、人間が逃げ出さずに鬼に従っているというだけで充分異常なのだ。芙蓉がわたしのために広めてくれた、鬼は必ずしも悪ではないという考えが、悪いほうに働いたのかもしれない。

「——あなたの目的は、一体なんなの？」

その瞬間、わたしは自分でも驚くほど冷静になれていた。おそらく自分が置かれている本当の立場を、この日記によって知ることができたから。これから告げられるたくさんの言葉を、ちゃんと理解できるような気がしたのだ。

鬼はきりりと、自らの鋭い爪を噛む。

答えてくれない可能性もあったけれど、わたしがあまりにも鋭い瞳で睨んでいたからか、口を開いてくれた。

「『移住』だ」

しかしそれはあまりにも、短い答えだった。

(移住?)

つまり、他の土地に移り住むということだ。この鬼が捜していたのはあの鬼で、あの鬼が今もここにいるのは、きっとわたしがここにいるから。

——意外なほどあっさりと、話は繋がった。

「吸血の鬼は、揃わないと移住もできないの？」

わざと挑発するような言葉を選んだ。

だんだん腹が立ってきたのだ。

(どうしてわたしが)

あの鬼のためにこんなめにあわなければいけないのか。

わたしの感情は、大きく揺れていた。哀しみや憎しみや切なさが絡みあって、自分でも調整できなかった。

目の前の鬼はそれを楽しんでいるのか、気分を害したふうもなく。

「今回は特別さ。なにせ大陸に渡るからな。仲間はひとりでも多いほうがいい。鬼同士の陣取り

合戦もなかなか大変でな」

「たい、りく……？」

遠い昔、じじが教えてくれたことを思い出す。

この山は島と呼ばれるもののなかであって、島の周りには水だらけの海があって。そのはるか向こうに、大陸と呼ばれるものがあるのだと。幼かったわたしに完全な理解などできるわけもなく、わたしはただとても遠いのだという認識しか持てなかった。

でもそれは、間違いではない。

遠すぎて合流できなくなるからこそ、彼らはあの鬼を連れて行こうとしているのだろう。本当は、とても強い鬼なのかもしれない。

「話はそろそろいいか？ 後ろの野郎どもが、もう我慢できねえみたいなんでな」

「えっ？」

言われて視線を移してみると、三人はなぜか顔を赤らめてこちらを見ていた。しかもその顔は、だらしなく緩んでいる。息遣いも、荒い。

「ほ、本当にいいのか……？」

「もちろんだ。ひとりより三人のほうが、子ができる可能性が高いからな」

「誰にも言わないだろうな」

「鬼はそんなにひどいやつではないんだろう？ おまえたちが言うにはな」

「鬼憑きとはいえ、なかなか美人じゃないか。今まで手を出すやつがいなかったのが、不思議なくらいだ」

「はは、存分に楽しんでくれたまえ」

(なに、この会話……)

気持ち悪いっ！

『じじを助けるためなら、わたしはどうなってもいい』

そんなふうに考えていた自分が信じられない。

『誰にも相手にしてもらえないよりなら——』

果たしてわたしは、そんなに安い存在だったの？

自分が捨てられた子どもなのだと思いますこんでいたさっきまでは、この身なんてどうでもいいと思っていた。どうせわたしはなににもできないのだから、この身を犠牲にしてもじじを救おうと。

(でも……！)

結局わたしはじじを救えず、残ったのはこの身体だけ。

お母さんの大切な想いを受け継いだ、この身体だけなのだ。

(簡単にあきらめてはいけない)

わたしは捨てられた子どもではないの。

お母さんの分もちゃんと、最期まで人間として生ききるために、生まれた子どもなの。

——わたしは抵抗を、決意した。

にじり寄ってくる男たちのあいだに、隙を探す。

(お願いよ楓の木、わたしに力を貸して！)

わたしの背中を支えてくれる、太い幹に祈った。

間が詰められる。

あと数歩で、男たちの手がわたしに届くところまできた。

(今だわっ)

わたしはとっさにしゃがんで、さっきまで自分が掘っていた部分に手を当てた。枯れ葉じゃ投げてもあまり効果はない。でも土なら――

思い切って三人の顔に投げてやる。

「うわっ」

「いってー」

「なにすんだこいつ！」

それぞれに呻く三人にかまわず、わたしはすぐ穴の横に置いていた鍬を手に取った。

加減をする余裕など、もちろんない。

「ご、ごめんなさいねっ！」

一応謝りながら、鍬を振りまわす。

まだ目を抑えたままの三人は、当然よけることなどできずに、見事にわたしの攻撃をくらって沈んだ。でもわたしは不安で不安で、しばらく振りつづけていたのだった。

やっと鍬を離れたのは、疲れて振れなくなったから。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

喘ぐように息をしていた。

そんなわたしを見る鬼の目は、やはり楽しそうだった。

「ふむ、意外と頑張るねえ。――気は済んだか？」

そう言いながら、ずんずんと近づいてくる。

「な、なによ……はあ……はあ……っ」

再びわたしは後ずさるはめになり、また楓の木に背を預ける。

「人間が鬼に種を植えつけられるようにな、鬼だって人間に種を植えつけられるんだぜ？ 生まれてくるのはやはり人間だがな」

「!？」

「おまえはまるっきり俺の好みじゃないんだがな。人間は頼りにならねえし、俺が自分でやるしかないな」

「それ以上近づかないで！」

「それは無理な相談だ」

鬼はどンドンと近づいてくる。

(どうしよう……)

さっきと同じ手は、当然使えないだろう。それに鍬が――ここからは届かない位置に置いて

しまった。

「あ……」

逃げ出したいのに、足が動かない。

人間相手では大丈夫でも、鬼相手に勝てる気がしない。

しかもこの鬼は、わたしが知っているあの鬼よりも、はるかに凶暴なようで……

「――！」

ついに伸びてきた手に、わたしは思わず目をつむった。

その瞬間。

「好みじゃないなら、手を出すな」

耳に届いた見知らぬ声と、なにかを引き裂くような音は、わたしの目を強制的に開かせるのに十分な威力を持っていた。

「ひ……っ」

開いた目の前にはまだ鬼の顔があって、首もとに鍬が刺さっている。そしてその後ろには、『彼』の顔。

「――来い、楓」

その唇が、確かにそう動いた。先ほどの声は本当に彼のものだったのだ。

怖い鬼。

恐ろしい鬼。

嫌い。

そばにこないで。

そう感じていた自分が嘘のように、気がつくとなわたしは彼に駆け寄っていた。

――抱きついていてた。

「楓……」

「いってえなあ、なにしやがるんだいきなりっ！　いくら死なないとはいえ、痛みを感じるのはわかってんだらう？」

刺さったままの鍬を引き抜きながら、鬼は身体ごと振り返る。血はすでにとまっているのか、思ったよりも流れていなかった。

大丈夫、とでも言うように、彼はわたしの背中に手をまわし、やさしくなでてくれる。

「そちが契印持ちに手を出そうとするからだろうが」

その手とは裏腹に、声はかなり怒っているようだった。

「別に血を吸おうとしたわけじゃねえんだ、いいじゃねえか」

「よいものか！ だいいち、われはもうそちらには戻らぬと、文^{いの}を送ったはず」

「――それだけで俺らが納得できるとってんのかよ」

終始楽しそうだった鬼の顔が、不意に変わった。恐ろしいほどの怒気をこめた瞳に。

「大陸に移住することになって、今はひとりでも多くの同胞が必要なんだ。それなりの理由がなければおまえを出すわけにはいかねえなあ。だいいち、何年おまえを自由にさせてやったと思っているんだ？ あの女を捜しにいくといったきり、戻ってこない。こうして来てみれば、契印捺した人間をこんな歳になるまで放置している。おまえが一体なにを考えているのか、さっぱりわからねえ！」

「……………」

彼も思うところがあるのか、息を吸っておきながらも無言を返した。

(一体どんな表情をしているの……？)

おそるおそる見あげると、彼と目が合う。

信じられないことに、彼はにこり笑った。

「……いいだろう。一度そちらに戻ろう」

「えっ!？」

言ってしまうってから、口を抑える。

彼はひとつ苦笑して。

「先に戻っていてくれ。あとから追いかける」

「絶対だな？ 信じるぞ？ もし破ったときは今度こそ、その娘を――」

「約束しよう」

鬼は「ふん」と鼻を鳴らすと、それでも素直に山をくだっていった。

残されたのは、わたしと彼と、気絶した人間三人。

わたしはまだ彼を抱きしめたままの自分に気づいて、慌てて離れた。あの鬼がいなくなったのなら、もう怖がるものはないんだ。

「ご、ごめんなさい……っ」

恥ずかしさに背を向けると、ふわりと、今度はわたしが背中から抱きしめられる。

「謝るのはこちらのほうだ。永いことそちを怖がらせておった」

「ち、違うの。それはわたしが勝手に怖がっていたからで……あなたになにをされたわけでもないわ」

それは本当だ。

彼はただずっとそばにいただけで、なにもしていない。

芙蓉に出会って、わたしはそのことに初めて気づいた。

気づくことができた。

「――それより……言葉、話せたのね……」

せめて彼が最初から言葉を話してくれていたなら、わたしがこんなにも怖がることはなかったのだろう。……多分。

「すまぬ。じじと約束していたからな。じじが死ぬそのときまで、われがそちになにも告げず見

守りぬくことができたら、そちを返してもらおうと」

そういえばじじも、そんなことを言っていたっけ。あのときは「なにも告げずに」の意味がわからなかったけれど、今ならわかる。

(わたしが生まれた経緯)

そしてわたしが、どんな想いを背負っているのか。

そういうことだ。

「でも……別に言葉の全部を封印しなくたって、よかったじゃない……」

それ以外のことなら、別に話しても問題なかったのに。彼はなぜか、すべてを封印する道を選んだ。おそらく彼にとってもそのほうがつらかっただろうに。

わたしの頭の上で、彼が笑ったのがわかった。

「言って、しまいそうだったからな。自制のためにすべてを封印した。表情をつくらぬようにしたのもそのためだ。一度たががはずれると、なにをしでかすかわからぬ。――鬼になるということは、精神にも影響を与えるのだと……鬼になってから気づいた」

「！」

彼はわたしを抱きしめる手を緩め、肩を掴んで、くるりと方向転換させた。わたしを見おろす瞳が、それまでとは比較にならないほど慈愛に満ちた色をしていて。わたしは自分の顔が楓色になるのをとめられない。

「楓、聞いていただろう？ われは一度、もといた町へ行ってくる。戻るのは……そうだな、祭りのあたりになるだろう。それまでに、考えておいてほしい」

「？ なにを……？」

瞳の色が、少し揺れた。

「――われは、人間に戻るための方法を探そうと思っておる。そのための旅に出ようと」

「え……っ？」

「だがそちのことが心配だった。守るならばそばにおるのがいちばんいいだろうと思ってな」

「それって……」

「ああ、そちさえよければ、旅についてきてほしい。そちに契印を捺したのはそのためだ。それさえあれば、他の鬼に血を吸われることはないからな」

(そう、だったんだ……)

この契印は、彼がわたしの血を確保するためのもの――鬼にするためのものではなく。

わたしを他の鬼から守るため――鬼にさせないためのものだったのだ。

「あ……じゃあ、芙蓉のは……？」

芙蓉の右乳房についていた契印を思い出して、わたしは口にした。するとそのとたん、今度は正面から、彼はわたしを抱きしめてきて。

「ちょ、ちょっと――……」

「黙っておれ。――芙蓉がなにを言ったかしらぬがな。われはそちのためにしか行動しておらん

。それだけはわかってくれ。じじのために動いておったのだって、じじの体調がよくならなければ、そちが哀しむと思ったからだ。……まあ、個人的な感謝の気持ちが、なかったわけではな
いがな」

「わ、わかったから放してっ」

(なんだろう)

意識しだしてしまうと、妙に恥ずかしい。

「なんだ、さきほどはそちから抱きついたくせに」

「だって……っ」

それはあの変な鬼がいたからだ。

反論したかったが、彼の嬉しそうな顔を見ると、できなかった。

「――さて、そちの馬は使いものにならぬほど疲れているようだったからな、われの乗ってきた
馬で、そちを町まで送ろう」

素早い動きで、彼はわたしの右手を掴む。

「あ、この人たちは？」

ぐいと引いて、歩き出そうとする。

「時間が経てば勝手に起きるだろう。大丈夫だ、死んではいない」

踏まないように男たちをよけて。

「あと、じじのお墓……」

亡くなったじじのことを思い出した。

「今日は無理だ、もうすぐ暗くなる。明日にでも、芙蓉に頼んでやってもらえ」

彼はここまで馬で来たらしく、少し歩いただけで繋がれた馬が見えた。

「……………」

ひょいとわたしを抱えあげて馬に乗せた彼は、無言を返したわたしを覗きこんで。

「どうしたのだ」

わたしはただ首を振った。

(きっと、不安なんだ)

今町へ向かったら、彼とはしばらく会えなくなる。

そんなこと、今まで一度もなかったから。

数時間離れていることは、芙蓉のおかげで何度かあったけれど。今回は祭りまで。今日を入れて
てもあと七日もある。

(本当に、帰ってくるの?)

あの乱暴な鬼に妨害されて、二度と会えないんじゃないか。

唐突にそんなことが心配になった。

今まで散々嫌って逃げていたくせに、なんて勝手なんだろう。

自分でもそう思う。

けれど本当のことを知ってしまったら、わたしは――

(離れるのが怖いよ)

そしてそれ以上に、答えを出すのがもっと怖かった。

「……ねえ、これを持って行って」

駆ける馬の上で、わたしは彼に例の日記を手渡す。胸もとに隠していた、想い。

「これは？」

「日記よ。……お母さんの」

「！」

「わたしだと思って、持って行って……？」

「……ありがとう」

そうしてわたしたちは、伊波の町の入口で別れた。

わたしが室伏にたどり着いた頃には、あたりはもう闇色の帳に包まれていた。

「――！ 楓……っ」

宿に入る前に、芙蓉が戸口から飛び出してきてわたしに抱きついてくる。ずっとそこで待っていたのだろうか、その手は少し冷たく、そしてまぶたはひどく腫れていた。

「楓、すまぬっ！ わらわはぬしに嘘をついた。そのことでぬしがどれほど傷つくのかも考えず……わらわは……っ」

「芙蓉……」

背中に腕をまわしてやると、芙蓉はわたしの肩にあごを預けてきて。

「……ぬしに見せた契印は贋物じゃ。わらわが自分で描いたのじゃよ」

耳もとで、告白してくれた。

「そうだったの」

これ以上芙蓉に責任を感じさせないようわたしは、できるだけ明るい声音で返事をする。その内側で。

『われはそちのためにしか行動しておらん』

そう告げていた彼の言葉が、まぎれもなく真実であったことに安堵した。

「――楓、鬼がおらんのは、わらわに怒っておるからか？」

「えっ？」

芙蓉はわたしの肩から顔を離すと、わたしの顔を両手で挟み。

「ぬしが走って出て行ってしまったあと、鬼はひどくわらわを睨んできたのじゃ。それまでは一度もあのような顔、わらわに対して見せたことなどなかったから……わらわはよほど嫌われてしまったのじゃろうか？ のう楓、どうか本当のことを話しておくれ」

芙蓉の強い瞳に反応するかのように、室伏の脇に立つ柳がさわさわと揺れた。

わたしを促すように。

「……芙蓉」

名を呼びながら、わたしは芙蓉を地面におろした。かわりにわたしがしゃがんで、芙蓉の頭にそっと手をそえる。

「彼は怒っているから戻ってこないのではないわ。全部話すから――ただ、芙蓉の両親にも同席してもらいたいの」

すると芙蓉は、きょとんとした顔をして、首を右にかしげた。

「父上と母上なら、さきほど戻ってきたのじゃ。わらわがあんまり泣きやまんから、心配した店の者が呼び戻してくれたのじゃよ」

「そうなんだ、それはちょうどよかったわ」

(なんだ)

やはり芙蓉は、ちゃんと愛されているんだ。

その想いを改めて知ることができて、わたしは安心した。

きっとひとりきりがさみしいから。

いずれはみんな、いなくなってしまうから。

芙蓉は鬼である彼を望んだのだろう。

それであんないたずらをしたのだろうと思う。

(でも、ね)

芙蓉は気づいていないだけなのだ。

長いことそばに居すぎて気づけなかったわたしのよう。

失われたいものは、確かにその胸のなかにあることを――

わたしはもう一度、芙蓉を強く抱きしめた。

「か、楓？ なんじゃ、どうした？」

「――じじが、死んじゃった」



芙蓉に両親を呼んでもらって、四人で芙蓉の部屋に集まった。ここは室伏でいちばん奥の部屋であり、誰にも邪魔される心配はない。そう広くもない部屋の上座に旦那さまが座り、その両脇に女将さんと芙蓉が陣取った。わたしはひとり下座に尻をつき、旦那さまと向かい合っている。

まずわたしがじじの身の上を説明すると、芙蓉だけが驚きの声をあげた。

(やっぱり、気づいていたんだ)

旦那さまと女将さんは。じじが自分たちの祖父かもしれないと。

けれどさすがに、わたしがじじの本当の子どもだと知ると、全員が大きく目を見開いた。

「ええっ!？」

「か、可能性がないわけではないと、思っはいたが……」

「では、わらわと楓は血が繋がっておるのじゃなっ!？」

ひとりだけやけに嬉しそうな、芙蓉の声が印象的だった。

「そうなるわね」

(わたしも嬉しい)

だってずっと、自分はひとりなのだと思っていたから。

じじや鬼はいつもそばにいてくれたけれど、そこに血の繋がりがあるとは思っていなかった。物語のなかの人物にはみんな肉親がいるのに、どうしてわたしにはいないのだろうと、さみしさに泣いてしまうこともあった。

(それを慰めてくれたじじは)

心のうち、どんなにつらかったであろうか。

自分が本当の父親である分よけいに、いくつもの言葉を呑みこんでいたのだろう。

「ではなぜ、祖父はそなたにそれを隠していたのだ？」

問いかけてきたのは、旦那さまだった。まともに話をするのは久々だったけれど、あまりそんな気がしないのは、まもっている雰囲気はじじと似ているからだろうか。

わたしは首を振り。

「わかりません。でもきっとじじは、わたしと距離をおきたかったんでしょう。わたしはふたりが愛し合って生まれた子どもではないし、いずれ鬼に返さねばならない存在でしたから……」

旦那さまの眉間に、しわが寄った。

「それはどういうことだ？」

少し乗り出すようにして、身を正す。

次にわたしは、母である女鬼とじじのことを話して聞かせた。そしてわたしに憑いた、彼のことを。

すべて話しおわると、不意に芙蓉が立ちあがる。わたしの目の前まで一歩ずつ踏みしめるように歩いてくると、芙蓉はなぜかひざをついた。

「ふ、芙蓉……？」

「あの鬼は誰にでもやさしいのだと、わらわは思っておった。誰でも鬼のものになれるのだと。――しかし、違ったのじゃな。鬼も怒るはずじゃ。わらわは勝手に、鬼の大切なものを傷つけてしまったのじゃから……」

それから芙蓉は、ひざの前に手をつき、深く頭をさげ――

「本当にすまなかった」

「やめて芙蓉、わたしの心がよわいからいけなかったのっ。それに……わたしはそれ以上に多くのものを芙蓉からもらったわ。芙蓉のおかげで、たくさんの真実に気づくことができた。――頭をあげてよ。わたしにお礼を言わせて？」

少し押し黙ったあと、それでも芙蓉は、素直に顔をあげてくれた。

わたしは精一杯微笑み。

「――ありがとう、芙蓉」

はっきりと、口を動かした。

それは付人から主人に対しての礼ではなく。

ひとりの女からひとりの女への、感謝の言葉。

「っ楓え～」

と瞳に涙とためたまま抱きついてこようとした芙蓉の両肩を、わたしはそれぞれの手で抑える。

「むう？」

当然芙蓉の腕のほうが短いので、小さな手がわたしに届くことはなかった。

わたしはいつも、芙蓉がわたしに見せていたようなからかい顔を意識して。

「芙蓉、今抱きつくべき相手はわたしではないわよ？ なんのために両親に同席してもらったと思っているの」

「そりゃあもちろん、じじのことを伝えるためじゃろう？」

戸惑う仕草は可愛いが、はずれだ。

「違うわ。――芙蓉にも、気づいてほしかったからよ」

「！」

芙蓉は抱きついてこようとする力を弱めた。

「芙蓉は、自分をおいていかないものが欲しかったんでしょう？ だから鬼を望んだ」

告げると芙蓉は、一瞬戸惑ったように視線をそらしたが、またすぐにこちらを向いてくれた。

「……そうじゃ。だって、わらわが大きくなるまでずっとそばにおると、言っておった大じじさまは死んでしまうた。せっかく仲よくなったじじも、あまり体調はよくのうた。じじがもし死んでしまうたら、楓だってどうするかわからん。父上も母上も、わらわよりも当然先に死ぬじゃろう？ そうなったとき、一体誰がそばにおってくれる？ 一歳を取らぬ鬼しか、思いつかなかったのじゃ……」

「本当にそう？ 芙蓉」

「え……？」

「芙蓉のおかげでわたしは、鬼と向かい合うことができたわ。近くにすぎで、怖いだけだった鬼――わたしはちゃんと見たことがなかったから、そのやさしさに気づけなかった。芙蓉が気づかせてくれたの。橋渡しをしてくれたのよ？」

「……………」

芙蓉は賢い子どもだ。

だからそれだけで気づいてくれるだろう。

そう思っていたわたしの後押しをしたのは、静かに話を聞いてくれていたふたりだった。

「芙蓉。確かにわしとこいつはおまえをおいて先に死ぬのだろう。だがずっとおまえのそばにいるべきものは、ちゃんと用意してあるのだぞ？」

「えっ!？」

旦那さまの言葉に、芙蓉はものすごい勢いで振り返る。

「そうよ、芙蓉。あなたしだいで、ずっとずっと、いくらでも……そう、たとえあなたが死んだあとでも、あなたの名の残し、続いていくものが」

女将さんの想いが、芙蓉を真実に導いた。

「！ ……そうか、室伏、じゃな……？」

「室伏がこのままの状態を保つことができれば、おまえはなに不自由なく暮らしてゆけるのだ。同時におまえの頑張りしだいでは、室伏はどんどん大きくなる。そしておまえが手放さない限り、室伏はおまえのそばにいつづけるだろう」

「でも……ごめんね、芙蓉。私たちは未来のあなたのことばかり考えていて、今のあなたのことをちゃんと考えてあげられなかった。本当はさみしかったのでしょうか？ 女中から楓ちゃんに甘えているあなたのことを聞いた時に、悔しかったの。でも、『芙蓉は聞き分けのいい子』と決めつけてしまったのは私たちで、芙蓉がそのことを理解している以上私たちに甘えることなどないのだと、どこかであきらめていたんだわ。この宿の発展こそが、芙蓉のためになるのだと言い聞かせて……」

芙蓉の背中が、かすかに震えていた。

わたしはやさしく、その背中を押し出してやる。

「今、抱きつくべきなのは？」

最後の強がりを払拭するために、囁いた。

「――父上っ、母上えっ！」

宿のために、幼い芙蓉を大じじさまに預けたふたりは。

今やっとその手に芙蓉を、取り戻したのかもしれない。

(よかったわね、芙蓉)

これで芙蓉は、そばに誰がいても解消されなかったさみしさから、解き放たれた。きっとわたしや彼がいなくなっても、大丈夫だろう。

(.....じゃあ、わたしは?)

わたしはどうしよう。

これまで見たことがない、心から笑う芙蓉の顔を見ながら考える。

『そちさえよければ、旅についてきてほしい』

彼はそう言った。

人間に戻るために、旅をするのだと。

(本当に戻れるの?)

鬼になるのが簡単だからって、人間に戻るのも簡単だとは限らない。そんな話など聞いたことがない。戻れる保証はなにひとつない。

それでも彼が本気であることは、その準備のために費やした時間から明らかで。

(わたしが育つまで――二十年)

歳を取らない鬼にとっては、そう驚くこともない時間なのかもしれないけれど。人間のわたしにしてみれば、それは気の遠くなるような永さだ。そのあいだ一言も喋らずに――ましてや、愛しいあまり哀しませてしまった恋人の忘れ形見を前にして、過ごしていたのだ。どれほどの覚悟がそこにあったのか、世間知らずなわたしだってわかる。

(わたしが、断る可能性だってあるのにね)

ひとり自嘲気味に笑って、わたしは立ちあがった。

三人はまだ、やっと親子に戻れた喜びを噛みしめている。わたしが邪魔をすることもないだろう。

そっと部屋を出ようとする。

「楓っ、わらわはわがままなのじゃ！ 勝手に付人を辞めたりしたら、許さんからの！」

気づいた芙蓉に声をかけられた。

「大丈夫」という意味をこめて微笑んでから、今度こそわたしは部屋を出る。

廊下をまっすぐに進んで、階段をおりた。番台は忙しそうにしていたが、旦那さまと女将さんはもう少し芙蓉に貸しておいてほしいと頼むと、女中は嬉しそうに頷いてくれた。

戸口を出たわたしは、横に立っている室伏の象徴ともいえる柳の木に近づく。

(――ああ)

背後に気配がないだけで、背中が寒いと感じるのはなぜだろう。

あんなに嫌がっていたのに。

ついてこないでって、何度も叫んだのに。

わたしは人目につかないほうへまわりこむと、木に背中を預けてしゃがんだ。

「……っと、自分勝手、だよね……」

呟きが、水を呼んだ。

(離れるのが)

こんなに不安だなんて思わなかった。

こんなにつらいなんて思わなかった。

どんなに怒鳴ってもそばにいた。それは彼なりのやさしさだったのかもしれない。

もし相手が芙蓉みたいな人だったら、一度離れてみてわたしがさみしいと感じているうちに戻ってきたりするのだろう。

でもそれをやっ飛ばせば、わたしがなにも言えなくなるから。

どう接すればいいのか、わからなくなってしまうから。

(彼は悪役を演じつづけた)

それは他でもなくわたしのためなのだと、今ならよくわかる。

触れたことはほとんどないけれど、そこは確かにあたたかだった。

冷えた背中がなによりもそれを証明していた。

(ちゃんと帰ってくるかな、――！)

名前を呼ぼうとして、まだ知らないことに気づく。

ひざが濡れていくのを、わたしはとめられない。

(訊いておけばよかった……)

名前を、呼んであげればよかった。

きっと喜んでくれるような気がした。

もう一度、笑ってくれるような気がした。

(今度会ったら、ちゃんと訊こう)

だから。

「……っ対、戻ってきて……」

契印を抱きしめるように、強く抑えた。

翌朝。

祭りの準備は一度中断して、わたしと芙蓉、そして旦那さまと女将さんの四人に加え、協力者を三名ほど伴って如封山へと向かった。目的はもちろん、じじの遺体を葬るためだ。昨日は余裕がなくて、山小屋の布団の上に寝かせたまま町に戻ってしまった。それがなによりも心苦しくて、朝いちばんで向かうことにしたのだった。

山小屋のそばには、わたしが昨日おいていった馬がいた。さすがに疲れは取れているようで、人の姿を見るなり大きな声でいななく。きっとおなかが減っているのだろう。

「すみません、先にこの子にお水を飲ませてきてもいいですか？ ついでに汲んできますから」

馬の手綱を掴みながら告げると。

「わらわも行くぞよ」

芙蓉がひょいと馬の背にまたがった。

(まったく……)

わたしはひとりで馬にまたがれるようになるまで結構かかったというのに、芙蓉のこの身の軽さといったら、振袖を着ていることが本当に信じられないくらいだ。

「じじは小屋のなかにいますので……どうか、ゆっくりと顔を見てやってください」

旦那さまと女将さんは複雑そうな表情を浮かべながらも、頷いて小屋へと入っていった。

「じゃあこっちも行きましょ、芙蓉」

「水を入れる桶は持ったのか？」

「……忘れるところだった」

入れるものを持たないまま、胡桃を取りに行ったことを思い出す。

(成長しないなあ、わたし)

綱を芙蓉に預けて、先に入ったふたりを追うように小屋のなかへ。布団を囲むふたりはとてもやさしい、そしてさみしそうな表情をしていた。自分たちを弟に託して出ていったことを、恨んでいる様子など微塵もなくって、わたしは安心する。それだけ弟である大じじさまが、みんなの幸せのために頑張っていたということなのだろう。

気づかれぬようにそっと、部屋の隅にある桶を拾った。いくつか山のなかに置き去りにしてきてしまったものもあるけれど、じじがよくいろんな大きさの桶を自分でつくっていたこともあって、数に困ることはなかった。

(全部)

じじの形見だ。

外に戻り、今度こそ川へと向かう。

芙蓉は馬の上できょろきょろとあたりを見まわしながら。

「もう一部の葉は紅あかいのう。じゃが、紅葉狩りにはちと早いかな」

「ああ、でも奥にある楓の木はもうかなり紅かったわ」

「そうか、ではあとで行ってみよう」

「ええ」

「……………」

「……………」

不思議な雰囲気、わたしたちを包む。

(昨日はまだ)

たとえ目の前でじじが果てるのを見ている、実感がわかなかった。頭ではわかっているのに、心がそれを信じていなかったのかもしれない。でも今日訪れた小屋のなかは、昨日となにひとつ変わらず――じじはまだ、そこに寝ていた。その目は永遠にあくことがないのだと、思い知らされた。

さく、さく、と。枯葉を踏み進む音が響く。

小梢のざわめきがそれに応え、わたしたちの静寂を柔らかいものへと変えてゆく。

「――楓は、じじさまを看取れたのか？」

「！」

身体に、冷たいじじの体温を思い出して、わたしは足をとめた。

「うん……わたしはちゃんと見届けたよ。わたしが今こうして落ち着いていられるのは、そのおかげだと思うの」

笑えた。

無理をしてなどではなく、自然に。

『大じじさまは、少し前に亡くなられた。……わらわはそれを看取ることができて、幸せじゃったよ』

芙蓉の言葉が、今ならよくわかる。

(わたしも、幸せだよ)

そこに間にあわない可能性もあった。

わたしがまったく知らない瞬間に、ひっそりと消えてしまう可能性だってあったのだ。

でも、わたしはそこにいた。

じじの魂が失われてゆくのを、この目でちゃんと確認できた。

(死が、とめられないなら)

せめてそれを見届けることが、わたしにできる唯一のことだった。

わたしのせいで死んだと、そう思わないわけではない。

でもじじは、わたしがそうやって自分を責めることを望まないだろう。

ありがとうさえ言えなかったわたしは、せめてじじが喜ぶようなことを、していたかった。

(自分勝手なのは、わかってる)

それは彼のことで、痛いほど理解させられた。

だからこそ、わたしは開き直ろうと。

それでみんなが喜んでくれるなら。

自分の悪い部分ばかり見るのは、やめようと。

そう思うことで、心が軽くなった。

「そうか……よかったな、楓」

「うんっ！」

芙蓉も笑顔で返してくれた。まだ小さなその胸に、人の死を二度も抱えて。

ほどなくして、無事に川原へと着いた。

わたしが馬から芙蓉とおろそうと振り返ったときにはすでに、芙蓉の身体は宙に浮いていた。

「芙蓉……っ？」

ひょいと地面に着地した芙蓉は、わたしの手のなかの桶を奪って、一目散に川のほうへと走ってゆく。一体なにを急いでいるのか、わたしにはまったくわからなかった。

「のう楓。父上や母上になにか言われたら、誤って川に落ちたのじゃと言っておくれ？」

わたしに背を向け、多分川を見つめたまま、芙蓉が告げた。

次の瞬間――

「芙蓉、なにを……!？」

突然川に飛びこんだのだ。

わたしは慌てて駆け寄ると、草履を脱ぎ捨てて川へ入った。水かさは相変わらず、ふくらはぎのあたりくらいまでしかなかった。

(そうだ)

この川は浅い。飛びこんだって、死ねるわけじゃない。

案の定芙蓉は、水につけていた顔をあっさりと持ちあげる。当然だが、その顔は濡れていた。

(――！)

顔が、濡れる……？

もしかして芙蓉は、泣くことをごまかすために？

「……そう、よね」

いくら芙蓉の内面がどんなに大人のものであっても、芙蓉は決して大人ではないのだ。気に入っていたじじを――まして、血が繋がっているのだとわかってしまったじじを亡くして、つらいのは当然芙蓉も同じ。芙蓉はただ、それを耐えているだけ。

わたしは水のなかを、ゆっくりと芙蓉に向かって歩いた。ばしゃばしゃと立つ水の音が、縮まる距離を教えてくれる。

「どうした楓、変な顔して」

近づくとわたしに気づいた芙蓉が、そんなことを言った。自分の表情は、隠したまま。

「芙蓉……遠慮しないで、両親のもとで泣けばいいのに」

もう三人のわだかまりは消えたはずなのだから。

しかし芙蓉は首の振りでも否定を示し。

「違う楓、じじの前では泣きたくないだけじゃ。じじはわらわに会うたびにいつも、元気なわらわが好きだと言ってくれた。大きくなっても、その笑顔だけは忘れるなど」

「！」

「じゃからここで泣いておく。――いや、これはただの水じゃからな。わらわは水遊びをしておるのじゃ！」

「芙蓉……」

冷たい水に足を浸したまま、わたしは芙蓉を抱きしめた。もう何度、こうしただろうか。芙蓉の潔さは、いつもわたしの心を動かす。わたしもそうありたいと思う。

(自分の心にも)

潔く――。



「芙蓉、下の骨組みはこれでいいの？」

山から帰ったあと、わたしたちは山車づくりに精を出していた。

お墓は、結局あの楓の木のそばにつくった。それがいちばんいいだろうとみんな賛成してくれたから、遠慮なくそこを選ぶことができた。

(みんな、やさしい)

じじはもともと室伏の人間なのだから、そちらのお墓に入りたいと言われても仕方がないと思っていたのだ。けれどそんな話は一度も出ずに、わたしの意思が尊重された。

(じじ……安らかに、眠ってね)

再び心のなかで唱えながら、手を動かす。

「……そうじゃな、それくらいでいいじゃろう。ただその締めつけは、男の手でなければ駄目じゃ。ちいと待っておれ」

芙蓉はそう告げると、持っていた絵筆を置いて部屋を出て行った。

そう、ここは芙蓉の部屋なのだ。芙蓉がこっそりつくってみんなを驚かせたいと言うから、芙蓉の部屋でちまちまつくっているのだった。もっとも、こっそりと言ったってみんなから要望があつてつくっているのだから、つくっていること自体はばれればで。芙蓉が隠したいのは、どうやらその図案のようだ。

わたしは手を休めて、さっきまで芙蓉がいた場所へと移った。

わたしが木の棒や板で骨組みをつくっている間、芙蓉は山車に貼る紙に絵を描いていたのだ。見おろすと、あたり一面に花の絵が散らばっていた。

(……考えたわね、芙蓉)

宿のお客さんみんなの注文は『花をたくさん飾りつけたおしゃれな山車』。だけど今の季節は秋だ。咲いている花などかなり限られている。その分芙蓉は、華やかな絵で表現しようとしているのだろう。

「待たせたのう、楓。下で暇そうに酒を飲んでいたら連れてきた」

やがてそう言いながら芙蓉が連れてきたのは、以前お世話になった講釈師の秋水さんだった。

「なんだい、人使いが荒いな」

苦情を言いながらも秋水さんの表情は穏やかで、手伝う気は充分にあるようだ。

「父上があとで手伝いに来ると言っておった。それまでの我慢じゃ」

「へいへい」

あまりに微笑ましくて、つい。

「こら楓！ 笑っておらんでこちらを手伝うのじゃぞっ」

「はいはい」

「ふたりとも、返事は一回！」

「へーい」

「はーい」

「……………」

今度は三人で笑った。どうってことない日常が、なぜだかとても楽しかった。

(――鬼がない)

それだけで、他人のわたしを見る目が変わった。

今までごめんと、謝る人が多かった。

知らない人まで、親切にしてくれるようになった。

(やっと)

みんなに人間なんだって、認められた。

わたしはなにも変わっていないのに。

ただ鬼がないだけなのに。

わたしが望んでいた日常は、鬼から離れることでしか手に入らなかったのだ。

鬼から離れさえすれば、ずっとこうして普通に暮らすことができるのだ。

(――でも、気づくのが遅すぎた)

今のわたしには、きっと永遠に彼から離れるなんて、できない。

ねえ、見える？

わたしの心には、穴があいているの。

わたしも知らなかった。

背後から少しずつ、広げられた穴。

わたしのさみしさ。

だけどね、ここにいる人は誰も、その穴を生めることはできないの。

(みんなは彼ではないから)

そんな単純なことに気づくのに。

彼が世界にひとりだけなのだと気づくのに。

阿呆なわたしは二十年もかけてしまった。

「――おお、楓。なかなかうまいじゃないか」

わたしが描いた花を見て、芙蓉が声をかけてくれる。

「山でできる遊びなんて限られていたから。花を摘んできては描いてみたり、色を抜き出して染

めたりしていたの」

「ほほう、なるほど。ん……………」

「？　どうかした？」

突然芙蓉が腕組みをして俯いてしまったので、心配になったわたしが問いかけると。

「白い布をな、花の色で染めて、えっと、たとえばこうやって……」

芙蓉は木の板を包むために置いていた風呂敷を手にとると、手のなかで器用に動かした。

「……こうやっての、こういうふうにすれば……ほれ、花に見えんこともなかろう？」

そうして完成した布の花は、紙に描いた花よりも当然立体的で、形はまだ不恰好ではあるのだけれど、やりかたしだいではとても豪華なものになるだろうことが予想できた。

「ここを紐でとめれば完成じゃ」

「す、すごいわ芙蓉！　これもつくりましょっ」

わたしが賛成すると芙蓉は、横で一生懸命紐の締めつけをしている秋水さんに視線を流して。

「……のう秋水。ぬしは手先が器用じゃったよな？」

(ああ)

確かにそれもやるとなると、もっと人手が必要なのだ。

さすがの秋水さんも今回はまともに嫌そうな顔をしながら……

「酒を二倍振舞ってもらうからな？」

……告げた言葉は十分に協力的なものだった。

(さすが)

芙蓉の笑顔は怖いものなしかもしれない。

そこへ旦那さまがやってきて一夕方には女将さんの加わり、総勢五人による山車づくりは、かわるがわる休みながらも、祭りの前日まで続いた。

わたしがその後ろ姿を見かけたのは、芙蓉のお使いで街の向こう側まで行ったときだった。

(あら……?)

祭りを明日に控え、一様に盛りあがる人々が行き交う道の上。普段の何倍も混みあった場所でありながら、たったひとりがわたしの目を惹いた。少し前を歩く、白い着流し。頭に布をかぶっていたので、尖ったものの存在を確認することはできない。でも背丈や肩幅は、今は町にいないはずの彼に、似ているような気がした。

(まさか、ね)

町に戻っているのなら、すぐ室伏に来てくれるだろう。

わたしの後ろに戻ってくれるだろう。

そう信じているから、彼ではないのだと思った。

――でも。

ついその後ろ姿を、目が追ってしまう。

それはわたしだけではないようだった。

すれ違う人は大抵足をとめ、その人を振り返る。

(まるで、彼にしていたように)

「……………」

目的の宿の前まで来て、わたしは足をとめた。

今日ここにやってきたのは、山車の材料をおすそわけするためだった。室伏とは街を挟んだ反対側にあるこの宿・浜木綿^{はまゆう}から、こちらも急遽山車をつくることになって材料が足りないのので少しわけてほしいと、連絡が入ったのだ。

芙蓉の話によると、浜木綿は前々から室伏への対抗意識をむき出しにしており、本来ならばそのような頼みごとをしてくるはずがないのだという。それなのに連絡をしてきたということはそれだけ困っているのだろうと、こうしてわたしが届け役を任された。芙蓉はこちらの山車の最終調整をしているし、秋水さんだって自分の準備があるからもう手伝えない。室伏と浜木綿の微妙な関係を考えれば、お使い小僧に簡単に頼んでしまうわけにはいかなかったのだ。

(もっとも)

室伏のほうは、浜木綿のことなど特に意識していない。ただそうしなければ、向こうは軽く見られたと勝手に怒り出すのだろうと、旦那さまは笑っていた。

「……………」

無言のまま、わたしは両腕で抱えこむようにしている風呂敷包みに目をやった。すぐにまた、前を見る。

(届けなきゃいけない)

でもそうすれば、あの後ろ姿を見失ってしまう。

追いかけてからでも届けられるけど、届けてから探すのは難しい――

「……っ」

軽く下唇を噛んで、わたしは再び歩を進めた。

(さっさと声をかけてみればいいんだわ)

そして人違いなら、すぐに戻ってくればいい。

――多分わたしは、それが彼ではないのだとちゃんとわかっている。

それでも確認せずにはいられなかった。

それくらい、視界に彼の姿を探していた。

彼の影を。

「あのっ」

歩きながら声をかけてみるが、前を歩く着流しの男は反応しない。まだ少し距離があるため、自分のことだと気づいていないのだろう。そう思ったわたしは、かわりに振り返ってしまった他の人たちに謝りながら、その背中との距離を詰めようと小走りになった。しかしそもそもの歩幅が違いすぎて、あまり距離は縮まらない。

少しでも相手の動きをとめようと、もう一度声をかける。

「すみません、そこの――」

白い着流しのかた、とわたしが言いおわる前に、その人は突然視界から消えた。どうやら店と店の隙間に入ってしまったようだった。

(隠れ路^{みち}かしら)

人の間を縫って、わたしもそこへ近づく。こっそりと覗きこんでみるが、そこは光が届かないのか、かなり暗いためどのようになっているのかわからなかった。当然着流しの後ろ姿など見えない。

(あれえ?)

目を凝らしながら、一步進んだ。

そのときだった。

「えっ……?」

暗闇のなかから、誰かに右手を引かれた。両手で抱えていた包みを落としそうになり、慌てて左手で持ち直す。

「はな――」

声をあげようとしたが、遅かった。布で口を塞がれ、そのまま頭の後ろで結ばれる。その間にもわたしの手を引いている誰かは進んでいて、わたしは転ばないようにすることで精一杯だった。引かれないように力をこめてみても、なにも変わらない。

(! もしかして、罠だった……?)

ふと、考える。

なにが目的かはまったくわからないけれど、もしあの白い着流しの姿がわざと彼を模したものなら、引かかる可能性があるのはわたしか――芙蓉くらいしかいないのだ。

「……っ」

(それなら、芙蓉じゃなくてよかった)

そう思うことで、わたしは心を落ち着けようとする。

焦るな。

状況を見極めろ。

罨とはこちらの不利益になることをいう。

この人たちが何者であっても、それはきっと変わらない。

(今わたしが、すべきことは――)

わたし以外の誰かに、なるべく被害が及ばないようにすること。

彼がいないからこんなことになったんだなんて、言わせないこと。

(自分勝手はもう嫌なの)

絶対なんとかしてみせる……！

引きずられるように走りながらも、わたしは決意した。



暗闇のなか、何度か角を曲がって、前を走る男はやがてどこかの戸を開けた。そして乱暴に、わたしをそのなかへと押しこめる。

(！)

擦るようにして、地面に頬を打ちつけた。鋭い痛みを感じながらもわたしは、やっと自由になった右手で口を塞いでいた布を取り払うと。

「なにをするの！」

わたしを捨てるように投げた男を振り返った。こちらのなかかほんの少しだけ明るいせいで顔が見えたけれど、まったく知らない男だった。ただにやにやと笑っていた。

「あなたは……？」

問いかけた答えのかわりに、戸を閉められる。

「待って！」

わたしは身体を起こして立ちあがろうとした。ところに横から手が伸びてきて、わたしが抱きしめていた風呂敷包みを奪ってしまう。

「!？」

そのときやっと、わたしは部屋のなかにも人がいたことに気づいた。素早く見渡すと、奥に四人の男がだらしなく座っている。そこへ、わたしから包みを奪った男がゆっくりと向かっていた。

「……………」

今度こそ立ちあがり、わたしもそちらへと向かう。

(きっと、後ろの戸からは逃げられないわ)

そうでなければ包みを奪ったあの人か、そのままわたしを抑えるはずなのだ。

自分でも驚くほど、わたしは冷静だった。――きっと、相手が人間だから。

「その包みを返して。中身はただの、山車の材料よ。あなたたちにはなんの役にも立たないと思うわ」

戻った男から包みを受け取った、中央に座っている主犯格だろう男に向かって告げた。

すると男はさもおかしそうに笑って。

「はっ、返せだって？ おまえはこれをうちに持ってきたはずだがな」

「えっ？」

(うちに？ ……って、もしかしてここ、浜木綿?!)

思わずわたしはもう一度、あたりを見まわした。床はなく地面がむき出しで、ずいぶん古い建物のようだけれど……。

「阿呆が。人質を宿に連れて行くわけがねえだろうが」

「！」

いちいち気に障る言いかたをする男だ。それに――

(人質って?)

わたしにそんな価値があるとはとても思えないけれど、もしわたしを本当に人質にしようとするならば、狙うのは芙蓉か、室伏か。

「――最初から、こういうつもりだったのね」

「材料が足りないのは本当だがな」

手のなかで包みをもてあそびながら、男は即答した。

「ま、おまえがひとりで来るのは意外だったな。てっきりあの餓鬼と一緒に来るもんだと思って、いろいろと用意していたんだが。おかげで楽に捕まえられた」

「……………」

あの餓鬼とはもちろん、芙蓉のことだろう。

(やっぱり一緒に来ないで正解だったわ)

わたしはほっと、胸に手を当てた。その手を強く握りこんで、もっと奥に踏みこもうとする。

「……それで？ あなたがたはなにを望むつもり？」

できる限りここでくいとめようと、思ったのだ。

主犯格の男はそんなわたしの態度が意外だったのか、身を乗り出すように座り直し。

「おまえ、うわさより気が強いんだな。気の強い女は嫌いじゃない」

にやりと笑った。なんていやらしい顔だろう。

「相手が鬼でなければ、わたしは怖くないから」

半分嘘を言った。向こうは当然わたしが鬼憑きであることを知っているはずだから、鬼の存在を思い出させようとしたのだ。そしてぼろを出させようと。

案の定周りの何人かが、びくりと反応した。

中央の男が、すっと立ちあがる。その手には、紙が握られているようだった。

「――明日、室伏の山車は出すな」

「！」

一歩一歩こちらへ近づきながら、男は口にする。

「そうすれば室伏の評判はがた落ちだろう？」

わたしと目を合わせて。

「何度もおまえを使って邪魔をしようとしたんだがな、餓鬼と鬼、二匹の鬼の守りはなかなか堅くてな」

「ふん」と、鼻で笑った。

「あなたたちだったんだ……」

わたしが伊波の町にやってきた翌日、配られた瓦版。そのせいでわたしは、わたし自身が鬼なのではないかと疑われた。結果、そんなわたしをかくまっているとして、室伏に迷惑をかけそうになった。……いや、おそらく充分にかけてしまった部分はあるのだろう。それでも室伏の営業にはそれほど害がなかったから、目立たないだけで。

(あのとき)

芙蓉は確かに、「どこかの宿の妨害か」と言っていた。その原因は他でもなくこの浜木綿で。おそらくそれ以降も、わたしが知らないうちに多くの妨害を受けていたのだろう。それを一一芙蓉と彼が、阻止してくれていた……？

(わたしを傷つけないように)

こっそりとかばってくれていたのだろう。

それでよけいに仲がよさそうに見えていたというのなら。

(わたしは本当に、阿呆だ一一)

気がつくとき、男はすでにわたしの横を通り過ぎていた。

「どこへいくの？」

振り向かないまま尋ねると。

「もちろん、この恋文を室伏に届けるのさ」

予想どおりの答えが返ってくる。

「おまえはそこの四人と遊んでな。阿呆なやつらだがうまいからな。結構楽しめるはずだ」

戸が開く音がした。

(なんだ)

閉じこめられていたんじゃないんだ。

「一一待って」

わたしは冷静に、声を紡ぐ。

(大丈夫)

だって、わたしは知ってるもの。

男の音がとまった。

「どうしてわたしがこんなに冷静でいられるか、わかる？」

振り返ったわたしは、自分から小袖の衿をはだけた。大きく胸を開く。

「！」

見せたかったのは乳房じゃない。もちろん一一契印だ。

「ねえ、わたしのそばに鬼がいないからって、油断してていいの？」

引きつりそうになる顔をこらえて、笑う。

「ま、さか……」

(わたし、知ってるの)

彼はこの契印を、わたしを守るためにつけてくれた。

次に近寄るのは、わたしの番だ。

「わたしと鬼は、この契印で繋がってるの」

じりじりと、間を詰める。

「誰かがこれに触れれば、すぐにわかるわ」

じりじりと、男は後ずさる。

「わたし言ったわよね。相手が鬼でなければ、怖くないと」

それはつまり、鬼は恐ろしいということ。

「ねえ——試してみる？」

「う、うわあああああああ」

叫びながら、男はものすごい勢いで出て行った。

(今のうち！)

衿を直しながら、わたしはそれを追いかける。人通りの激しい道まで出れば、一応の安全は確保できるだろう。そう考えて、再びの暗闇を走った。途中何度か転びそうになりながらも、走ることはやめなかった。手は自然と、左胸を抑える。

——確かに、そこにいるような気がした。

「本当に大丈夫なのか？ 楓」

いよいよ祭り当日。けれど芙蓉が浮かない顔をしているのは、わたしのせいだ。

「本当に大丈夫よ」

言葉をなぞって、わたしは微笑む。

ここは芙蓉の部屋。わたしたちは祭りへ出かけるための準備をしていた。

(昨日は醜態をさらしてしまったわ.....)

あのあと無事室伏へとたどり着いたわたしは、芙蓉の顔を見るなり安心して泣いてしまったのだった。まったくそんなつもりはなかったのに、涙がとまらなかった。.....やはり、怖かったのだろう。どんなに強がっても、契印持ちでも、わたしがひとりのよわい女であることにはかわりがないのだから。

「それより芙蓉、この着物、やっぱり着ないと駄目.....？」

これを着るようと渡された着物は、見事な仕立ての振袖だった。二十歳という年齢で着るには、かなり勇気のいるものだ。

すでにさっさと自分の着替えを進めている芙蓉は、実に不満そうな顔で。

「なんじゃ楓、地味すぎて不満なのか？」

「むしろ派手すぎよ！」

布地の色は目がくらむほどの紅。そして裾のほうに整然と配置された黒い楓が、金色に縁取られていた。通常ならば布地はあえて地味な色にして、蹴出しや重ね衿などに目立つ色を使うはずなのに、この振袖は正反対だった。

「しかもこれ、損料屋のものじゃないわよね？」

「なぜわかるのじゃ？」

「寸法がわたしに合いすぎだから！」

きっぱりと答えると、芙蓉が肩を揺らした。

「笑いごとじゃないわよ～」

こちらも通常ならば、祭りや花見など一時的に着飾りたいときには、損料屋から衣装やかつらなどを借りてしまうことが多いのだった。

(それなのに、芙蓉ったら.....)

わたしはあまり、自分のことに大切なお金をかけてほしくない。そりゃあお給料は必要だけれど、こういう遊びの部分はそれとは別の問題だった。

「ほれ楓、ふくれていないでさっさと着替えんと、わらわが先に終わってしまうのじゃ。それともまた、わらわに手伝ってほしいのか？」

「それも駄目っ、き、着替えるから.....」

そこまで促されてやっと、わたしはその振袖に腕を通すことにした。

それに安心したのか、手を動かしながら芙蓉は話を続ける。

「心配せんでも、楓は若く見えるから大丈夫じゃ。それにその振袖はのう、楓が寝ているあいだ

にこっそりと採寸して、呉服屋に仕立ててもらった高級品なのじゃぞ？」

「だからよけいに嫌なのよ！」

「それだけ父上と母上が、ぬしに感謝しているということ。じじさまを最期まで面倒見てくれたお礼だと言っておった」

「それは……だってわたしにとっても、大切なじじだったから……」

「それに、これは楓のためにつくったと言ったじゃろう？ 楓が着ないのならば捨てるしかない」

「そんなんっ」

顔を見合わせると、そこに芙蓉の笑顔があった。——意地悪そうな。

「残念じゃな楓、わらわはもう着替えおわってしまったのじゃ。おとなしく手伝わせるがよいつ！」

「わあ、いいってば、芙蓉っ」

「今さら遠慮するでないぞ」

「遠慮じゃなくって～」

そうして揉み合いながらも、どんどん飾りつけられてゆくわたし。途中からなぜか宿の女中たちもまざって、最終的にはこれまで一度もしたことがないほど……それこそお見合いに向かう娘子のように、頭からつま先までばっちり決められてしまった。

「ふ、芙蓉～……」

「情けない声を出しておらんで、わらわの髪を結っておくれ」

相変わらず芙蓉は、取り合ってくれない。

仕方なく櫛を手に取ると。

「まあ芙蓉さま、お髪ぐしでしたらわたくしがやりましょうか？」

声をかけてきたのは、以前芙蓉の付人あずさをしていた女中・梓まげだった。

(わたしはまだ下手だから……)

それを自覚していたから、梓にやってもらってもいいと思った。今日つくるまげ鬘はいつもの鬘よりも豪華なもの。その分難しいため、わたしがやると時間がかかるし、そのわりには形がいまいちといった、散々な結果になるだろう。

「お願いします」と、わたしは梓に櫛を手渡そうとした。しかし受け取ったのは、梓ではなくなぜか芙蓉だった。

「芙蓉？」

「わらわは楓に頼んだのじゃ。楓がやらんのなら、わらわはこのまま祭りに出る」

ふいっと、そっぽを向いてしまう。

梓と顔を合わせると、梓は困ったように眉の端をさげて。

「お節介でしたね。申しわけありませんでした」

そう頭をさげると、部屋を出て行ってしまった。背中を見送るわたしの視界に、芙蓉が差し出す櫛が割りこんでくる。

「おとなげないわよ、芙蓉」

「わらわは子どもじゃから、いいのじゃ」

「そういう問題じゃ……まあ、いいわ、結うわよ」

どうせ口では芙蓉に勝てないと、わたしはおとなしく櫛を受け取った。

「頼むぞ」

すると芙蓉はとたんに笑顔を取り戻し、わたしに頭を向けて座る。

「変になっても責任取らないからね！」

「大丈夫じゃって。わらわは楓のすこおし気が抜けたような鬘が好きなのじゃ」

「……褒めてるのそれ」

「もちろんじゃ！」

そんなふう楽しく会話をしながら、わたしは芙蓉の髪と格闘した。

——それなのに。

渾身の力作が完成したとき、芙蓉の顔はぐしゃぐしゃに濡れていた。

「芙蓉!? あ、あの……そんなにも気に入らない……？」

やっぱり梓にやらしてもらえばよかったのだろうか、芙蓉の後ろをおろおろと歩きまわってしまう。わたしの動きをとめたのも、やはり芙蓉だった。袖を掴まれて、ひっぱられる。自然と身体は芙蓉のほうを向いた。

「わかっておるのか？ 楓に髪を結ってもらうのは……これが最後なのじゃぞ……？」

「！」

芙蓉には言っていない。

彼が戻ってきたとき、わたしが選ばなければならないということは伝えてあるが、わたしがどちらを選ぼうとしているのかは、言っていないのだ。

(それでも)

芙蓉には完全に、見透かされているようだった。

「そう、だね……」

彼についていけば、当然伊波の町から出ることになる。芙蓉ともしばらくは会えないだろう。もしかしたら——死ぬまでかもしれない。

(わかっていたのに)

わかっていたつもりだったのに、わたしの鈍い心はちゃんと理解していなかったのだ。むしろ芙蓉のほうが、これから訪れるさみしさに敏感だった。

「芙蓉……」

「——いな、それでも泣くのは駄目じゃな。わらわは今日、めいっぱい楽しむと決めておるのじゃ！」

振袖につかないように指先で涙をぬぐって、芙蓉は元気よく両手を振りあげた。

(楽しく別れようとしてくれる)

芙蓉の気持ちが嬉しかった。

わたしもなって、腕を振りあげる。

「うん、そうだね！ 今日はいっしょ遊びましょ！ おいしいものもたくさん食べましょ！」

」

「本当かっ!？」

「本当よ。今日は『一日一品』なんて言わないから！」

「さすが楓じゃ！」

そうしてふたりして笑いながら、部屋を出た。

廊下を進み階段をおりると、待合広場で待ちかまえていたらしい宿の宿泊客らがいっせいに寄ってくる。

「芙蓉さま、あの山車、すごく素敵です！」

「ありがとうございましたっ」

「あんなに可愛らしい山車は初めて見ましたよ～」

そう、みんなで頑張ったつくった山車は、もう宿の前でお披露目されていたのだ。本物の花が少ない分、工夫してつけた花飾りがとても好評なようで、わたしたちはまた嬉しくなる。

「これから祭りに出られるんですか？ 気をつけて行ってくださいね」

「そうよ、他の宿のやつが狙ってるってうわさもあるんだから」

と心配の声をかけてもらうと、芙蓉は「大丈夫じゃ」と笑って。

「ちゃあんと護衛を呼んである」

「え？」

戸口を指差した芙蓉につられて、わたしも目を移した。そこには、すっかりおなじみになった秋水さんが所在なさげに立っていた。

「あれくらい身体の大きな男ならいいじゃろ？ しかも秋水は伊波では知らぬものはいないほど有名な講釈師じゃ。そうそう手は出せまい」

昨日わたしに起こった出来事は、当然話してある。だから芙蓉は先に手を打っておいたのだろう。

(でも……)

すみません、秋水さん。

わたしは心のなかで謝らずにはいられなかった。山車づくりもあんなに手伝ってもらって、当日もなんて、さすがに本人も予想していなかっただろうから。



約二十年、生きてきたなかで最も楽しい日だった。

一度も着たことのない振袖を、この歳になってから着て歩くなんてやはり恥ずかしかつたけれど。

「のう楓。ぬしがそれだけ派手な着物を着て堂々と歩けるのも、鬼のいぬ今日が最後じゃろう？」

胸をはって歩いておらんと、帰ってきた鬼に笑われるぞよ」

芙蓉にそう言われてから、しゃんと上を見て歩けるようになった。

最初に見たのは御輿みこしとぎよ渡御だ。東西南北それぞれ一基ずつ、計四基の御輿が伊波の町を練り歩く

。そしてその後ろを分限者などによってつくられた山車がついてまわるため、最終的にはかなり長い行列となるのだ。御輿を担ぐ人、山車を引く人たちもまたそれぞれに仮装しているため、ずっと見てもまったく飽きることがなかった。わたしが特に気に入ったのは、なんと俳諧の仮装をしている人々。顔に墨で詠んであるのだ。ひとり目が五七五、ふたり目が七七、最後のひとはまた五七五と、それが三十六句連なって、見事な連句となっていた。芙蓉の話によると、俳諧の連（愛好会）の人たちだという。

わたしはできればもっとそれを見ていたかったのだけれど、芙蓉に促されて街のほうへと向かった。時間はお昼どき、もちろんお目当ては食べものだ。いつにもまして様々な種類の屋台が出ていて、芙蓉は目を輝かせていた。約束どおり制限なく一緒に食べ歩いたせいで、途中帯がきつくて倒れそうになった。

夕方になると出店でかんざしや櫛を見たり、絵師に似顔絵を描いてもらったりした。できた似顔絵は、離れても忘れないようにと、芙蓉と交換した。それがなくたって忘れはしないけれど、お守りをもらったような気がして嬉しかった。

尾花さんと楸さんにも会った。相変わらず楸さんが尾花さんを追いかけてまわっていたけれど、それなりにうまくはっているようだった。

やがて花火が打ちあがり、もうすぐ祭りが終わってしまうことを告げる。

「全部で二十発じゃろうな」

芙蓉がそう教えてくれたので、わたしはまだほんの少しだけ明るい空を見あげながら、ひとつひとつ数えていた。

橙色のささやかな光が、一瞬間を彩っては落ちゆく。二十発では少ないかと思ったけれど、その間隔がかなり長いので、全部打ちあがるころには真っ暗になっていた。

あたりに出ていた店もいつの間にか片づけられ、緩やかに訪れる静寂。

（もう、終わってしまった）

祭りは終わってしまったのに。

彼は来ない。

月の光だけを頼りに、わたしはひとり佇んでいた。

街の中心で。

「一一楓」

芙蓉が声をかけてくる。横にいる秋水さんが箱提灯を手にしていたので、その姿を捉えることができた。

「風が出てきたし、寒いじゃろう？ 一度室伏に帰ろうぞ。もしかしたら向こうで待っておるかもしれん」

「それはないわ」

思わずきっぱりと否定してしまってから、わたしは俯いた。

「ごめんなさい……」

「いいのじゃ、わらわが悪かった。そうじゃな……あの鬼なら、ぬしが宿におらんとわかればちゃんと迎えに来るのじゃろうな」

もちろん芙蓉だってそれを、口に出すまでもなくわかっていて。ただわたしを宿で休ませるためだけに、知らないふりをして促したのだろう。そんなやさしさを、勝手な苛立ちから踏みにじってしまった自分に、また苛立つ。

(――そうよね)

これは間違いなく、勝手な苛立ちなのだ。

彼は「祭りのあたりには戻るだろう」とは言ったけれど、それはちゃんと戻れるのだとわかっての言葉ではなかった。言うなれば、ただの予想だ。それなのに、祭りがすぎても来ないから腹を立てるなんて、自分勝手以外のなにものでもない。

(もう嫌だって思っていながら)

わたしは結局それに走ってしまうのだ。

「楓、ここで待っておるのなら、この提灯を渡していくがどうする？」

「ううん……わたしも一緒に行くわ。どちらにせよ、彼が最初に訪れるのは室伏だと思うから」

安心したように、芙蓉が微笑んだのがわかった。まったくわたしは、いつになったらこの小さな主人に心配をかけずにすむのだろうか。

三人並んで室伏への道を歩きながら、秋水さんの講釈を聴いていた。せっかく用意していたのに、わたしたちのせいでみんなに披露できなかったのだ。お金はいらないから聴きやがれと、秋水さんは伊波の町一と言われる見事な講釈を聴かせてくれた。

(――あら?)

少しずつ室伏に近くなっていくと、わたしの耳になにか、しゃなりしゃなりと届く音があった。

「この、音……」

小さく呟くと、「え？」と芙蓉も耳を澄ます。

「……ああ、柳の揺れる音じゃな」

「柳？」

室伏の脇に立っている、あの大きな柳の木か。初めて訪れたとき、まるでわたしを拒否しているかのように揺れていた――でもそれは、やはりわたしの勝手な思いこみで。実際室伏はわたしを歓迎してくれたし、そのなかにはかけがえのない血の繋がりもあった。

揺れる柳。

その手はきっと、本当は。

わたしを追い払っていたのではなく、手招いていたのだ。

「? 楓……っ？」

わたしは走り出す。

(そういえばわたし、謝っていなかった)

彼がいなくなったあの夜も、柳はわたしの背中を預かってくれたのに。

わたしは一度も、お礼を言っていなかった。

今揺れている柳は確かに、わたしを呼んでいるような気がした。

ひとつ角を曲がると、もう柳の頭は見える。

そして徐々に下のほうまで見えるようになると。

(えっ?)

柳の幹に、ひとつの小さな灯りが見えた。

立ちどまって警戒するわたしは、もっとよく見えるようにと目を細める。向こうもこちらに気づいたのか、灯りが上下に動いた。

(ま、さか……)

再び走り出すわたしと同じ瞬間に、灯りも小刻みに揺れはじめる。向こうも走っているからだろう。

「楓！」

名を呼ばれた。それは確かに彼のものだった。

「……っ」

わたしも呼びたかった。知らない自分をもどかしい。訊かなかった自分を、もう一度恨んだ。

――でも抱きとめられて、そんな思いもすぐに吹き飛んでしまった。

「これから捜しに行こうと思っておったのだ。遅くなってすまなかったな」

わたしは首を振る。縦にも横にも。自分でもなんて反応をしているのだろうと思いつつも、とめられなかった。

すると彼は小さく笑って。

「こら楓、あまり顔を動かすな。もっとよく見せておくれ」

両手でわたしの顔を挟むと、自分のほうに向けた。

「あっ」

地面に落とされてもなお灯りを絶やさず、提灯のおかげでわたしにも彼の顔が見えた。

「左眼が……！」

前髪で隠したまま、決して見せてくれなかった左眼。かつて母にくりぬかれてしまったはずの左眼が、そこにはちゃんとあった。

「ああ、そもそも彼女を連れて帰ったら、戻してもらえる約束だったのだ。しかし死んでしまったからな……楓が渡してくれた日記のおかげでそれが証明され、眼を戻してもらえた。だが、眼がないまま過ごしていた時間が永かったせいか、なじむのに時間がかかってな」

それから彼は、もう一度わたしを強く抱き寄せて。

「心配しただろう？ すまなかった」

耳もとでそう囁いた。

「あ、あの、あの鬼は納得したの？」

急に恥ずかしくなって、わたしはついでもってしまう。

「しろ丸司狼丸か？ むしろあやつのおかげで、出してもらえたのだ」

「えっ!？」

彼はひとつ、さみしげな息を吐いて。

「あやつはわれがまだ人間であった頃の親友でな。鬼になればずっと彼女とともにいられると言
って、俺を鬼にしたのはあやつだ。しかしどうやら、あやつは彼女を愛していたようでな……俺
を介することで、彼女を鬼にしたかったのだろう」

「そんな……っ」

「その結果彼女が絶望し逃げ出してしまったことで、かなり責任を感じていたようだ。だからこ
そわれを捜していたし——左眼を戻すどころか右眼までくりぬかれそうになったわれを、助けて
くれた」

「っ……！」

そこまで聞いてしまったら、酷いもなにも言えなくなった。

(それに——)

彼が鬼となったきっかけは確かにあの鬼かもしれないけれど、選んだのはまぎれもなく彼な
のだ。彼が選んだすえの結果に、わたしが口を出すのはおかしいような気がして、噤んだ。

「ふたりともそのくらいにして、なかに入るがよい。これだけ暗いのじゃ、出発はどうせ明日じ
やろう？」

いつの間にかすぐそばまで来ていた芙蓉に促され、わたしたちは顔を見合わせる。彼の顔もわ
たしの振袖みたいな色に見えたのは、きっと提灯のせいだけではないだろう。

——結局わたしたちは、その日も室伏に泊まることとなった。

早朝。

わたしと彼は、室伏の前で向かい合っていた。芙蓉たちはまだ、起きていない。

「楓、そちにとってはここにいたほうが幸せだということは、十分にわかっておる。だからわ
れは、そちがどちらを選んでもきっと嬉しい」

その前置きは、彼なりのやさしさ。

「どうする？」

訊かれるまでもなく、わたしの答えは決まっていた。

「……わたしね、一昨日他の宿の人に捕まりそうになったわ」

「！」

「でもちゃんと、自分で逃げてきたの。あなたが残してくれたこの契印のおかげでね」

「あまり驚かせるな」

安心したように息を吐く彼に、わたしは微笑んでやる。

「ごめんなさい。でも、おかげでわかったの。わたしはひとりでも平気だって」

「——それが、答えなのか？」

わたしがどれを選んでも嬉しい。そう告げた彼でもやはり、眼の表情まではごまかせていなか

った。

(だけど)

これは彼を騙すためではなく。
わたしが自分勝手な自分と決別するために。
彼を心から信じ想うために。
必要な言葉だったから。

「……だからね？ わたしはわたしのためじゃなくて、あなたのために一緒に行くわ。あなたがそれを望んでくれるなら」

わたしが告げた瞬間だった。
彼の左眼から――ぽろりと、雫が落ちたのは。

「え……？」

声を出したのも、わたしより信じられないといった顔をしているのも、彼だ。

「――」

名を呼ぼうとして、わたしはまだそれを訊いていなかったことを思い出す。

「おそらくこの左眼は、覚えているのだろう。われは彼女に――^{もみじ} 椀に、同じことを言われたことがある」

「！ お母さんは、椀というのね。……あなたは？」

背伸びをして、落ちる雫をすくってあげながら、わたしは尋ねた。

「鬼としての名は、ない。人であったときは――」

彼は言いにくそうに、わたしから目をそらした。

「？ なあに？」

そしてちらりと横目でわたしを見て。

「『楓』と、呼ばれていた」

「えっ？」

「この紅い眼は生まれつきでな。……椀がその名をそちにつけたのは、おそらくそちが人間であったからだろう」

(人として)

もう一度、やり直してほしかったから？

たとえ自分は、戻れなくても？

(――そんなのは、駄目よ)

ちゃんとふたりとも幸せにならなきゃ。

思いついたわたしは、彼に新しい名を捧げる。

「じゃあわたし、あなたを椀と呼ぶわ」

「なに……？」

「それでね、もしあなたが人間に戻れるときが来たら——名前を、交換しましょう？」

あるべき姿に。

幸せに、老いてゆくために。

今度は彼の——椀の右眼に刻もう。

叶えられたときは、きっとその眼で泣いてね？

「楓……ありがとう」

椀は少しかがむと、自分の額とわたしのそれを軽く合わせた。その仕草が、抱きしめられるよりもずっと、胸のなかがかくすぐったくって。わたしは思わず笑ってしまった。

「笑うな」

そう告げる椀の声も笑っている。

「——ああ、よかった！ 間にあったかっ」

不意に道の向こう側から声がして、わたしは椀の肩の向こうに、馬を引く誰かの姿を捉えた。

「あれ？ ……損料屋さん？」

手綱を手にこちらへと走ってくるのは、じじのところへ行くために度々世話になっていた、損料屋の店主だった。よほど慌てて出てきたのか、無造作に結ばれた腰紐のせいで着物の襟が大きくあいていた。

「あんたらのことだからもしやと思ったら、やっぱりか！」

「あ、あの……？」

まだ少し息を弾ませながらも、店主は早口にまくしたてる。

「この馬を持っていきやがれ！ ただで貸してやるっ」

「えっ!？」

「あのな、俺も村に病気のおっかあを残して、この町に来たんだ。おっかあの薬代を稼ぐために。だがな、俺はそのうち、働くことに一生懸命になりすぎて、おっかあのことを二の次にしちまった。金さえあればいいと、思っちゃったんだ……。気づいたときには手遅れで、俺は八年もおっかあに会わねえまま、死なせちまった」

「損料屋さん……」

「けど、頑張るあんたの姿を見て、ほんの少しだが手伝いもできて、ずっと引きずっていた罪悪感が少しだけ和らいだ気がしたよ。それで許されるとは思っちゃいねえがな」

「それであのとき——」

『あの話が本当なら』

『少しくらい、返すのが遅れてもいいぞ』

秋水さんの講釈を聴いて、あんなことを言ったのか。

店主は恥ずかしそうに鼻の頭を搔くと。

「ただ一っ！ 貸すのはただでも、品物は絶対返してもらうからな！ 芙蓉さまを泣かせ

るんじゃねえぞっ」

「そうじゃよ楓！」

「えっ？」

応えた声に振り返ると、二階の窓から芙蓉が顔を出していた。いつの間に起きたのだろうか。

「これを持ってゆけ、楓」

言いながら、窓からぽーんと小さな包みを投げてよこす。わたしの背より高い位置でそれを受けとめたのは、椀の腕だった。

「わらわからの餞別じゃ」

椀から受け取って包みを開いてみると、なかにはふたつのものが入っていた。ひとつは、町のおしゃれな娘子たちが好んで持ち歩く箱迫はこせこ（小物入れ）だ。しかもそれは、昨日わたしが着た振袖と同じ柄である。おそらく以前からわたしのためにつくらせておいたものなのだろう。なかを開けると、昨日芙蓉と一緒に見た可愛らしいかんざしがひとつ、入っていた。そしてもうひとつは、こちらも特別につくらせたのだろう、男性用の煙草入れだ。しかも金華山織きんかざんおりの、たいへん高価なものである。

「……りが、とう……」

うまく言葉にならなかった。わたしたちをこれほど大切に想ってくれる人が、ここに存在していることが、なによりも嬉しかった。

「礼はあとで聞いてやる。じゃからちゃんと、帰ってくるのじゃぞ！」

芙蓉はそれだけ告げると、さっさと窓を閉めてしまった。

（きっと）

さよならを言わせないのも、芙蓉のやさしさなのだ。

それをわかっていたから、わたしは二階の窓に向かって、深く頭をさげた。

「――行こう、楓」

そんなわたしをしばらく見守ってくれてから、椀はそっとわたしの手を取る。

「はいっ」

顔をあげたわたしは、できる限りの笑顔で応えた。

「じゃあ損料屋さん。この馬、確かに借りるね。必ず返すから！」

もう一度頭をさげて、わたしと椀は馬に乗りこむ。

「待っとるよ」

手を振る見送りはひとり。

でもそれでいいと思えた。

この伊波の町へ来るときも、わたしたちを見送ったのはじじひとりだった。

（もう一度、始めよう）

わたしたちの旅を。

今度こそ、ふたりの力を合わせて。

きっと椀を、『楓』に戻してみせよう――

強い決意を乗せて、馬は走り出す。

見あげれば、如封山を包みこむほどの朝焼け。

どこまでも続く紅が、わたしたちの旅立ちを祝福しているかのように思えた。

(了)